

川柳塔



No. 827

四月号

創刊大正十三年
通卷八二七号

白川協加盟

西尾栞一周忌句会

西尾葉名譽主幹の一周忌にあたり、左記により追悼句会を開きます。こぞってご参加ください。

とき 5月11日(土) 午前11時開場

ところ 八尾グランドホテル(元ジバング日本海)

(八尾市八尾北5丁目1001)
電話(0729) 9413591

交通便 近鉄八尾駅下車・送迎バスがあります

兼題と選者(各題2句・午後1時締切)

「帽子」	宮西弥生選
「頓智」	小林由多香選
「ステッキ」	小松原爽介選
「温顔」	藤本静港子選
「宝」	岩井三窓選
「孝行」	橋高薫風選

会費 2000円(定本西尾栞句集)贈呈)

懇親宴 4000円(同会場で開催・予約制)

宿泊 朝食とも7000円(申込は川柳塔社事務所へ)

川柳塔社

いずも川柳会70周年大会

とき 5月19日(日) 午前10時開場
ところ ビジネスホテル ハアツ
(元大社カントリーロッジ)

◎出雲市駅から送迎バス随時運行

お話し 西田 柳宏子氏

兼題と選者(各題2句・午前11時半締切)

「緑」	橋高薫風選
「栄」	柴田午朗選
「独」	小出智子選
「古」	小林由多香選
「潮」	小池しげお選
「仲」	林 荒介選
「七」	久家代仕男謝選

◎謝選のみ事前投句(4月15日締切)

会費 1500円

懇親会 3500円(希望者のみ)

◎欠席投句は10000円(10000円切手10枚)を同封、4月15日までに連絡先へ。

連絡先 〒693 出雲市松密下町284

前夜祭

吉岡きみえ方 いずも川柳大会委員会
5月18日(土) 午後6時 同会場
4000円(宿泊共10000円)

主催 いずも川柳会

司馬語録

橘高 薫風

司馬遼太郎氏が二月十二日夜、腹部大動脈瘤破裂のため急逝されたのをテレビで知ったとき、氏は河野一郎や石原裕次郎型のスケールの大きい人だったと、その病名で直感した。

私が藤沢桓夫先生の元にしよつちゅう出入りしていた頃、先生のお祝い事があると、その会場の料亭に、詩人の小野十三郎氏をはじめ、作家や棋界の高段者、ジャーナリスト達が大勢集まった。受付係の私は来会者から会費を頂き、記念品を渡したりした。司馬氏お一人の来会もあれば、夫人と一緒のときもあった。田辺聖子先生に現在ご呢懇に願えるのも、そういう役目柄がきっかけになったからである。

司馬氏の文化勲章受章のときの言葉

「ごほうびはうれいしんですけれど、小説というものは書生でないと言けない。社会的身分もないし、一人前でもない。違ふ気分になるといけないので、明日からは忘れませう」

には降参したいほどに感銘した。

作家の厳しさに比ぶべくもないが、われわれ柳人の研鑽のなきには自らを恥じる事が多い。私には過去に苦い経験がある。それは、保育社から出した『川柳にみる大阪』で織田作之助の小説「夫婦善哉」を戦後の作と書いてしまった。映画の名作、森繁久弥扮する柳吉と淡島千景の蝶子の演ずる名場面の印象から、ついそのように記したのである。柳吉の名までミスした。そして、その本が織田作と最も親しかつた藤沢桓夫先生監修の共著であつたのだ。この惨憺たる軽薄さに、私は以来、書く資格なしと、出版社からの著書は何一つ出していない。

司馬氏の言葉

「歴史はみんなの共有財産だから、勝

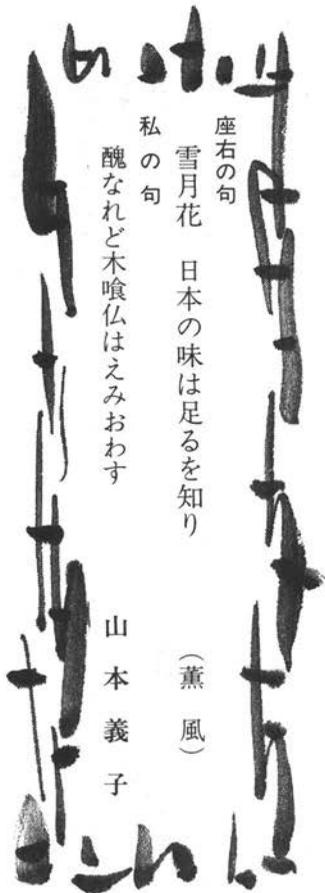
手なことを書くのは公園を汚すようなものだ。可能な限り、よく調べてきちんと書きたい」

というのもまた私の身に沁みた。

「史実に忠実に」は作家の良心であらうが、取材にも際限のない厳しさを想像する。私は路郎先生から、作品の引用は句集で確認するか、本人に問い直すか、極めて慎重にしないとイケない。間違いが孫引きされて、たつた一字のことも価値のない句になつて喧伝される怖れがある。これを守らない者は文章を書く資格がなく、大いに自覚せよと厳しく指導された。悲しいことに、これがまだ柳界では守られていないのだ。

ところが、また別のところに私の悩みが出来て来た。それは老齢による惚けのはじまりである。正しく書いたつもりが全然別の字を書いたり、ひら仮名を一つ飛ばしていたりが時折起きるのである。

司馬氏はつゆも惚けの悲哀をさびしむことなく、この世を去られた。それも厳しく美しいことに思える。



川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 司馬語録……………	橋高 薫風 ……(1)
我楽苦多……………	黒川 紫香 ……(2)
川柳塔(同人吟)……………	橘高 薫風 選 ……(4)
自選集……………	東野 大八 ……(43)
川柳の群像 大谷五花村……………	西田柳宏子選 ……(46)
古川柳 柳籠裏二篇研究(三十丁)……………	小出 智子 ……(48)
水煙抄……………	田辺 炎六 ……(52)
秀句鑑賞 同人吟……………	田辺 炎六 ……(50)
水煙抄……………	田辺 炎六 ……(79)

我楽苦多

黒川 紫香



昨年一月に起きた阪神大地震で、幸いに家屋の倒壊破損を免れたが、家財の多くは飛び散ってこわれた。娘や孫達と同居している私の

のささやかな一室も例外でなく、整理のつかぬ衣類や書籍に囲まれて無事だったベッドで寝起きしている状態の中で、先日、必要があつて本を探していると、一冊の謄写版刷りの小誌が出て来た。昭和五十二年から五年間、毎月、潮花・水客・紫香の句とエッセイを十頁くらいのものにし、拙い字で私が鉄筆を走らせて作ったものを合本して、『我楽苦多』と題したものである。

こんなつまらないものでも三十部ほど作つて当時の生々庵主幹、栗副主幹その他、地方を含めて幹部の人たちに配つたものである。汗顔の至りの代物であるが、丁度、水客が水煙抄(誌友投句)の選をやりはじめた頃で、三人とも意気軒昂で向う見すだった。『我楽苦多』には三人がその月に発表した句を載せ他に見た事、聞いた事、感じた事を短いエッセイにしたものを発表している。今読んでみると、当時の考え方や時代背景などが浮き彫

渺湖抄

茴香の花

「合格」

一路集「話す」

「電話」

初歩教室「酒」

各地柳壇（佳句地十選／肥後和香子）

大空のこころ (63)

三月本社句会

柳界展望

四月各地句会案内

■編集後記

小出智子選 …… (76)

八木千代選 …… (80)

谷口次男選 …… (82)

神夏磯典子選 …… (82)

土橋 螢選 …… (83)

吉岡 美房 …… (84)

橘高 薫風 …… (86)

橘高 薫風 …… (99)

橘高 薫風 …… (100)

橘高 薫風 …… (104)

橘高 薫風 …… (105)

橘高 薫風 …… (106)

座右の句

老桜のほつほつと咲く童心か

私の句

生みし娘がまた命生む朝すがし

(薫 風)

大河 未佐子

りになって、十分懐かしいものである。

年頭の号には頂いた賀状あるいは新春句各人一句ずつ百人余りの人たちが寄せられていて、今は亡き方たちが半数近くおられ、懐かしくもあり淋しくも思った。その三人も若柳潮花はすでに亡く、正本水客は毎月川柳塔自選句に高潔な句を発表されているが、お体が不自由で私一人がどうにか頑張っていて、時の流れを感じている。

水客は観劇と旅、潮花は踊りの師匠、私は一人身の気楽さで旅を主軸にして自由奔放に生きた時代で、我楽苦多^{ワガラクタ}では三人三様の生きざまを見ている。いみじくも潮花がこんな事を書いている。

「路郎先生は生前、三人が同じ性格だったからこう旨くは行かなかつただろうし、道も違つていただろう。三様の良さも出てこなかつただろう、と言われた事がある。鶴が正座しているような生真面目な水客とおしゃべりで動きまわる私の間を葉香がまとめて世話をしてくれたからだと思つ」

この五年間、リュックを肩に水客と共に日本全国を歩いた時でもあるので、その時の句と事柄が多い。何故か出雲へ再三訪れていて葉先生が愛された海潮温泉も水客から私、そして葉先生をご案内した所でもある。それやこれやのがらくたならぬ我楽苦多^{ワガラクタ}には、思い出も多いので大切に残したいものである。



橘 高 薫 風 選

弘前市 高瀬霜石

運の無い手相 拳にして眠る

善人がいつもの話むし返す

相談と言われ小金を用意する

使い古しの自信は捨てた方がいい

本当の味方仏頂面をする

たとえ明日死すとも本は離さない

米子市 野坂なみ

湧き水を辿ってゆけば神の森

神はきつと人より猿を大事におもう

クライマックスつけ髭が落ちちゃった

頭陀袋 軽いものから通りゃんせ

気力湧く棒を一本持っている

漫才師 気ままに喋るわけでない

竹原市 小島蘭幸

長女十六歳 僕は老眼鏡を買う

勝負師のイメージなどはない強さ

女子高生キャピキャピとして手にカメラ

陽はやがて沈む男の横顔よ

受験生ときどきピアノ鳴っている

机の上にオアシスがある父の背

黒石市 千葉風樹

歯磨きから始まってく嘘のいちにち

映画観て来た妻のキッスが上手すぎる

ドイツニーランドに働く人と遊ぶ人

鍵っ子の吹く鳩笛が詩になる

月光をさえぎる兄が立っている

身籠った子に人生を蹴られけり

和歌山市 西山 幸

火のように水のようにを希い居り

必衰の理へ咲く梅の花

蠟燭を立てたりしない誕生日

柏汁や ころこの風邪はまだ癒えぬ

亡父母の日があるだけの日捲りよ

風花へいよいよ白き聖母像

堺市 桑原道夫

立春や宮中に女人あるごとし

オルガンの音色が恋し雪催い

縄電車 風に突き当たり前のめる

唐突にてのひらを差し出されても

ぎんなんを炒りぎんなんの夜となり

海鼠食いながら無頼の話する

西宮市 亀岡哲子

顔を洗って十七日のお茶を飲む

ばたん雪 水玉模様になるわたし

人工島の鷗フランスパンが好き

欄干に鷗二十羽 鳩が五羽

泣き止んだ子を膝に乗せちひろの絵

デザートは干柿 京の鍋料理

藤井寺市 吉岡美房

寒い時寒い今年に安堵する

豪雪は他人ごとならず友が住む

戸惑っているのはきつとチヨコレート

梅咲いているお父さんお父さん

切っ先をかわす間合いは紙一重

権力に自縄自縛の嘘がある

東大阪市 森下愛論

老いひとり手酌に寒し肘枕

ちとくどい酒を叱って酔いが覚め

戦争の悪夢に嘘の裏表

髭剃って靴を磨いて何処へ行こ

無遠慮な大阪弁がよく儲け

ママチャリで歩道マフラーも春の色

唐津市 仁部四郎

病室のベッドに堅い世の掟

濃紺を佳しとしナスのカーディガン

不思議な名 菜袋の私の名

入院十日自作の経を読みはじめ

同病と目次交換私小説

院長のジョークを杖に退院す

海南市 三宅保州

六法も聖書も持っているけれど

棒切れがあると素振りをしたくなる

黒い靴ばかり並んでいる会議

三本の指に入っているあなた
地下鉄を出るととんでもない所
当日は風邪で欠席する予定

富山市 舟渡杏花

雪の無い街に旅して雪を恋い
紅いバラに佇つきさらぎの軽い飢え
空のどこかが壊れたような雪の舞い
水割りで飲み下そうか憎いひと
叱られてしぶしぶ咲いた花の種
ライバルは机上に花を絶やさな

竹原市 時広一路

千分の五十位は僕の鶴
歩幅ふと小さくなったなと思
てのひらに浮く人生で生きている
優しさとやさしさが会い水温む
スーツ ピシットとラ抜き言葉はご卒業
あるだけの色を使って舞う春だ

松山市 白石春嶺

勇退という粉飾の肩叩き
よくできた嫁御でうちの牽引車
スーパードで見た先生の薄化粧
常識の壁が親子で違い過ぎ
しずしずと燃える名人戦の駒
リストラの町に男の歌がない

椅子二つ並べて眠る四季の中

青森県 田中叶

感情と理性が浮かぶ水たまり

人形がうつる角度にある鏡

以下髪の薄い面々並ぶ席

くちばしにやましいところを突かれる

弘前市 小寺花峯

北を向く磁石も左遷だと思

ちっぽけな嘘も広がる水澄まし

唇の形で溶けてくる笑顔

歩と書いて何と読ませる父の辞書

口先の男で脱臭剤を持ち

弘前市 斉藤 苺

校長が青春してます雪合戦

地吹雪の村にこり酒抱きながら

震災再生ロウソクのなお悲し

単身の軒へ雀がきてくれる

ネットワーク雪の楽しさ教えます

弘前市 肥後和香子

温室のいちごのストレス真っかつか

甘酢っぱい嘘があるからまだ夫婦

くしゃみまで大きい子の足二十八

無条件に君が好きです雪静か

米とぎのリズムができて二十年

流氷初日 海 変身を遂げんとす
流水にころろ任せのあざらしが
雪原無限 鬼心仏心埋め尽す
見送れば雪降りかかる広い肩
ライトアップ雪像群の花のいろ

米子市 林 荒介

囃かも知れぬ億光年の星座
折々の風に揉まれて葦たちは
言霊と夜毎に遊ぶ盆の窪
まだ死なぬ愚直な父は刻むべし
先手を取られた弔辞を書いている

鳥取県 新家 完司

望むところの悪人面になってきた
横丁を曲がれば住所不定なり
柿の木もないかとカラスが嗤う
荒れ果てたところに柚子の木を植える
刑ひとつ選べるならば島流し

鳥取県 谷口 次男

総会のようにも見えるお葬式
あの男少し酔ったら首領になる
土壇場に備え力は溜めておく
この村の若さは盆に爆発す
安らかな地球の寝顔とんと見ぬ

鳥取県 土橋 螢

疑いを晴らした白いシャツを脱ぐ
野垂れ死にするのにちようどよい雪だ
悪人正機 悪人がひとりいる
人間になりたくなってお辞儀する
風花に逢いたい女が現われる

鳥取県 江原 とみお

鮮やかな夕陽のなかの負けいくさ
鬼ごろしで納得させる腹の虫
心機一転 先ず逆立ちをしてみよう
摩訶不思議 神棚の酒減ってくる
首に鈴つけられてから動きだす

米子市 川上 より子

枝先にみゆる幹の想い根の想い
母として悔いのない日は澄みわたる
六十の手習いアイウエオに戻る
尽くし足りぬと体重計に告げられる
春うらら何はなくても蝶の数

米子市 政岡 日枝子

人と逢ういとこだけを見て帰る
私だけ大事な時に眠ってた
耳鳴りへ時々混ざる冬の音
勝っても勝っても魂は傷つく
守備範囲 手広く持っている相手

鳥取市 武田帆雀

暗転の鍵フロントに預けられ
いじめっ子だけ有料の滑り台
トイレは共同一つ屋根の別居
大雪を訂正しない気象庁
ドリンクを一本 雪と格闘す

島根県 松本文子

雪ひらひらまた美しいを言う
みんなころんで大人になった膝小僧
星を降らせてくれる如月の愚痴へ
毒ぐもも消えて居座る寒気団
仮の世ものたりのたりと生きるべし

出雲市 竹治ちかし

早起きも煙草もお茶も亡父に似る
不揃いの器が妻の手で活きる
たまに見る青空 綺麗だと思ふ
良い事が続くと思調確かめる
仔を思い親をしたっている獣

島根県 小砂白汀

カラフトも還って来ました四月馬鹿
昨日まで歩いた牛の肩の肉
老妻病んでとんちんかんの受けこたえ
まだ死ねぬ何を食うても美味いから
ダイヤモンドダスト吸いこむ馬の鼻

和歌山市 桜井千秀

雪の日のまぼろし露と消えなすむ
喜怒哀楽のうず巻きだろう心音は
直感と言う武器がある闇の中
傾けた耳へさわさわ樹々が鳴る
一件落着 火の粉を浴びたもの同士

和歌山市 木本朱夏

手袋に人恋う指の潜みおり
胎内に憎しみの木が太るなり
摩り寄って来たのは猫か道化師か
サボテンになってわたしは立ち向かう
薔薇匂う夜は淋しい貌をもつ

和歌山市 堀端三男

粉飾のいらぬ會計なら出来る
遠ざかる尾灯へ余韻まだ火照る
年齢不問 女性交じると弾む会
余命表と預金残高見比べる
のんびりと遊んでいても禿げて来る

和歌山市 山田高夫

骨のある男腕さも持ち合わせ
酔いざめの水ごくごくと負けいくさ
目と鼻の先のゴールへ息が切れぬ
光る米 汗の結晶かも知れぬ
良妻で賢母で僕に向いてない

尼崎市 田中 薫

白魚を食うたびひらく餓鬼草紙
この国に老人多し寒卯

ものごころついて鈍痛身に纏う

風花のかなたの貨車は野晒しに

さざんかや何守らんとして黒衣の列

尼崎市 春城 武庫坊

寒星の一際光るのは母か

悔いることつきつき母の五七日

酒の粕焼いて丸めて母のこと

明日からは飲めぬぐい呑み手に重く

喪中です神に頼れず入院す

尼崎市 春城 年代

ひとに一人の母ありと いまさらに

きさらぎの月に恋しい人はなし

貧しさを人知れず抱く泣きもせず

洗濯機回る一人のごはん炊く

これはしつとかにんげんのまづしさか

伊丹市 山崎 君子

冬休み眼ばかり光る塾通い

焼き芋屋 夕飯時にやってくる

シクラメンうたた寝の娘の顔覗く

思案する老母の後ろに亡父がいる

堀ぎわの紅梅に雪絵のように

西宮市 奥田 みつ子

忘れな草ひとりで祝う誕生日
引出しに声を殺している秘密

ドクンドクンと逆流をする嫉妬

夢は茫茫 親しさを増す墓の土

冬枯れに笑えば笑顔返される

大阪市 西出 楓 染

また旅に出たいと思う旅帰り

フルムーン三日ほどならいいムード

生きている証 痛いところ痒いとこ

いいコンビだから当然喧嘩する

孫育ち犬を飼いたくなくなる

大阪市 上田 柳 影

春愁や心ならずも寝てしまひ

初大師仏の顔も寒そうだ

おそ咲きの牡丹 鎧はぬぎましよう

妻の留守へそくり探すのは今ぞ

いたましい落石の岩動かない

大阪市 板東 倫 子

着ぶくれて春遠からじ遠からじ

粉雪の舞う立春に卵立つ

手ざわりを楽しんでいる古書の市

アホやなあ芸人やっさん芸に死す

丑三つ時 地球のうめく声を聞く

源流で命に逢える水の音

堺市 板尾 岳人

花の名を知っているので薔薇を買う

味方だと思ふ桜が咲いている

火祭りがすんだ桜も散り急ぐ

手を合わす産寧坂に人多し

堺市 一瀬 福一

人相を見てから似合う服を出す

大宇宙 両手広げた中にいる

給料に合わぬビジョンを妻は持ち

ベテランという職人の太い指

あと一人コールが続く社の人事

堺市 近藤 豊子

折紙をおしえてくれる見舞客

保育室さいごのひとり抱かれおり

キヤラメルを一つにぎって児は帰る

ストーブや眼からだんだん暖まる

アメリカの鷲アメリカの目鼻立ち

豊中市 田中正坊

たかが風邪ぐらいで心萎えてくる

新世紀生きるいのちのスケジュール

嫌なことやめて気ままに生きんかな

うんうんとうなずいているひとり言

草の芽もボクもひたすら春を待つ

どん底の暮らし思考が乾き切る

指紋とはわが生涯の手形なり

天地無用大事な箱入り娘です

揉めながら響きあつて欠け茶碗

針ほどのミスを大きくする他人

高槻市 川島 諷云児

髪萎えてすこし弱気になる女

糸電話あなた握っているかしら

スタートは横一列でない入社

梅匂うやはりに迷うているわたし

家売って梅のふくらむ庭を去る

寝屋川市 堀江 光子

飲み仲間マスク姿で現われる

時計外してひとりの酒のひとり部屋

父の声聞いた気にして覚める夜半

肩書の順に座って無礼講

大琵琶に降る雪 凡て呑みこまれ

松原市 玉置 重人

市電に乗ってた時は輝いていた

りんごむく妻の背中は快復期

君からの年賀切手が当たったぞ

掃除ぐらいすると年金見得をきる

み仏も春がお好きなお身ぬぐい

松原市 小池 しげお

旧道できつと気付いてくれるはず
気まぐれな旗に味方は寝てしまふ

強情を通して寝たが腹がへり

鬼に撒く豆をたくさん買いにゆく

来てほしくない大阪のお客さん

羽曳野市 榎本 吐来

ご近所の犬をカタキにして余生

大寒のベッドに亡母が忍び寄り

日本酒が今日は敵にされている

竜馬逝く 司馬曼陀羅を跡にして(司馬遼太郎 二句)

終生を書生で生きた粹なべん

八尾市 高橋 夕花

南の病室 軽音楽が流れてる

オペ終り医師のジョークにやすらげり

眼の奥に消えてしまった昼の月

佳き人と会う風花が舞っている

落ち椿 大きな瞳すがりつく

岸和田市 岩佐 ダン吉

飲む家系 僕で終りになるらしい

敗れたが夢は握っている拳

献金がやっぱり効いているのだな

いきり立つ男に杯を満たし

こわいなあ満場一致だなんて

岡山県 二宗 吟平

三年忌 香の煙に声があり

本にする勧めにあれもこれもペケ

新婚へ新築をして離さぬ気

乗り込めばあら貴方もか貴方もか

甘酒がうまい一畑薬師さま

熊本市 永田 俊子

樹海冬 金の亡者がかくれんぼ

無礼討ちしたい借り手が多過ぎる

官官の頭を研げよ寒の月

落葉しぐれを歌う厨房の男子

バラの深手を笑っているカラス

大阪市 榊本 露児

終章は君が乳房に顔伏せん

あなたの胸の形状記憶しています

干し蛸に詩人の足がふととまる

観音堂の日溜りにいる冬の蠅

甘党の男なんだか汚ならし

大阪市 大河 未佐子

ねじり鉛ねじれた色の美しさ

半幅の帯で夢二のポーズとる

赤ちゃんの爪切りママは息を止め

メロンパン パック落すの忘れてる

当てなき旅にハプニング ハプニング

大阪市 井上白峰

本棚にわたしの知恵が眠ってる
しあわせは呼べば応える妻が居る

忌憚なき意見に詰まる篩の目
理想には遠いが今日も茶が旨い
激論の末に見付けたあみだくじ

大阪市 本間満津子

したい事いっぱいあつてもう八十
豆いくつ食べても知らぬことばかり
とんとの輪おいど向けてのしゃべり合い
二万キロ雪見に来た孫狭い部屋
水仙凜と優しく香る部屋に酔い

大阪市 藤田頂留子

何時の世も地球さわがすテロワイロ
ココア品切れテレビの力見せられる
背伸びして惜しむ二人をさく汽笛
別れないでほしいと涙ぐむ背広
紙切れでたやすく動く兆の金

大阪市 川端一步

定年に娘たちから感謝状
年金の手続き終えてうどん食べ
区役所でおばあちゃん達の可愛い名
梅林に人だかりあり絵も三分
孫に手をひかれ氷上千鳥足

大阪市 玉置英子

このあとはいつもの暮し小豆粥
うちらから殻破るのに角が要る
顔いただけの私が同罪に
何事もなしと一行花開く
福豆が満足顔の豆ごはん

大阪市 大塚節子

人の世の縦はうたてし横かなし
着膨れた肩の重さよ春の風邪
マスコミが古傷えぐる五十年
角はいや円もいやです多角形
歳月が仲を取りもつ姑と嫁

大阪市 渡部さと美

舞踊針字のお師匠はみな傘寿
日本刀すうつと美しい凄み
バスの夜の灯で読める若いなあ
風船の夢 天井でがんばれよ
トラック野郎 両脚のばすマンガ本

堺市 藤井一二三

生きてゆくノルマの汗のほろにがし
挨拶もはなやぐ京の初句会
鳩にパンをやるころ根が分かるまい
石磴の手すりの冷えも寒さなか
敵として開かずの門の寒きびし

堺市 柿花 紀美女

平成の鬼 豆ぐらいでは逃げず

信号をじっと見つめる車椅子

善人であるから矢印通り行く

札束に負けぬ自信をしかと持ち

一徹が父に似てきた子の眉毛

堺市 山本 半 銭

啓蟄の前にわたしの耕耘機

土塊と話し自分を取り戻す

早春賦アスパラの芽のいとおしき

待つ人にスイトピーの蔓のびてくる

よく肥えた土から祖父の声をきく

吹田市 古川 喜美子

カリカリと飴噛みくたく震災忌

吊皮を二人で持って揺れている

この皿が割れば良いと思ってる

よく笑う私とっても飴が好き

回り道してまで急ぐことはない

吹田市 山本 希久子

六十歳 従いたくはない私

顔を出すだけでよろしい貫禄よ

惜しくない命などない蟻の列

ただ足るを知る私のエプロン

原子の火よりも焚き火のあたたかさ

吹田市 瀬戸 まさよ

フィヨルドに地球の神話創る旅

オーロラは怖し美し北の国

凍てついた夜は童話のマッチ売り

無責任流行る平成嘆き節

カラスまで定時出勤定時帰路

吹田市 栗谷 春子

孫たちもおとなになって七回忌

影らしき程度の控えゆるされる

寒風にみみずくの耳つめたかろ

想像もつかぬ悪にも打つ手あり

遠景は風にやなぎが揺れている

茨木市 井上 森生

五十九の悟り雪道に沓の跡

天地を祝う日の出のウォーキング

噛みしめる顎の力でわかること

突如崩落 襲う自然の恐ろしさ

宙に舞い宙から招く火の祭り

守口市 結城 君子

朝のゆめ狐からきた招待状

風花のなかで春が戸をたたく

立春になって寒肥を思い出し

ミクロの世界がどうあろうとも ちらし寿司

防犯テレビ キッチンに置いたらどんなやろ

守口市 森川 まさお

風花は地上に跡を残さない
きれぎれの記憶を紡ぎものを書く
底冷えの部屋で遺品を片付ける
独り暮しだんだん吝になつてくる
冬の道 月に雁字搦めされ

寝屋川市 江口 度

母のやすらぎ ぐつぐつ黒豆煮えている
相当無理をしたなと思つている
まだ食べてないのにおいしいかおいしいか
ストレスたまる風船をふくらます
もういいかいもういいかいと猫やなぎ

寝屋川市 平松 かすみ

グラス替え少しリッチな誕生日
小判よりホカロン好きと抱いている
好き好きと書いたガラスも割れました
ひとり旅 席も気ままに右左
改札は株主券へありがとつ

枚方市 海老池 洋

煌煌と窓 パチンコ屋受験塾
ふんふんと爪を切り切り聞いてない
招き猫 まさに男を掻く構え
森の仲間へ消灯ラッパ吹く夕陽
隅にいて裏も表も読んでいる

枚方市 八田 敏

トランプのように抜き出す診察券
遠かったお江戸へバスの一眠り
ミステリーも一役を買う村起こし
根性を捨てて余生を円く生き
霜柱 軍靴で蹴つた遠い日よ

東大阪市 指宿 千枝子

急ぎ足で去るのは大人の恋だらう
叫んでる泣いてる夜の救急車
スミレ色に夕ぐれて春猫の恋
おぼろ月 老いには老いの夢ありて
じいちゃんがばあちゃんよりも可愛くて

羽曳野市 吉川 寿美

ワイングラスに沈めるほどのブライドか
愛憎の糸吐きつづけ女蘭
アイコデシヨいつも後出し鬼である
なりゆきで揃えてしまった男下駄
ひとり相撲だったか風が吹きぬける

八尾市 宮西 弥生

やる気だな風が強く吹いたのも
水ぬるむ長い話に切りかえる
あんなことこんなこと男と女の知恵くらべ
手荷物が似合う老母のちびた靴
明日もまた他人に支えられ風の中

八尾市 宮崎 シマ子

大阪府 八十田 洞庵

吊橋で頼りにならぬ人と知る
チョコレート買ったらハートつけてくれ

寄り道のわけを知ってる影法師
早送りしよう愛まだ見えて来ぬ

気落ちする日は夫の酒に便乗し

被災地で輝く目もとポランティア

この左遷 上司の小さきなおもい

片意地が匠の腕を光らせる

女でも闇討ちぐらいしてのける

こだわりの料理は客を選んでる

八尾市 高杉 千歩

京都市 都倉 求芽

小宇宙 何処も彼処も銭のこと

プラン練る地図にただよう春の色

手紙魔もワープロになり戯作めく

コンピュータの指示におろおろする善人

歯を磨く鏡のわたしに目もくれず

妻の着る服がだんだん赤くなる

自己中心これが自立と気がついた

確実に一日たった髭がのび

アンケートの歳 二つほど殖やしとく

風船をある日重たくする報せ

岸和田市 古野 ひで

西宮市 門谷 たず子

頼もしい女丈夫がいて街なごみ

ライバルの死角で背伸びばかりする

ぶかぶかの靴が楽しい水たまり

郵便受けの有情無情が手に重い

歯車のひとつが欠けてからの愚痴

祖父の木刀 男はやはり頼もしい

おん目許おんやわらかき仏たち

ひびきの鈍い鐘をきいてる凡夫婦

母なれば五十路の息子たしなめる

マニキュアを無色に老いに甘んじる

岸和田市 田中文 時

西宮市 西口 いわゑ

議論より野次迫力のある議会

初対面 真紅のばらを思わせる

分別が仲々付かぬ酒の量

おでんぐつぐつ暖かい雪になる

日に一度 孫抱きたたくてペダル踏む

風花や文一通も届かぬ日

謙遜の言葉素直に受け取られ

注いでみて酒豪と分かり意気が合う

生ゴミを車で運ぶ令夫人

勢いよく豆もまけない仮住い

西宮市 秋 元 てる

お隣のベレーと波長合いそうだ
中古車を点検するよな眼で見られ
賞めたのが孫でも悪い気がしない
此処は一丁しゃべると軽く見られそう
日本もわたしも存在感うすれ

西宮市 久 保 まさお

友の訃を届け木枯らしうづくまる
よくぞまあ生き延びておりいくさ越え
いのちあり今年も祝う初雑煮
そのいのち大事にせよと亡友の声
留年のブルーシートに遅い春

西宮市 林 はつ絵

青信号カエリがコワイまで唄う
今日もまた生きる証の欲を出す
苦しみもせずにコピートを奪い合う
おしゃれ着を衝動買ひする春の風
身の程を倒けねばまたも知らされる

西宮市 池 田 善 守

定年後妻との暮しノーサイン
胃カメラで肩に力が入りすぎ
漢方のききめはまるで揚子江
残念の肥やしの上の大輪よ
何気ない言葉思わぬ波紋呼び

宝塚市 丸 山 よし津

プロの勘 大きじ小さじ使わない
飾らない母の大きな笑い声
残る日はなるべく軽く歩きたい
何よりの宝 丈夫なこの手足
仮の世の人生すべて演技かも

宝塚市 吉 田 笑 女

やすらぎを求めて仰ぐ青い空
旨過ぎる話は何時も聞き流す
ふり向けば目が合う熊の縫いぐるみ
我慢することにもなれて進む老い
亡き夫の写真へ時々愚痴を言う

加古川市 吐 田 公 一

去年とは打って変った春うらら
アナス・ホリピリス思い出させる白い菊
小木か大樹か先が見えぬ苗
夢と期待どこまで続くランドセル
隠居したとは名ばかりすぐに口を出す

奈良市 天 正 千 梢

優越感邪魔してるとは気がつかず
母と言う文字は哀しき老いてなお
宰相の白眉重たし多事多難
問答無用 官官接待受けている
一人旅 相馬の空に堪能し

生駒市 北山悟郎

金婚によくぞ此処まで僕と妻

金婚の美酒に笑顔の僕と妻

戦傷を励ます軍歌耳の底

平和に心の芯があくびする

野心未だ捨て切れずいる喜寿の坂

奈良県 上田翠光

退院の五体に寒さのしかかる

老人医療 身にしみじみと退院す

被災者の身に連立のまだ無能

これでもかと自社連立へ石が落ち

自然破壊のお灸のように石が落ち

奈良県 長谷川春蘭

真昼ふと慕情が胸を噛む孤独

お世辞でも元気ですなど医者のお

人生の余白に生きて句を作り

寿の一字にこもる親の恩

福寿草 花芽数えて亡母の歳

和歌山市 垂井千寿子

育児書の通りにならぬおもちゃ箱

厳しさと優しさを抱く白障子

笑い袋をいつも溜めてる三世代

合格電話 被災の孫から春が来た

シクラメンと風邪引き一緒に南向く

和歌山市 細川稚代

凍てる夜に凍てる訃報を頂きぬ

風邪の床 猫が添い寝をしてくれる

アンテナを張りめぐらしてひそと住み

3Bで書くから嘘は隠せない

明日手術 作り笑いをして送る

和歌山市 青枝鉄治

人間の弱さを噛む札の束

フランスの酒は飲まないことにする

人間のエゴを知ってる募金箱

陣とりのゲームが好きな宮仕え

先生の方にもいじめある暮らし

和歌山市 池永正雄

雑草と呼ばれながらも芽の準備

特権のように冬眠続けてる

迷うわな同じ駅にも裏おもて

跡継ぎのおたまじやくしが多過ぎる

句読点打つようにして歳一つ

和歌山市 堀畑靖子

君の胸借りて今年も聞わん

夫なる人に痩せよと言われたり

クリーンが売り物しんどないですか

長寿万歳と素直に言えますか

色彩の魔術師乗せて春の風

和歌山市 福井桂香

花の夢 充たしてバステル画の中へ

菜の花で飾るゆりかご夢の籠

かあごめかごめみんなやさしい輪でまわる

ほんわかと縞馬 小馬クレヨン画

この坂も夫婦湯のみが知っている

和歌山市 田中みね

その気にさせてとんと誘いの来ぬ話

必要とあれば火の輪もくぐります

輪に入る自分の殻を脱ぎ捨てて

不愉快な電話でひと日つぶされる

火の鳥となるに毛並みが淋し過ぎ

和歌山県 西口忠雄

一票の重みにグルマ蹴飛ばされ

なんじやいな化粧直してパチンコか

大騒動したのに安し呱呱の声

長い長いトンネルだったパブル線

羊水にぽっかり浮いた父なし子

弘前市 蒔苗果林

地吹雪の底に堪えてた菜の甘さ

爺婆の雪掻く屋根が雫する

ブランコの男女を見てる路の臺

小さい火 大きな火事になりたがり

百姓の息子蜥蜴の尻尾のよう

弘前市 中山雅城

絵付けした鳩笛はよく鳴いている

苛めにも正義の味方飛んで来ぬ

お互いに初恋もあり夫婦仲

君が代で揚がる旗には涙する

シベリアの寒い話はもう御免

十和田市 阿部進

子や孫にかけてやりたい虹の橋

川柳に追われて老いる暇がない

そばときじさげて教え子やってくる

叩かれて寺の木魚が満ち足りる

風邪引いた医師がのんでる玉子酒

青森県 諏訪柳々

職退いて人の去り行く音を聞く

福寿草 家庭内離婚あざ笑い

娘が死んでお地藏様も紅を引く

亡き人に生きてる以上に思われる

受験期に無縁仏にも掌を合わす

青森県 西谷大吾

北国の神の子雪の子寒立馬

里人の温もりに泣く雪女

母恋し赤き風車が春を呼ぶ

またひとり遠い旅路に冬の雨

出稼ぎの親父おとに津軽の雪便り

(鐵郎改め)

仙台市 川村映輝

体調快適古女房も若く見え

体調快適確定申告書きあげる

節分に鬼は「住専」と絶叫す

古い二人鬼は病で福はなし

すばらしい脚線美に会う春うらら

東京都 山口新子

美しい嘘 危篤の父の枕元(父の死)

私とよくわかるらしい瞳のうるみ

呼吸停止何と無力な手も足も

命消ゆガラガラ崩れ落つ積木

33キロ脚絆のひもの長すぎる

町田市 竹内紫鏑

軍務以来となれば男も長電話

葬場からヒタヒタ語る二合びん

喜寿すぎて合掌と書くふみが増え

おばあさんゲームソフトをかう列に

親友の電話 棋譜にて詰みをいう

静岡市 安本晃授

風止んで蝶の笑顔が花になる

月光に反射している鬼の首

一枚の絵皿に老いの朱を溶かす

追い越してひしひし迫る孤独感

来世へ届く直球持っている

静岡県 藪田 猥杏

最後まで白状せずに逝った父

この夢は猿に食われてはならじ

大寒や温そうなほど無精ひげ

夢の中に恋文を忘れて来た

給料伝票 住専補てんが差し引かれ

鳥取市 両川 洋々

散りぎわの美学辞表をたたくつけ

紅引いた女が刺客かも知れぬ

人間不信じつくり月と語ろうか

炎え尽きた男の旗をたたもうか

札束を餌にライバル釣ろうかな

鳥取市 西村 黙光

腹立てて禁酒の壁を突き破り

このごろは女房時々酌をさす

掌を合わせ欲の深さを思い知る

忍術を教えてくれる縄ノレン

官僚よ銀行幹部よペテン師よ

鳥取市 岩原 喬水

天女には更年期などないだろう

お神酒なら生き神様も喜ばれ

ねずみの娘ねずみの孫を産んでくれ

子ねずみに親の年金かじられる

パチンコに負けて門松蹴って出る

倉吉市 野口節子

歳月と言う妙薬に助けられ
気だるくて白紙のまんま過ぎて行く
勇氣百倍 見つめてくれる友がある
鮮やかに咲いて根っこに恩返し
春爛漫うぬぼれ鏡ありがとう

倉吉市 松本よしえ

食卓が真四角 五人座れない
春なのにサティアンの窓開かない
多情多感 狙いなかなか決まらない
がむしやらに走り出すのは素人だ
願いて大風呂敷とお付き合い

米子市 石垣花子

老母の胸をはなれぬ蝶の一つがい
姑はもう礫を飛ばす氣力失せ
巢に風を通して頭切り変えよう
病む指でつれづれに生む紙の鶴
近頃は雑魚も意見を言い出した

米子市 中井ゆき

あとなんべん雪が積もれば春になる
今少し無のままであれ雪世界
普段なら普通列車でゆくとこ
顔出したみどりエールがきこえるかい
うず潮の奥に乙姫さんがいる

米子市 金山夕子

水仙が開きいい事くる予感
幼なじみがローカル捨てて世田谷区
片方の翼が折れて小休止
真剣なおもしろ話しませんか
春雷に爪が元気に伸びてくる

米子市 茂理高代

包むのは母の勤めと生きて来た
立直れそうな足場を探してる
見えぬ目に母の星だろよく光る
悲しむと夫が叱咤をしてくれる
玄関を磨きわたしの顔にする

鳥取県 松下たつみ

スリッパの汚れが目立つ診療所
本心を気付かれまいと眼を合せ
雪とけるテンポで春が動き出す
矢印がここで途切れている自由
見えなくていいものが見えきらわれる

鳥取県 岩崎みさ江

トンネルを抜けると雪のない世界
飽食の膳へ祈りが欠けてくる
艶やかなもの失ってから悟る
風船がしほむおどけた声だして
旅人が見ている屋根の雪おろし

鳥取県 石谷 美恵子
機嫌よく酔うて銘柄にはふれぬ
カラオケの渦へ溺れている音痴

滑るまでは夢も希望もありました
山陰の雪は重くてあったかい
餅腹を減らしに海を見に歩く

鳥取県 上田 俊路

若い日はその気になった死が怖い
捨てて出た故郷の姿遠く見る

立ち止り過ぎて逃げ道見失う
力にはなれず一緒に泣いてやる

原爆の二字はなかった巴里祭

鳥取県 黒田 くに子

猫なで声でお世辞言うからうたがわれ

猫抱いてくどい話は大きらい

真相は猫が見ていた夜のドラマ

猫に遊んで貰ってるのはおばあさん

まねき猫も手がだるかろう不況風

松江市 舟木 与根一

実情は婦唱夫随と皆知り

関白のふり金婚でやめにする

助かったことにえくぼが母さん似

とんびが鳶を英才教育し

結局は佗助と住む核家族

出雲市 尼 れいじ
捨て鉢な心支える爪楊枝
ミカン一つ玩んでる春の宵

味方にも敵にも見えてカスミ草
リンゴ一つ抱いて有権者が迷う
良い酒に明日の心配などしない

出雲市 板垣 草丘

岩山も雪崩も春は恐ろしい
長寿国 陰で若者死に急ぐ

そのけの顔の妊婦へ道譲る
笑ってる妻で何にも聞かだせず
留守番が下手で何でも払います

出雲市 園山 多賀子

涅槃図にあやかっつて寝る癖がある
五体少し錆びたか捻子が掛からない

プライドを消し潔く和に融ける

若干の自己満足か風花舞う

六十年紡ぎ続けた赤い糸(ダイヤ婚)

出雲市 岸 桂子

仕切り直して六十路の風に立ち向う
無策の日 今日は大根でも煮よう

ぎりぎりに飲み込んでおく寒の水

申告を済ませ確かに軽い足

私の書いた書初めちと斜め

出雲市 久谷 まこと

島根県 佐々木 鳳 笙
今死んでも何等不思議のない俺だ(検査入院 3句)

点滴の針一本に上手下手

丁字帯してアンギオに身を任す

黙秘権いじめられてるサインかも

美辞麗句かしてくくる女文字

岡山市 井上 柳五郎

なににでも首を突っ込み半端者

なにごととも一存で決められぬ父

ばあちゃんが親より気揉む孫の縁

後もどりできぬ時間にきょうも暮れ

平成ももう八年かはや迎え

岡山市 川端 柳子

鬼も仏もわたしの時間食べにくる

外は木枯し いくさの庭を語り出し

夕やけ小やけボクにわたしに明日がある

新聞に載らぬ我が家の祝酒

花衣 二十歳の春の匂いたち(孫娘の成人式)

倉敷市 田辺 灸 六

金輪際意志は曲げないかたつむり

扶け合う情けが春を連れて来る

手をつなぎ歩きましょうよ生きましたよ

失速の駄馬も休まず歩きます

食違う意見を裁く弥次郎兵衛

献立にあの子この子の顔うかぶ

進学で気重な母に子の笑顔

娘の晴れ着一回きりの帯結ぶ

古里のでこぼこ道が我が人生

新刊書手にズッシリと夜は更ける

出雲市 小白金 房子

朱塗はし色香戴く京の膳(妙心寺)

白菜の堅さをほぐす陽の温み

みそ豆がふつくら煮える寒の入り

餅を焼く遠い亡母の角火鉢

辞書片手 生きる女の一行詩

島根県 堀江 正朗

勤鈍る恐さ点字打つとき読む時も

夢を追う盃だから楽しいな

箸握り生きる戦いだと感謝

惚け上手 忘れ上手に日は暮れて

あまえすぎ笑って妻は知らんかお

島根県 西村 早苗

春の調べが流れるとこで待っている

仏壇に赤いネオンのあるマツチ

何程を話したろうか花手桶

釈迦さまと生きる話をしています
ちよつと小石につまみずきました顔の傷

岡山県 小林 妻子

善人と呼ばれて仮面脱ぎにくい
どの罪も赦した如し雪の白
たった一つの椅子に炎のありつたけ
待合室でこんな待てる医者通い
就職の孫は高級乗用車

岡山県 矢内 寿恵子

海越えて被爆の国のメッセージ
原点に戻る傘寿の童唄
古き良き時代の頃は貧しけり
振り向かぬ覚悟の背なが炎えている
失恋の重さを抱いている乳房

岡山県 山本 玉恵

正直を取柄の母の一代記
ひとつずつ愛をこぼして悲をこぼし
風下で情けを拾い苦を拾い
やさしさにからまりついて生きのびて
二人三脚ひもをしめたりゆるめたり

岡山県 荻野 鮫虎狼

養殖魚 海の恐ろしさを知らず
平成のモラル桃太郎不在
地に還る落ち葉は音を消して落ち
住みにくい日本を三日だけ離れ
過去を消す雪燦々の日本海

岡山県 大石 あすなろ

恋暦すったもんだで刷り上がる
愛も哀も背負うてはるか女坂
あの日から胸の余震がまだつづく
遠雷に耳をかしつつ髪洗う
袴はく大和ごころにふれてはく

岡山県 福原 悦子

あかぎれの母の昔に封をする
迷い路 森の向こうのうす明かり
廊下拭く心の中を拭くように
一人居る時計の音に人恋し
子の別れ笑顔を崩すまいとする

竹原市 森井 菁居

熟年の意地ハードルが苦にならぬ
ジャンケンポンたとえ負けてもくじの順
不漁つづきの市場で冬の語が突る
満ち足りて苦労した日を忘れかけ
冷え切った部屋の独りをもてあます

竹原市 岩本 笑子

日本の厳しさも知る渡り鳥
キャベツ サクサクお好み焼きは好きですか
開けゴマ年女です元気です
雪の罪 人の罪ふとミカンむいている
進路決定ポテトサラダを子と作る

竹原市 石原淑子

モノリザも口を開けば夜叉となり
来る来ない花占いの残酷さ

なれあいの嫌いな水仙凜と咲き
くれなずむ淋しさそつと姫鏡
記念日のたんび絆が太くなる

広島県 藤解静風

住専という動脈瘤を病んでいる

村山党首の眉にさがっている月日

裏表紙あんたが目立つことはない

ドラマみたいに軽く言うてはくださるな

みかんのスジ取りながら聞く孫自慢

柳井市 弘津柳慶

急激の寒波に寢床の夢覚める

寢覚から夢の続きの過去を追う

過去追って腕白時代を振り返る

十七回忌 新婚時代を振り返り

一人身に七草かゆをあきらめる

下関市 石川侃流洞

御飯よへ猫が真つ先来て座り

ひねくれた茶碗を寂にして茶席

尻に敷かれてじんわり鬼を飼いならす

ワンカップふつと孤独が深くなる

老春謳歌 五七五の輪に乗って

香川県 木村あきら

讃岐路にタライウドンのある温み

ロボットに狙われている俺の椅子

雲海を天女のように空の旅

仁王さんも笑顔に変わる春日長

ドラが鳴る極楽行の船が出る

香川県 工藤吟笑

老母さんの命も削る山男

万障を越え老坂を登り切る

丸腰で頼みにつれば断れず

青筋を立てるほどではない話

叶わぬと知りつつ卒寿狙ってる

香川県 山地マツエ

消しかねた思慕が私をけしかける

想い皆 亡母に傾くちぎれ雲

足を病む私いたわる手が温い

つつましい妻が抱いていたマグマ

足裏から春を先取りする素足

香川県 池内かおり

風体で値踏みをされているらしい

シルバーの中にも派閥あるそうだ

悪妻と口が滑ってさあ大変

ああ言えばこう言う夫が居て楽し

斯く申す私も少しいける口

松山市 宮尾 みのり

ブランド志向だと顔にまで書いてある

東京の水でいきいき生きてます

おっぱいという娘の乳房見ていたり

顕示欲ほど才能がついて来ず

ささやかに行く我が道を許されよ

松山市 丹下 美津子

学園通り背筋伸ばして老いの見栄

松風とページ繰る音 夫の部屋

このへんでブレイキ利くといのお酒

神様も起きろ起きろと宮太鼓

縁は異なるものコンビ結んで五十年

今治市 越智 一水

人生は夢中になれば窮屈だ

道ひとつ二六二文字なり

清貧に生きて一輪ざしが好き

物忘れ笑って楽しいものにする

亡き母を思えば俺は愚にかえる(三回忌)

高知市 北川 竹萌

ねずみ年 七度迎えた日向ぼこ

故里の匂 文旦を子に送る

せせらぎの音懐かしく里小道

独居老 買い物真つ赤な自転車

八十半ば生涯の夢 筆学ぶ

北九州市 梅田 宣司

余命まだ御用納めをせずに済み

晩酌へ回覧板が上がりこむ

寄せ書きの一字はみ出ている強さ

釣り銭のような余生の使い道

先祖の地捨てて同居に踏み切れず

福岡県 横地 東川

雰囲気を変える口紅ほころばし

妻の愚痴もう頃合いと眼を開く

Uターン君も来給え清い水

突然の来訪いいこと持って来ぬ

ゴルフ場またも獣道を消す

唐津市 久保 正剣

減反で案山子がタウンページ繰る

すんなりとホステス寿司屋までは来る

美人とは思えぬママの店が混む

閻魔大王に喧嘩を売ってすぐ帰れ

広辞苑父の風格匂う書架

唐津市 山口 高明

死んでから聖人君子と言われても

錆止めに焼酎いっぱい立って飲み

チヨキ出して妻に聴いてる心付け

責任は何時も中間管理職

ホイホイと親もゆけない国へゆき

和歌山市 福本英子

大声で叱り小声で謝られ

見比べる癖 哀しい性を募らせる

バレンタイン亡夫にも赤いリボンつけ

雪の嵩聞いてツアーがまとまらぬ

岸和田市 藪野 けい子

お勝手に接待うけるとなり組

帰宅時をはかり届ける連絡簿

土産買ひその品で場を盛りあげる

住所 名を告げて祈願の初詣

和歌山市 田中輝子

引力を信じて恐しシャンテリア

剣山の花うつくしく咲いている

鑑賞に堪え続けてる春の壺

深い想いに幾度も沈む冬の箱

豊中市 湯浅馬洗

おおみそか破れ障子も梅さくら

紅梅画 掛けて待ちます梅見月

ピリオドを打てぬいじめの遺書悲し

ご時勢の電子手帳は人見知り

和歌山市 宮口克子

アングルを変えて春には春の景

夢叶うまでの闘志を大切に

わたしにもアッパーカットしたい人

悪い男ネ流し目顎を手の甲に

竹原市 古谷節夫

真白い紙へ無欲な孫の線

還暦へ無欲になれず万歩計

通りゃんせ住専だけは通しやせぬ

山を消し海を汚して開発か

鳥取市 美田旋風

真実を隠し官僚生きのびる

倒産が続く大地に遠い春

子をみんな味方に妻の手が荒れる

親の背を子らがようやく視野におく

出雲市 伊藤寿美

白日に晒され仮面ひび割れる

たわいないプライドがある古い家

書き割りの虹を眺めている喜劇

鎮魂の神戸に送るチョコレート

黒石市 相馬一花

酒五合飲んで養生したつもり

根回しが利いて議場の大拍手

投げ網で否応なしに三次会

論争がぶり返しそう慰労会

弘前市 岡本花匠

数え唄 悲しみを干す女傘

春よ春 翔べぬ男も髭を剃る

あじさいの念仏度せず色変り

棘抜けず儂い夢の花キリン

岡山市 時末 一灯

有効期限すぎて検診うけに行く
大過なく手柄もミスもないお方
勝越して力士の風船しほみだし
駄菓子なら旧町名の方がいい

出雲市 吉岡 きみえ

安眠に馴染んだ昔のふとん着る
他家のこと気にしてあるく口八丁

倒産の話が雪がもつてくる
無為無策 雪はしずかに降りつづく

唐津市 田口 虹汀

祖父の味子の味これが親の味
お灸から忍の一字を頂いた

自画自讃 米寿の壁は堅い壁
ドクターストップなれど今宵は祝米寿

豊中市 吉田 あずき

春探す小鳥のひよいと木の間影
福の豆いつか地球をころげ落つ
老姉妹 母の思い出くい違う

これ以上言うたら帰り道がない

和歌山市 玉置 当代

大根の湯気いただいて和みだす
八等身の輪に入れない二重顎

終着へ走る車輪が軋みだす
飛躍する明日へ組んでいく足場

和歌山市 榎原 公子

文芸の端で喘いでいる詩人
大山がフアイトフアイトと符する
ハスキーに落ち葉が春を揺り起す
口紅の彩から春へまっしぐら

西宮市 牧 渕 富喜子

乗り越えたひとつ一つで建った家
ゆっくりという捻子忘れそうになる
この家に合わなくなつた古たんす
室温に騙され咲いたアマリリス

藤井寺市 田中 透 太

行末はどうあろうとも昨日 今日
波風も立たず一日持て余す
昨日とは違う顔してバスに乗る
もう一度火の輪くぐると春が来る

鳥取市 春木 圭一郎

自分史に伏せ字の部分増えてくる
ドラマ見て涙ぐんでる吾である
へば将棋 持ち駒持ったまま終わる
国境のない地球儀をながめてる

和歌山市 山口 三千子

姑に仕えて嫁に逆らわず
まだ余力蓄えてます枯尾花
元栓が緩んで話漏れている
いつまでが女だったか姥桜

生き方を変える眼鏡を選っている
これ以上祈れば神に叱られる
眠らせぬようにときどき木をゆする
春そこに愛の子感か山笑う

京都市 松川芳子

春を待つ息吹ききつつ散歩する
朝靄の白くかげるは亡き人か
四五人の心おきなき花の旅
一生の思 二年目で忘れられ

大阪市 奥田良子

冬の疵へ甘茶たまわる灌仏会
春の宵ほうれん草を茹ですぎる
ソファーに沈むと思考力抜ける
亡夫よ亡母よ長谷の牡丹へ来ています

寝屋川市 柴田英壬子

過疎の村 氏神様も淋しかろ
旅のメモ天気予報も書き入れる
エリートも結局保身と金の人
マージャンの勝負なつかし古手帳

豊中市 月原方郎

神様のいたずらかしら指を切る
スタートが日に日に迫る胎内で
おトイレに時代おくれの世界地図
雪々々 ウイークデーのスキー場

富田林市 松本今日子

栄枯盛衰 祖父の袴が物語る
姿見に相談ばかりの旅仕度
野心も策もみんな吹っ飛ぶ高笑い
にこりともせずには笑いの種を蒔き

岡山県 福原辰江

いつの間にか七十越えてしまつたり
酒だけの楽しみ七十生きている
賑やかな朝が戻つた子と同居
孫たちのわるさも黙って見てすごし

奈良市 宮口笛生

家中が気疲れしてる入試時期
親馬鹿もほどほどに子の自立心
プライドの高さ水には流されず
目標は夢の卒寿と思えども

東大阪市 安永暁子

幸せな妻の笑顔に出るあくび
電話ベル聞いて故郷母元氣
我が人生 妻いる幸せかみしめる
職人の仕事に妥協などはない

枚方市 二宮山久

寒梅が一雨ごとに丸くなる
パスポート十年ほどは生きる予定
土いじりすると心が風ぐ不思議
ゆっくりと前進してる亀の自信

出雲市 富田蘭水

雪々々 ウイークデーのスキー場

岸和田市 寺田甚一

節分の豆 住専に投げ捨てる
宇宙から廃品回収エンデバー
ハイテクの暮しを雪が狂わせる
平凡に暮して日々の日記書き

岸和田市 芳地狸村

ブランドのカバンに弱いお母さん
四君子の魅力に酔っている私
震災の友から届く年賀状
譲り合うところ忘れている戦後

笠岡市 松本忠三

五十肩忘れた頃にのしかかる
賽銭の多寡ご利益の浮き沈み
関東と関西夫婦馬が合い
九十六の母お元気でねずみ年

今治市 野村京子

笑っても泣いても回る夫婦独楽
ネジを巻くゆっくりと巻く古時計
各駅停車 生命線は長くない
大根役者で人斬りをするかもしれない

川西市 松本ただし

風邪ひきへ寝付きの早いたまご酒
有終の美を説く雪の落ち椿
ひゆるひゆると風も怒涛を越えてきた
びしょ濡れのおんなを抱えてくれた郷里

富山市 島ひかる

極悪にしたマンガに教えられ
コーヒーが孤独の夜を深くする
冷戦へ蟹のみやげがよく効いて
B Mの息子と参る善光寺

岸和田市 三輪通彦

如才ない人だが足りぬ人情味
生真面目も思えば損な生れつき
浅学を補う辞書が手放せぬ
豊年の雪も降りすぎ疎まれる

高槻市 井上照子

生きるには肩に少し荷負うと良い
ママゴトを思わず鍋で目玉焼
一つ山越え崖の上立ちつくす
星の君ワンカップすら蓋開けず

大阪市 清水絹子

明日の日を記した亡夫の薬箱
バイク近し亡夫の音かと足うごく
階段の下からいつも妻の声
流水よ岸辺の春もついそこに

羽咋市 三宅ろ亭

これからは清富清貧二元論
どうかかなあ見出しは宰相土下座した
パツファロー一日違いの電話くる
踏音パカパカ神馬能登路に春配る

香川県 成重 放任

みちのくの地唄を載せた箸袋
当て馬がいつか主役を奪い取り
当てられて見返すほどの年でなし
無農薬でも虫食いを避けて買い

大阪府 松尾 柳右子

犬猿も酒席徐々に打ち解けて
新社員 職場の空気ピンと張り
町内は良い子ばかりか声聞けぬ
花々に誘われ遠出フルムーン

吹田市 茂見 よ志子

東京へ孫は大学春たしか
駆け抜ける月日に诗情追いつけぬ
冗談に流せぬ話 腑にたまる
誰にともなく泣いてお題目

堺市 吉本 菁風

原作を読まず映画で観てすまし
ハリハリ鍋にされずみず菜も淋しそう
客扱いされて息子を訪れず
四面楚歌 嘘で自分を支えてる

宝塚市 嵯峨根 保子

気分転換また一つ買うイヤリング
しめ縄を買って家計簿つけ終る
大波が来ると男になる顔だ
スタートにライバルが居た宮詣

堺市 黒田 真砂

早々に友の計がくる寒椿
逝きし友しのべばわびし月の暈
鍋ばかり三日続いた窓の雪
昨日までの私と違う冬銀河

島根県 榑原 秀子

十二夜の月ひそやかに光らない
吹雪く音 夜が長しとも長しとも
温度計と見比べている病夫の顔
私に一番似合う割烹着

廿日市市 林野 甦光

ボンボリの支度が出来て花を待ち
文化財の家並とこどこ剥げかかり
大臣が出てこの村も陽が当り
大あくびして善後策考える

出雲市 小玉 満江

温かい心になると背も丸い
七十を忘れて飛んだ川の幅
ストレスを丸出しにして赤い服
月曜日 粉雪を追うランドセル

岡山県 池田 半仙

須磨 明石 舞子の松を見た明治
天無情 暑い夏やら寒い冬
雪月夜 朝が来たかと間違える
青空市 品が少ない日曜日

主流派を抜けてゆっくり旨い酒
宝塚市 上田佳秋

弱虫が冬の夕陽に懺悔する
年金の暮らし忘れて穴馬券
寸断の脳の写真を見る怖さ

鳥取県 幸家單車

渡る世に福と鬼とが同居する
ただ酒は美味しいもんだ飲み過ぎる
驚いた目玉に渦が巻いている
三途の川お手々つないで渡ろうよ

大阪府 靱山隆

AカップEカップあり衣替え
絵馬堂を春一番が叩いてる
ワープロで打つものでなし梅だより
たらの芽に友の笑顔が浮かぶなり

鳥取市 小谷美ツ千

宇宙からすごい曼陀羅図を覗く
真直ぐに見つめられてはうろたえる
擦れ違う女と小さい渦が巻く
椿ぼとり噂の渦中から消える

大阪市 北勝美

頑張れの言葉も禁句になる世相
騙されて感心してる四月馬鹿
立春の掃除機吸いこむ豆五粒
ヘルパーさんの顔見え病妻よい笑顔

豊中市 井上直次

口中へ飴の甘さが虹となり
土壇場で飴ひとつぶの底力
ライバルと飲んで胸襟開かせる
節曲げて摺んだ椅子は放さない

米子市 白根ふみ

粉飾の深さに民が憤る
美しく老いると言えば赤面す
どの部屋も点けて一人が温かい
オンザロックの底は夢と挫折と

倉吉市 野中御前

人間ドック車検より不安です
こぼれ種しっかと土に根をおろす
百歳の祖母の寝顔は仏様
老いの坂 駑馬にきびしい大吹雪

大阪市 神夏磯典子

かげろうの中でイメージふくらます
群集の一点となり安らぎぬ
古いけど乙な味だす母の鍋
よく食べる人やなあお腹が呆れてる

鳥取県 太田幸枝

紅葉の大山に来て雪に会う
大変だ空から石が降って来た
雪しんしん私の罪を消すように
雪の夜 無言電話がよくかかり

大阪市 寺井東雲

満月が忘れられない夢の後

イチローのサインと一緒に寝てる孫

花粉症少し可愛い瞳に涙

洗濯機 当り馬券も回ってる

鳥取市 前田一枝

雪国で南の島の魚食う

湯豆腐を囲み二人の歯が和む

気の弱い鬼も豆まき逃げ遅れ

ひざねらう猫に好みがあるらしい

交野市 福崎しげお

初詣 賽銭子の分孫の分

成人式 晴着が膝にからみつく

雪かきでしびれてますと電話口

平成に拳骨親父はやらない

岸和田市 原 さよ子

植木市 小さい春を買ってくる

口ほどの敏感さなく老いを知る

書くことも無用コピーがさつと出来

巣立つ子へ母の目もとが濡れている

西宮市 菊池 トミエ

七色の野菜雑煮は母の味

思案つき先ず一服の茶がうまい

三叉路に我が行く方を思案する

オーイお茶どこかで亡父の声がする

倉敷市 井上富子

寝袋の主が説いている美学

老いの膳 昔なじみの煮ころがし

寒風へ擦れた野良着が干してある

コネの無い女性に寒い仕事口

豊中市 安藤 寿美子

白椿 司馬ファンとして喪に服し

又一つ大正の灯が消えてゆく

家中にも余されて元気です

あの家も解体ひろい空ばかり

藤井寺市 福元 みのる

巢作りの下見に雀ペアで来る

政治には今ひとつなり人気知事

寒稽古 猛者も言葉は震えてる

回り道したけど今はいい夫婦

倉吉市 淡路 ゆり子

黙々と退院札状書く夜更け

病んで見て子の優しさを思い知る

寒の水飲んで若さを明日につなぐ

寒波が続く虫も小鳥も何処にいる

鳥取県 林 露杖

春の彩バックミラーに映る雲

新しくなれる長生きならしたい

左義長に孫の書初 高く揚ぐ

音も無く雪積む夜の薄明り

富士宮市 渥美弧秀
連休を訪う客もなく富士静か
明けゆく森のいのちの中に老い二人

教え子の還暦をきく昔の譜
拜金の世情をうとみピアノと詩

弘前市 相馬銀波
真冬日が長く身内の計が続く
地吹雪が続くもぼくは旅半ば

降り止まぬ雪 七つの顔がある津軽
ありし日のちちから届く夢は檄

高知県 小澤幸泉
もう一度やり直しても今がよい
夢なぞはなかつたように飯を食い

天と地と二つの国を今日も生き
障害を忘れさせない朝の靴

十和田市 小笠原敏人
傘寿なる迂余曲折の陰みせぬ
祝宴も傘寿頭に歌い惚け

披露宴拍手係に招待し
披露宴招ばれる人も幸せに

松江市 柳楽鶴丸
妻に言う言葉ごめんネと有難う
毒舌は一流 他に何もない

結婚記念日せめて今夜は水入らず
大空に落書きをしたことがある

和歌山市 岩本美智子
黄昏れて抜けたかごめの輪が寒い
母の樹に裏切りはなし空の青

鬼遣しみじみと見る豆の数
負に生きる倅せもあり冬銀河

豊中市 稲葉眞郎
出し雑魚に三つ指突いて待つ小猫
モーニング着たらくさめを手で堪え

入学期 走って揺れるランドセル
逝ってから何年経つか墓詣

豊中市 滝北博史
とも白髪サファイア婚の初明り
妻の背へ小さな声で鬼は外

佗助に愚痴をこぼした古稀の妻
妻のためいまか死にごろ喜寿の春

鳥取県 乾隆風
欲をひっぱると福の神が笑う
奥さんの笑顔へ酒が甘くなる

仏壇へ笑ったままの落ち椿
泣き笑い石のかけらも丸くなる

米子市 澤田千春
シクラメン血が見えますね生きている
しがらみと格闘の末見た灯

タンスから夫の軍服ころげ出す
忘れずにろう梅が母つれてくる

豊中市 江口 明光
雪国のドカ雪ニュースになつて
年金のスタート月だ淋しいね

咲く時と散る時知つているサク
冬の喪が明けると芽吹く御堂筋

高石市 浅野 房子

暗黙の了解けだし友なれば

搾るだけしほれば用のないレモン

堂々巡りしては溜息深くなる

無駄金を使つて心充たされる

倉吉市 最上 和枝

主婦翔んで洗濯物が雨に濡れ

柚子風呂にストレスばかり浮いている

お隣を追われた鬼に軒を貸す

輪の外で鬼が聞き耳立てている

大阪市 河井 庸佑

威圧的態度で敵が増えただけ

行き過ぎた勇氣思わぬ穴に落ち

交渉へスパイス効かす世辞も入れ

時節待つ作戦立てて腰据える

鳥取県 土橋 はるお

寝たきりの父がワンカップを空に

酒の出ぬ席だと判り帰ります

庭石が古い墓石だったとは

血税を吸い込む渦が巻いている

鳥取県 田村 きみ子
販売機で気つけ薬を買つて飲む
胸を開くとゴクンゴクンと音がする

まだ七十 生への炎真つ盛り
懲りもせずおんなじ経を読む日課

鳥取県 土橋 睦子

ふるさとにわがまま置いて嫁きなさい

青空をみつけていった雪の精

私の愛を探してかくれんぼ

待つ人もないふるさとを恋しがる

岸和田市 長谷川 呂万

洋酒提げ彼が来たのは頼みごと

初詣 振袖の娘は稀少価値

満点のパパが隣家にいる弱身

ひと言で配所の月を見る憂き目

箕面市 岩津 ようじ

納税者敵に首相のいい度胸

おおらかに銀行が飼うゴマのハエ

お雪見はテレビがおよろしいよう

しゃんと立っているのに席をゆずられる

河内長野市 井上 喜酔

赤信号消えて嬉しい酒の味

はなし種切れた茶の間へ欲しい酒

お歳です日に一回は聞き違え

ご自慢の喉をツアーでびひやらり

八尾市 吉村 一風

和歌山県 小倉 アサ

名ばかりの春へ桜もちぢこまり

隠しごとしている酒は落ちつかぬ

若者はぶつきらぼうにティッシュくれ

頑固やなあそれがかあんだ豆腐好き

西条市 片上 明水

神餅を下げて補欠としてミカン

ご近所の鬼よりホトケ先にボケ

松並木だけが歴史の保証人

うどん屋で飲む茶は腰が落ちつかず

京都府 稲葉 冬葉

震災を語る裏番組の幸

復興へきれいな事では生きられぬ

個人ではどうにもならぬ支援の手

意志表示下手で書くへのへのもへの

宝塚市 中田 純次

震度八 退陣劇で年が明け

のどかなり先を急がぬ老いの旅

救急車あすはわが身と思う日も

散歩には頭も足もペアルック

鳥取県 乾 喜与志

にぎやかな女湯向けに唄流し

暖房の効いた楽しい雪まつり

五センチの雪に預けた散歩道

食膳のバナナに半身の不随

手を振ってからが自信のない別れ

ツーショット見せたい時期もあるそう

残照へ影も大きくなる余力

一歳とがっぷり四つに組む妥協

米子市 光井 玲子

小説の世界に浸る雪しきり

いく度か越えたハードル抱いている

父特訓やつと肉じゃが物にする

秒針に翻弄される無策の日

鳥根県 藤原 鈴江

老春と思いなおして起ちあがり

春雨に風情をそえる花しづく

若き日の苦節を宝として生きる

懐かしい日々もあつたと思いたし

米子市 田中 亜弥

春連れて卒業式が二つある

ボランテアの心はいつも沸いている

仏壇に入りどなたもやさしそう

ひめくりと気ままな旅をゆるしあう

鳥根県 石飛 水煙

神の国春雪春を呼びもどす

齢重ね老残磨く筆を持つ

二歩進み三步下るも人生か

ピエロ役 母は笑顔で受けて立つ

豊中市 松岡久留美

先輩へ心配り過ぎてうとまれる

この話 損と知っても断われず

嫁ぐ日の姿 鏡に止めておく

ほっとする指環が光る娘の手

大和高田市 岸本豊平次

木守柿 帯だけになりふくらむ芽

ふる里の薪風呂の湯に亡母と遇い

イミテーション人によつては光り出し

榎原の参道 軍服も杖でゆき

岸和田市 高須賀金太

侃侃諤諤 魚すきが煮つまつた

居酒屋で人を何人斬り捨てた

息子は弾んで僕を越えていった

ワンランク望みを高く置いてます

香川県 川崎ひかり

職安にリストラの首並んでる

適当に通じないのがコンピュター

あの人の街を渡つて来た風よ

明言をさける何か裏がある

米子市 林瑞枝

くしゃみしてこの世の鍵をてのひらに

いち枚の我がオアシスの絵を遺す

穴の開くほど読んで次代を先取りに

磨崖仏ちちの横顔美しい

神戸市 木村貴代子

みそ雑煮 母の実家は雪の中

仮店舗せめて売り声景気よく

万物の生命 貪り繁栄す

大泣きに小さきいのちのほとばしる

宇部市 平田実男

人間が七変化さす札の束

立春が真冬日 恐縮する暦

女房も元気で留守が良い時も

外堀も内堀もない僕の城

砂川市 大橋政良

わくら葉が一枚病める音で落ち

青空を吸い込むようなあくびする

俺によく似た月だ半分欠けている

父の髭 別人になる父がいる

神戸市 山口美穂

地下のマグマよ聞えましたか地鎮祭

去年の今頃お日様神戸では見えす

性善説信じ政府には裏切られ

電話口 老母は同じことばかり

大和郡山市 坊農柳弘

踊り子がひよいと出そうな天城越え

柿の木のつぼみ膨らむ法隆寺

雪解けに白い花咲く津軽往く

ニューフェイス無礼講から先ず覚え

和歌山市 玉井豊太

良い方に車輪がまわるので怖い
手をつなぐと握り返してくれました
罪が匂う花と歩いた昼の月

一合の酒で喧嘩がはじまった

富田林市 片岡智恵子

諍いへとぎ汁をゆっくり流す
世紀末の踊りよ唄よ花の下
叱られた言葉のままで子を叱り

水墨画 芸術の縁知り初める

大阪市 稲本凡子

あなどった風邪に十日もねばられる
古家で部品ばかりを取りかえる
曾孫を抱くこの児の時代ふと想う

つぎ足しの命 錠剤からもらう

茨木市 島元ふみ

妻君は美人で娘父親似
急かされるようで不安な改札機
好きと違って差し障りない齡らしい

急いでも待つ人居ない時が来る

大阪市 清水利武

春ウララ仁王アベック見て笑う
陽春へゲートボールも活気づく
立春に年寄り泣かせの雪が降る

金持ちへ味方しているのが政治

八尾市 山下美津留

勇退という名で職場放り出され
付加価値の温みで今を生きている
彼女から電話と言えば飛び起きる

家計簿に叱られてます酒の量

豊中市 辻川慶子

眼差しはいつもわたしに遺影の亡母
ずんずんと伸びてゆく樹は下を見ず
過去はみな遠くなりけり梅ひらく

手のとどく位置で祈ろう千羽鶴

横浜市 菱田満秋

改築の間取りを未亡人が変え
億という所得は隠す価値がある
千円の子算で土産悩まされ

糞虫の這うを見ていたい日和

堺市 中野櫂子

木樹も人も響き合ってる春の彩
初対面 川柳の輪のあたたく
不老長寿一も二もなくココア党

おはようおかえり大阪弁をはんなりと

西宮市 山本義子

SOS金魚が水におぼれている
脂肪太り欲もいくらかついている
古井戸をのぞくと黒い涙落つ

山に惚れときどきふられ懲りず惚れ

藤井寺市 高田美代子
うっとり春の花屋に立っている

約束の日に着る服に陽を当てる
夜霧かな私をふっと遠ざけて
オムレツを焼いてる妻の顔をして

茨木市 堀良江
振り袖の背の寒さは気にならぬ

核実験終了平和とは寒い

雪蒲団まどろんでます鬼瓦
今は亡き著者のサインの光る本

和歌山市 北山好笑

手の中の小さな理想握りしめ

他愛ない話へ他愛なく答え

又聞きその又聞きでする安否

いろはにほへと うなじへ続く余命表

芦屋市 黒田能子

まともに戻る春風が吹いている

泣き止んだたった一つのキャラメルで

春ですね鳥籠の鳥さわがしい

一日単位の幸せこれもよし

和泉市 西岡洛醉

二十四時 鐘を叩いて風化する

妻謀反 無言出て行く市場籠

年金の窓辺へ語る雀達

五十年 日進月歩瞬く間

美祿市 安平次 弘道
たくあんに御飯 健康保証され
ちぎり絵の一つに女夢を盛り
教科書がそろい勉強したくなる
結論は出たが先だつ物が無い

大阪市 町田達子
北風に山茶花いのち敷き詰める
デンチ着て今日はすましている小犬
隙間風いかにと仮設の冷え想い
被災地の隅々春を希う

伊丹市 小熊江美
二世帯住宅建てて老後を安堵する
再会をしてから女甦る

夫逝く日 雪が頻りに舞うていた
戦地から来た文遺書になったとは

鳥取県 津村八重子
春よこいばつかり温い春よこい
水澄んで川のせせらぎよく歌う
素直に生きよ川の流れにさからわず
野に咲く花のように明日を待つ私

奈良市 米田恭昌
着飾らぬ妻はそのまま美しい
崩れても崩れてもまた積む積木
節分会おどける鬼の哀しい目
甘酒と笹酒に酔う恵美須講

奈良市 米田恭昌

節分会おどける鬼の哀しい目

甘酒と笹酒に酔う恵美須講

着飾らぬ妻はそのまま美しい

崩れても崩れてもまた積む積木

節分会おどける鬼の哀しい目

甘酒と笹酒に酔う恵美須講

着飾らぬ妻はそのまま美しい

崩れても崩れてもまた積む積木

節分会おどける鬼の哀しい目

甘酒と笹酒に酔う恵美須講

着飾らぬ妻はそのまま美しい

崩れても崩れてもまた積む積木

節分会おどける鬼の哀しい目

甘酒と笹酒に酔う恵美須講

撰津市 井上源一

世紀末 十戒避けて通れない
故里の話カードで聴きにゆく
ブッシュホン孤愁の胸をときめかす
雑事から句帳すたこら逃避する

天理市 飯田昇

しほりたて酒馥郁と切れぬ縁
開けた戸へ鬼も驚くバック面
さびた針一本抱いて夢を追う
出まかせの嘘で探りを入れてみる

岡山市 花田たけ志

またひとつ余生が減ったお正月
玄関で料理が知れるほどの家
ホームレス政治の恥部もさらけ出し
住専禍ずさんで不様な舞台裏

鳥取県 西原艶子

乱暴な男に似てる冬の風
雪国に生まれ育って雪が好き
いろいろと言われるほどの悪でなし
新しい手帳 私を虹をかく

弘前市 一戸ツネ

七十八の炎見つめる瘦せ河童
同じ年逝けばそぞろと身が細る
寂しくて羅漢の話ききにゆく
命の軌跡 凍てつく芦は泣きに哭く

倉吉市 米田幸子

誘われたら二つ返事についてゆく
泥船と分かっているも乗る度胸
足がかり欲しくて絆たぐり寄せ
忍の字を乳房の奥にたたみ込む

羽曳野市 酒井一壺

欲しいもの金で買えないものばかり
ほしいもの買ってしまえば腹が減り
この顔でずっと来ましたこれからも
勝負する男の顔に隙はない

高知県 赤川菊野

エアメール黄河の氷とけました
月満ちて欠けて一人の旅づく
今日もまたお米を研いでいる命
ワイドショー終り私のティータイム

岡山県 岩道博友

反論を綺麗な八重歯から小出し
独裁者の歩いた道へ吹き矢射る
節分に生きてる豆を高くまく
冗談で済ませてみたい受話器おく

島根県 堀江芳子

大正元年 正朗げんきで福は内
イジメには効かぬ鎮痛剤ばかり
おいしそうに飲む女といて愉快だな
横書きの孫への返事横書きに

米子市 木村 富美子

かくれんぼした袋から出られない
風のように噂を持って来るあなた
一つずつ何度も生れ罪を消す
舞い上がりわたしの影を見失う

枚方市 前 たもつ

校門の桜優しいランドセル
早く嫁げと父は本気で言うていず
リッチと言われ貧乏ゆすり止らない
政党もはや金太郎飴に似る

岸和田市 井 齋 一 齋

日曜は一人にしてとヘッドホン
貫禄の諭吉を下げる物価高
滑り止めパスが本命鈍らせる
就職難 秀才ばかり選んでる

今治市 矢 野 佳 雲

仏像の切手済度の旅に出る
許したい気持ちにさせた朝の蜘蛛
影のない人というのは信じない
仲間だからむしろ許せぬことがある

鳥取県 西 川 和 子

どの顔もいい齢重ねて来た笑顔
高齢の町に解けない吹きだまり
私に負けそうだから迷わない
正直へ天が味方をしてくれる

鳥取県 石 尾 かつ乃

雪こんこ便りも来ない古い二人
野仏の顔から溶けていった雪
日だまりに春を見つけた散歩道
雪を賞め雪をいじめて春が来た

茨木市 藤 井 正 雄

妻の留守踏み台のいる内緒事
熱燭で婿に頑固を崩される
釣宿の窓は軋んだ音で開き
祖父元氣家空けられぬ菊作り

相生市 中 塚 礎 石

紫の炎で燃やす恋心
古里の土の温さは母に似る
女坂鐘がゆっくり風になる
罪な手を雪で晒せば赦される

池田市 岡 本 吉 太 郎

我が友はやさしいマスクで先に逝き
占いも産業となる世の流れ
片隅でこつこつ仕事を積み上げる
尊厳死の事思い悩む喜寿となる

和泉市 岡 井 やすお

破たん処理 余所目に家は建つてゆく
親の身になって共通一次受け
エプロンでみどり銀行船出する
すしかぶり入歯が欠けるほどに老い

風花の里凜として椿の朱

玉子酒何がなんでも鬼は外

梅林の詩人甘酒飲みながら

風花に追われて下る異人墓地

大阪市 津守柳伸

試されているとも知らぬ検査漬け

森を出た烏塚ぎの街がある

先生と呼ばれた人にこの秘密

金の要る話に胡坐向きを変え

箕面市 椎江清芳

地図広げ妹見舞う若松に

札つきの悪でないから良しとする

溢れるほど棚に並べてセンスなし

人は皆灰になり得て価値を知る

唐津市 浜本ちよ

人生の花真つ盛り娘は二十

ハンカチで欠伸を包む長話

人前は優しい声で叱る母

顎髭の画家おっとりと言言葉

藤井寺市 中島志洋

それはそれこれはこれだと決められず

むしろやぶるように書き出す今日のこと

風いつか変りお互い一人かも

目が覚めてやっぱり同じ日を送る

河内長野市 植村喜代

ふりむくと気ままに歩き過ぎた道

目の前の壁をこえよう春がくる

たぎるものなくて旅行の本を買う

いい話ばかり聞こえる耳にする

米子市 青戸田鶴

急行の止まらぬ駅も宝です

教え子が足りぬ男手貸してくれ

カリン酒を咳つく人にあげて春

これよりは息子夫婦に歩を合わす

鳥取県 さえきやえ

麻の葉の模様を入れる花家紋

花の命つなぎ止めたい返し針

一輪の椿が生きる塩瀬帯

とめ結びきつちりとする江戸小紋

出雲市 石倉英佐子

残暑一転 命日に野菊咲く

留守番の犬の鎖が太過ぎる

休刊日一日眼鏡持て余す

露天風呂緩い鼻緒の下駄履いて

西宮市 刈田泰司

手帳持ち散歩一句を書いてくる

缶詰がこんなに美味しい山岳部

お土産は買わない主義で旅が好き

一ランク落して昼の碁が楽し

弘前市 須郷井蛙

無視をされ無視をされても自己主張
寝屋川市 富山 ルイ子

桜咲く知らせに母を車椅子
ひと日ひと日をていねいに生きていく
上り降り一段ずつになつて古稀

富田林市 池 森 子

饒舌は上の方だけ透き通る

風花の向こうに花芯だけ残る

共存の視点麒麟のながい首

使途不明金はきつと妻の指にある

寝屋川市 北岡 波留吉

老妻を爆発させた花名刺

老骨をフレッシュさせた春の風

晩鐘の響きに明日の夢がある

夢でもよい亡夫の背中を流したい

鳥取県 羽津川 公 乃

重ね着の袖から春が忍び寄る

春の絵に冬の凝りが溶けてゆく

つぶやきがハミングになる春の水

誕生日また年拾う花の下

広島市 森 田 文

母の忌や春を知らせるさくらそつ

原発反対 未来へつげは残せない

雪雪雪 平和の池も凍りつく

北風よピンチに強い花もある

大阪市 小糸 昭子

棘の無い薔薇はプライド捨てました
物指しが妥協点まで届かない
小さいが故郷の大根甘味あり
一通の便りがこころ狂わせる

出雲市 板垣 夢 醉

花見酒サクラもぼつと酒気に酔い

うまかった味も三日目鼻につき

愚痴こぼしああ青空が曇りだす

春風が吹くと古傷うずきだす

豊中市 三宅 つえ子

散る花に吾に寄ればと掌を開く

手をかざし炭火を偲ぶひとりの夜

幸せな明日を信じて硝子拭き

手を打てば夢も新たに車椅子

(2月号分)

富山市 島 ひかる

仏の日 湯どうふ美味い頃になり

半分になつても母は子を思う

留守番のおでんそのまま残ってる

もう誰も帰って来ない夕餉刻

月原宵明句碑建立 4月7日(日) 午前11時から今治

市の法華寺(桜井中学校裏)で除幕、同会場で記念句会
を開く。題「宵」「暮」「掌(手)」(各題3句)

自選集

月原 宵明

ことごと煮るから母の味になる
端数噛み後の歳豆鳩にやる
途中下車 古い秘密のあるところ
目覚ましのそれから五分もう五分
矢印のとおりに進み行き止まり

正本 水客

枯菊に私の影が一つある
花散って自分の影を見失う
海からの風に水仙さからわず
とどめさすのは武士のなさけです
負けん気になってすこうし笑つとく

工藤 甲吉

紀伊国屋 視力が落ちて遠ざかり
去りし日の柔肌今も忘れざる
院号の無い戒名で母よ母よ
すばらしい白磁も赤い火をくぐり
亡妻を思わせる娘の挙措動作

遠山 可住

春の風 着物を着せてみたい女
もう一泊せんかと桜ほころびる
学校を出てふるさとを見失う
分校に一人を送る桜咲く
ポスターの以下は波乱を待っている

小西 雄々

鶯の初音わたしを呼んでいる
残り火も妬心も入れる壺を持つ
雪女と話していたに雪崩くる
刀よりペンが怖くて喋れない
宝などないが自分史持っている

辻 白溪子

シャッターへ目立ちたがってる貸衣裳
天ぷらを欲しがっている快復期
落目から他人の心解りかけ
鬼が見る夢には怖いものがない
美味しいものあって名所が覚えられ

八木千代

どうにか明けてさて明日の晩 次の晩
雪降れば仏も猫も早寝する
春 春と機織る晩を繰りかえす
蝶のようなものを枕に泊めている
贅沢な晩で書きたいひとへ書く

小林由多香

春物の売れる景気がまだ読めぬ
飢える国余る国あり陽がしずむ
詰めすぎた欲へ袋がほころびる
太陽へよい子わるい子などいない
家族みな送って主婦の化粧する

金井文秋

寒いから止めにしておくほどの義理
筋一本通ったようで弱い鬼
まん丸でも楕円形でもよい卵
使い捨てカメラは格好よく持てぬ
百歳近くすんなり黄泉の旅に発ち

波多野五楽庵

冬籠り妻は小さな咳をする
言葉遊びの女遊びの癖とれぬ
愛されているが飼育もされている
ため息とストレスのどでからみ合い
曇のち雨と知ってて雨の中

松川杜的

傘寿まだ気ままに日記つけてます
PKO今度はゴラン次は何処
即席でないラーメンの湯気がよし
気をきかし上様と書く領収書
かな文字できれいな母の遺言状

有働芳仙

親と子の働く汗と遊ぶ汗
パパの靴ちびた踵の子沢山
受験子の明日を戦う窓明かり
失恋へ義理チョコ舌にほろ苦し
政治家の肺腑をえぐる句がほしい

黒川紫香

駅降りてもう一面のさくらかな
雑草も春だ春だと伸びてくる
金婚を他人事に聞く亡妻の忌に
食べきれぬ料理が並ぶ宿ひとり
犬もろてくれたお家へ遠回り

野田素身郎

どう生けてみても所詮は枯れる花
パチンコに行く回数も減った老い
どの球団も優勝目指しキャンペーン
寡婦寒し夜更けの電話待っている
三寒四温 四温の朝はすつと起き

藤井明朗

孫はたち待つてました飲みくらへ
ねずみ算は過去 金の成る木は見当らず

高杉鬼遊

貧乏閑ながわたしの健康運

人生を転んで走つて夫婦老い

白寿まで川柳 欲な願いかも知れぬ

西田柳宏子

実年の燃えるものありフルマラソン

羽生七冠これからドラマ面白い

肚のたつことばかりある日記

亥は地震 子は崩落事故で開き

住専八社 一社除いて皆潰そ

奥谷弘朗

死ぬるまで男可愛や見栄を張る

入学の孫へ祈りを欠かさない

女房には俺の願いが透けて見え

神さんが守ってくれると信じ込み

そうですか割り勘だとは知らず飲み

恒松町紅

突然の闇が襲つた歳の暮れ

バタバタと走ることもない点滴よ

のんびりとむさぼるような病院で

することがたくさんあつたはずなのに

明日のこと明日になるやろ目をつむり

児島与呂志

藤村女

栄転も左遷も同じ駅を発つ

花手桶 父母甦る空の彩

淋しさが合掌の手に残る春

おぼろ月私の影がついて来ぬ

湧き水を汲む故郷のはねつるべ

久家代仕男

魚獲みな都市へ地元にも眼もくれず

逢いに行くバスで相手とすれ違い

禁煙の余徳 障子を貼り替えず

親の見栄つんば棧敷で子が迷い

日だまりにひと足はやい蔭のとう

大谷五花村

東野大八

東北の川柳振興に、力強い炬火を点じた人物こそは、大谷五花村といわれている。

井上剣花坊や阪井久良岐が狂句百年の負債を今こそ返上すべしと起ち上がった明治中期から大正にかけての川柳復興運動に、いちはやく呼応したのは、東北の福島県であった。その触手は、福島民報と福島民友新聞の二紙で、その柳壇を構成した選者は、剣花坊派の吉成剣突坊率いる『郡山柳樽寺』が手がけていたが、どちらかといえば東北地方の土地柄を反映して前句付、狂句と混在していた。

大正期に入ると、柳樽寺派に対し、久良岐派の『川柳あけぼの会』が柳誌あけぼのを発刊して、柳樽寺派に対抗した。そのリーダーは久保田狂水と言う。このあと、大正末期にはいわき市で立机披露した柳垂亭清川が『柳風

狂句』を掲げて活躍した。

これに対し、『新川柳こそ庶民の文学』と提唱して、その普及発展に全力投球したのが大谷五花村である。

五花村は本名五平、明治24年7月27日福島県西白河郡五箇村（現在白河市）生れ。柳号の五花村はこの出生地のもじりである。彼は明治大学卒業後、家業の酒造業を継いだ。やがて五箇村村長となり、白河町長を経て、多額納税者により貴族院議員となったというから、なかなかの地方名士であったわけだ。戦後この肩書のため、公職追放令にひっかかっている。

この彼が、川柳に関心をもったのは、安積中学校（郡山市の現安積高校）時代の少年期に、新聞日本の『新題柳樽』に入選したのが

縁で、上京して明大に学ぶうち、柳樽寺を訪ね、親しく剣花坊の「川柳は民衆芸術」との説に傾倒し、心酔するに至った。

この剣花坊に親しく学び、その信念を生涯の川柳信条とした彼は、その『川柳礼賛』（昭和3年刊）の中で次のように述べている。

「和歌の儀式を、やや自由にしたものが俳句であります。それをもっと自由にしたものが川柳であります。然しながら自由は放漫に陥りやすく、乱暴に流れます。乱暴は秩序を乱します。秩序なき社会は革命であり、革命は瞬間暗黒の世界を現出します。

自由を理窟の上にごじつけたものが狂句であります。自由も過ぎれば困ります。軌道を外せば脱線します。脱線は人生を傷つけ公安を害します。即ち社会の毒となります。毒は猫イラスにでも用いる他は、用はありません。

この如く川柳は平民文学の時代世相を汲んで生まれた平民表現詩でありまして、必ずしも、社会を毒する為に出来たものではありません。

現在では、右の一文はなんでもない所説だろうが、川柳と狂句を混同して考えられた昭和初期においては、極めて明快な判断を下した文献といえる。

この著述より十余年も早く、五花村が郷里で興した川柳吟社が、白河吟社である。こうした積極的な川柳活動に入った五花村は、大正四年の大晦日に五花村宅を訪れた剣花坊との談合によって決意されたもので、この吟社名の名付け親は剣花坊である。

この白河吟社は、やがて『白河能因会』と改められて、大正六年機関誌『独活』を出したが、六号で休止。昭和2年1月に『東北川柳』を発行する。

しかし、昭和6年満州事変が勃発、軍国主義の高まりから、柳誌発行も困難になり、昭和11年4月休刊したが、彼はそのあなうめとして、文字どおり川柳普及のため、ラジオ柳壇や各地を東奔西走して、後進の育成に努力した。

こうした動きのうちに、太平洋戦争が起り終戦。五花村は公職追放となったものの、同年4月追放は解除された。それをしおに、同年11月『東北川柳』を復刊。通巻百十三号ののち、『川柳能因』と改めたのは昭和33年1月で、爾来、昭和59年には五百号を迎えている。この間、吉成剣突坊（本名留三郎）一派の『柳桜』を出していた新川柳芝蘭会とも合併している。

この間、『うどの大木』『川柳礼賛』『五花

村句集』『竹の光』など数多の著作を手がけ、昭和33年4月26日没、享年六十六、法名大悟院殿勲譽川柳興顕居士。句碑は、

白河を名どころにして関の跡
を昭和8年白河神社境内に。

廻る陽の無限に春を一つづつ
を彼の眠る菩提寺清水寺境内に昭和27年に建立している。

以上は、やぶうち三石著の『福島県川柳史』に拠っているが、五花村亡きあと『能因』を支えたのは、田中才六、山中鹿之助、齋藤痴禪らの門下有力同人に負うところが大きい。

川柳壇で気を吐いた『川柳あさか』（郡山市・高橋巷風主宰）はじめ、当時幾つかのグループが出した県下の各柳誌は、すべて五花村の息のかかった人達による。その中の変りダネ齋藤虚空にふれておこう。

この虚空（本名千代吉）は、五花村の母校の安積中学校講師で、五花村を師とし、教子の巷風らを育てたのだが、その九年間の教師生活中に、愛読した新聞日本の柳壇選者剣花坊の主張に傾倒し、昭和3、4年ごろのまだ川柳に冷たい世間の眼にも屈せず、盛んに教壇で新川柳を鼓吹した。この「へんな先生」の教え子が高橋巷風であった。

この虚空は、昭和32年1月死去した際、参

列者に贈られた『年輪』という小冊子の中に
つぎのような句がある。それは、つきつきと
戦野に赴く数多の教え子たちに対する戦時中
の作品だ。

装具かなぐり棄てて翼賛歌

生きぬいたものだけが聴く戦捷譚

大陸へ置きざりにした脚二本

これらの句はどうみても翼賛吟ではなく、
むしろ、戦争に対する怒り、むなしさ、悲し
みの心情こもる反戦句といえる。

反戦の川柳人鶴彬の反戦句を、どこかほう
ふつとさせるこの遺句を、老いたる五花村は
どうみつけたか。

「戦時中、死ぬほどの苦痛を味わったのは、
昭和12年9月号の三味線草という柳誌の、叛
逆詩批判だった。例の鶴彬の『手と足ともい
で……』のあの一連の句だよ。表紙裏表紙に、

『川柳は諷刺詩であっても断じて叛逆詩では
ない、正しき川柳道擁護のため、川柳人は
排撃せよ』とでかかたと出され、中味にも同
様の趣旨で信子夫人を悪しざまに罵っている。
大恩ある剣師ご夫妻の苦悩を想うとき居ても
たつても居られず、擁護の一文を寄せたが、
こんな怖い目にあって頭の毛が一度に白くな
った」（筆者宛書簡）

▼次号は「野村 圭佑」

柳籠裏三篇研究 (三十丁)

七久保博・岩田秀行・紀内恒久

西原 亮・瀬川良夫・青木迷朗

佐藤要人・八木敬一

鈴木倉之助 故岡田 甫

385 其時の小サ刀ナハ関の銘

美徳

西原 〓「小サ刀ナ」は、大刀に対する小刀で、脇差である。

本句は忠臣蔵の句で、仮名手本によつたのか、実説によつたのか、どちらでもよい句である。「その時」は、浅野が殿中松の廊下で吉良に切りつけた「時」。「関」の銘ということは、関の孫六などの刀銘だということと、「性急」の秀句仕立てである。

手廻しのわるさ短刀長袴

五三二〇

ちいさ刀でも大きな事が出来

安八松一

佐藤 〓賛。内匠頭の性格を、せきを性急の意

に転用して暗示したものである。

七久保 〓賛。

長はかまでの太刀打ハふはたらき

安八仁四

鈴木 〓礎稿ご明解

こつずいにてつしてちいさ刀ぬき

明六仁二

脇ざしも気もみじかいでしそこなひ

安六・五五

岡田 〓この句は天明六年五月二十八日の句会。五月十一日から中村座で忠臣蔵上演。「歌舞伎年代記」に「当り也」とある。これに幾分関係あるか。

386 本郷で瀬の尾太郎しやべつてる

洗路

西原 〓本郷に関し、次の記述がある。「本郷三丁目肴店、同四丁目に附木店と云地名有。

肴店は予十八九の頃までは木戸際より両側とも不残魚屋にて、ただ角の薬種屋(皆人おもだかやの歯磨という名産也)一間のみ外商にて有ける」(塵塚談)

かねやすか見世では鬼も投げられる

宝八鶴

があるから、本郷には、「瀬の尾の太郎 〓平家の武将、瀬尾太郎兼康」兼康なる見世が、早くから存在したことになる。これも次句から、同業者であつたらしい。

兼康ではかり神農壁にされ

九〇三六

おもだかを神農横ににらめつめ

拾四二八

「しやべつてる」というのは、口上商人であり、店頭はずいぶんにぎやかであつたらしい。香具師の親店みたいなものであつたか。

兼康はお七を見ると叩きたて

一一三九

兼康はうつちやるやうに銭を入れ

宝十三鶴三

鈴木 〓礎稿ご明解です。現在は兼康洋品店となり、文京区本郷二丁目で繁盛している。

岡田 〓同。

387 欲心成仏とは、あへのまこ

五連

西原 〓遣手婆々が死んだ。彼女への回向には「欲心成仏(即身成仏のしやれ)」が似合いで

あると。

欲心成仏とやりてへの回向

拾三 26

後生へは尻をむけてるやりて婆々 一三四

鈴木・岡田同。

388 しなひ打わさびおろしを下女ぶたれ 門柳

西原「竹刀うち」は、「広辞苑」によると

①竹刀でうちあうこと。剣道。②手のひらを返して打つこと」とある。「わさびおろし」

は、「辞彙」に「菖蒲草の異称・若党・仲間などの異称」とある。

若党などが下女をからかったものとみえる。それにむかって下女が手のひらを返して

相手をぶつたというのを、ユーモアに表現したのであろう。痴態が感じられる。

佐藤「竹刀打」は、遊戯者二人が右の手の平を出し合つて上下に重ね、下の手の者が、

手のひらを返して、上の手を打つ遊戯である。上の手の者は、打たれる前に、俊敏に手を引

つ込めると、相手は空を打つだけに終わる。主題句は、動作ののろい下女が、何時もぶ

たれるというのである。わさびおろしは、水仕事などで、さらさらに荒れた下女の手の甲

や平をいう。

七久保「贊。「わさびおろし」は佐藤説のよ

うに下女の水仕事でガサガサに荒れた手を下ろし金に見立てたのです。

鈴木「佐藤兄ご明解。小生分からぬ句でした。岡田「贊。

岡田「贊。

389 とつくりとミやれと仲秋へ渡し 間々

西原「今川了俊が弟の中務少輔仲秋へ「今川

状」を書き与えた。その時、「とつくりとミやれ」と言つて渡したであらうとの想像。

「今川状」は寺子屋の習字用に使つたから、当時の卒業生はみなそらんじていたわけ。そ

の中に「愚息仲秋制詞の条々」とあることが、この句作のモチーフになつたのであろう。

仲秋は一つ一つにいちめられ 拾六 3

了俊の息子いけな奴と見え

天六・十一・25

青木「贊。前説成程。

今川も酒の次には坪の事 一〇 37

佐藤「贊。とつくりを徳利にきかせたか。

七久保「贊。青木氏の例句および佐藤説の如く「一、長酒宴遊興勝負云々の条」を利かした句案でしよう。

今川を仲あきにしてよしにする 天四 札 4

鈴木・岡田同。

390 馬鹿な事鯉をやつて不和に成り 仙羽

西原「「そこが江戸小判を辛子味噌で喰ひ」

(一二七 81) というほどな初鯉。それを懇意

にわけてやつたのであろう。ところが、貰つたもののひがみ。

青木「不和は鯉をやつた方の夫婦喧嘩のように思われませんが。

佐藤「もらつた鯉を食つて中毒したのである。いわゆる古背にあてられたので、贈つた

好意が、怨まれるもとなり、それが不和につながつた場合である。

八木「じんましん・ひがみ、両解を考えていました。

紀内「礎稿贊。やる方は親切からだだが、もらつた方は「お前は、初鯉など買うまい」と

言われたとひがむのも無理はない。高いものをわざわざやつて、不和になるとは、まさに「馬鹿なこと」である。

鈴木「佐藤兄に贊。

馬鹿な事鯉をくらい水をのミ 傍五 27

塩かつほくれる時分八中がよし 天六 桜 3

岡田同。八木氏が言われているように、ジ

ンマシンも出たはず。

秀句鑑賞

同人吟 小出智子

—3月号から

忘年会 新年会も同じ顔

林 荒介

忘年会で、また新年会で何をしたというのではない。何をするにも同じ顔振れが誘っては集まり、まるでそれが当然のように。実はそのことが、みんなに変わったこともなく、幸せなのだと、いうことを作者は気付いています。

雑踏に親という名の人がおらず

春城 年代

親というのは何歳になっても親なのです。親を見送ってしまった「親という名の人がおらず」の思いは今、殊更に深いのです。

裁縫箱に僕の知らない妻が棲む

竹治 ちかし

冬の休日など、男は一日を持って余してしまふ。妻はと見れば、せつせと針を動かしてしまふ。妻は何かを作っています。肩の凝ることをしてと馬鹿らしく思えますが、妻には妻の楽しみがあって、それが幸せな夫婦のかたちなのですが、少し不満でもあるのです。男の我儘かも知れないのです。

亡父がした通りついたち十五日

小池 しげお

昔の人は律儀に神仏に対して、ついたち、十五日の礼を行ったものです。それを見て育った作者も習慣として守り続けています。

みみずく啼いた農を継ぐ気になつた

江原 とみお

かなりの農家では、農を継ぐことを嫌って都会に出たり、勤めに出たりするようです。

何とか後を継いでもらえないかの願いをもちながら、今の時世に強要する訳にもゆかず。

それがあつた日、みみずくが啼いたので。農を継ぐ気になつてくれたのです。ひそかな喜びが、弾むようなこの句のリズムになつたのだと思います。

元日の空ふるさとへ続くなり

指宿 千枝子

空は何時もあるさとへ続いているのにちがいないのですが、元日だから、殊更に作者はそのように感じたのです。

地下街の音に紛れて訣れたり

田中 薫

「地下街の音に紛れて」という繊細さが、この作者の個性だと受け取っていますが、川柳に対して何時も厳しい眼をもつておられ、よく勉強されています。

二月十日、突然の北海道豊浜トンネルの落盤事故を、断片的に一週間見ましたが、あまりにも痛ましい出来事でした。そのことはもうみなさん周知のことですが、毎日放映されるテレビを見て感じたことは、あの地方の厳しい寒さでした。明けても暮れても雪が舞い吹雪が続く、身の竦むような寒さ、それに耐えて生きる人達の居ることを目の当たりにして、人の定めというものを強く感じさせられたのでした。

それにしても私は、この平穩な大阪の地にあって、日々をぬるま湯に浸り、締め切りがあるからと惰性で句をつくり、要領よく作句しては、年期が入つたと錯覚して、安心してある私に気付いたのです。どれだけ自分の作品を大切に考え、勉強したかを思いますと、背筋の寒くなる思いがします。心を籠めて、自分の個性で、感覚で、作品を残さなければと思います。またしても崩れそうな願いかもしれませんが、何とか初心を取り戻さなければと考えています。

きつちりと蓋をしたがる大人たち

池 森 子

諺に「臭いものには蓋をしろ」というのがありますが、いくらしつかり蓋をしたところで蓋は蓋でしかないのです。簡単に取られてしまいます。大人というか、第三者に対してかなり鋭い批判の眼で見えています。

酒やめてからの話が水臭い

片 上 明 水

お酒を飲める者同士は、傍目には考えられないほどの親しさがあるものらしく、それだけにお酒の席にはお互いを誘い合い、一緒に酌み交わし、一層お酒を美味しくさせるそうです。ところが何かの事情でやめなければならなくなつてから、友人との間を水臭く感じるようになったという。酒が取り持つ人間関係を思い、お酒をやめたことの寂しさを感じている作者。「水臭い」が適切な纏め方です。

シャッキンと音がしそうな家を建て

木 村 貴代子

「被災一年 金の力を思い知る」とほかにも句がありますが、「シャッキンと音がしそうな」とはどんな音なのでしょう。それにして、この句に暗さがなければ何より嬉しく、きつと希望をもつて生きておられるのでしょうか。

狂い咲く桜の如き恋したし

宮 口 笛 生

これほどはつきり心のうちを表現された句も少ない。この句を読んで、正直言つて人は誰でも、こんな夢を心に秘めているのではないかと思つたのです。もう一花咲かせたいというのは、男には仕事ということもありましようが、恋というのも本音かも知れない。作者を知っているだけに、この人らしい率直さで、嫌味がなく楽しい一句です。

ひとごとのように正月過ぎてゆく

栗 谷 春 子

若い頃と違い、年をとるに従つて新年を迎えることに感激が薄れていきます。誰でもがそうではないかも知れませんが、「ひとごとのように」とその思いを素直に書いておられます。平凡なようですが、思ひの深い句です。

別れたと言えば安心する他人

三 宅 保 州

余所の火事は大きいほどおもしろいと、諷刺の効いた諺がありますが、世間には野次馬が多い。「他人」という言葉が、この句の中で大きく比重を占めています。本当は安心するのではなく、がっかりするのもかもしれない。かなり思い切つた表白に、川柳としてのおもしろ味を見せていただいた。

知らんふりするのに丁度よい雪だ

鈴 木 公 弘

人の心の裏側をちよつと覗かせて、嘯いている作者の横顔がおもしろい。今年の大雪はかなりの人達を戸惑わせたようです。

紅茶片手に村山さんと橋本さんと

岩 本 笑 子

村山内閣から橋本内閣に変わった時の句と思いますが、如何にも親しげに「さん」付けて書かれているのが却つて何か意味深いものがあるように響き、さて、どのようにこきおろされていたものか聞きたいものです。むつかしい時事川柳より余程楽しい。

囲碁大会なのに話題は低金利

川 端 一 歩

今に、預り料を取られるのではないかとささやかれるほどの近頃の低金利を、軽く川柳に取り上げられた。眼は碁盤の上にあるが、低金利のことが言葉の端々に見えて、石を置く手も迷い勝ち。

かさかさのてのひら父の三回忌

山 本 希久子

冬がめぐつて来ると、お父さまの亡くなられた日を思い出す。「かさかさのてのひら」に感情が籠められて、女性でなくては感じ取れない感覚です。

水煙抄

西田柳宏子選

今治市 野村清美

流れ肩パットを入れて風を切る
淋しさと自由をくれて夫は逝き
今に見ろ玉葱苗が冬を耐え
どん底を舐めた息子に骨が出来
大袈裟な包帯取ればかすり傷

秋田県 湊修水

一周年地唸りの夢を過疎でみる
呻き声 吹雪に喘ぐ一戸建て
みちのくに地酒と名乗る味方あり
雪国の空の青さに吸いこまれ
華やかなドラマに逢うた雪の宿

富田林市 山原昭水

孫二人小島博士に虫博士
老眼鏡かけて仏も鬼も見え
失敗談笑ついでいえる歳になり
気どらずに正々堂々素顔がよい
この春に生命保険満期です

茨木市 久保田 恵美子

とどとまで言われて父の三連休
マイライフ母は大事にし始める
踏まれたら踏んで返せと母気丈
できるだけ触らぬ方がいい古木
嫁の手へ宝渡してからの日々

今治市 中村好恵

先頭でバックミラーが気にかかる
生き抜いた誇りが父の肩にある
負けそうな方を応援する相撲
一人になればもっと手抜きをするだろう
眉描いて他人の顔で街に出る

寝屋川市 酒井 勇太朗

名物の土産どこかで見たような
浴衣よりホットパンツの似合う足
昇進の友を祝った苦い酒
この分は妻に見せても良い手帳
人情に棹さし自分を苦しめる

豊中市 石川 勝

真実を見たくて窓を開け放つ
金も出来 作り笑いはもうしない
バカモンと妻に怒鳴ってしまった日
心が寒い春の楽譜を買いにゆく
水割りの氷が溶けている訣れ

尼崎市 田辺 鹿太

肩書を外せば酒が旨くなる
要領の悪さが父の取柄かも
たこ焼に並ぶ大阪食いだおれ
蛮勇をふるって妻を叱りつけ
やりくりが下手でリズムが掴めない

新潟県 高野 不二

通帳の残は気にせぬ祭好き
まだ役に立つ気でいるのに肩叩き
ね年でもねずみの巣には腹が立ち
退職後 三連休の多い年
いじめられた記憶いじめに腹を立て

河内長野市 大西 文次

子の認知 上を下への大騒ぎ
来るとこへ来たのか妻に逃げられる
神様を怒らしたのか不合格
文楽の妻に夫の浪花節
コップ酒 明日のことは考えず

成田市 斎藤 房子

年金がパンクしそうにサクラ咲く
春うらら去年の借りを思いだす
鉛筆の短くなってゆくいのか
水飲場ストレス捨てている女
ふるさとの雪はやっぱり温かった

鳥取県 山本 正光

やっと古稀まだまだ入る道具箱
レコードが納屋でつぶやく流行歌
行列のどんじりに居てラッパ吹く
内科から外科 歯科 眼科はしごする
週末は鯛の刺身で呑んでやる

和歌山県 尾田 綾子

岐路に佇つ時に選ぶうつらい道
躓いた石と妥協した出会い
古希過ぎて亡姑の日記が笑えない
嫁がせて明治の亡母に負けました
姑看取る胸に菩薩を賜りて

東大阪市 谷口 義

面食いと言われた頃は若かった
信念がないのですぐに気が変る
数学も英語もいらぬ職につき
佃煮で酒を飲んでる妻は風邪
ワンマンも妻のささえて立っていた

熊本県 高野宵草

梅の香に誘われ犬に吠えられる

使い捨てカメラが一番よく撮れた

孫台風去って満足して疲れ

踊らせる笛と知りつつ面白い

年上の女に好かれる気の弱さ

箕面市 木村天弘

ベテランが叱られ役になる選手

官と官 税金飲んで甘い部署

左遷地の甘い空気が肌に合い

住専の話に空気重くなる

逃げの手を会得の彼に幅が出来

鳥取市 植田一京

よそ様の門松バックに写真とる

ピチピチと生きた言葉の飛ぶ市場

ほどほどの暮し都会の風に慣れ

両手に余る欲を抱えてよく転ぶ

ピリオドは必ず母が打ってくれ

尼崎市 森安夢之助

パチンコにのぼせて明日の飯がない

菜の花が咲いた私も派手を着る

賑やかに弁当が行く春の道

悪知恵が浮び笑いが止まらない

切り札を残して明日の策を練る

鳥根県 武島ちよえ

ふたつの輪はずれることなど思わざり

泥吐かぬ蜆にだって訳がある

ひよつともおかめも齢をとりました

尻もちのおかげで春の芽と出会い

直線はうまく描けぬが輪は描ける

尼崎市 軸丸勝巳

壊さない事情は知らぬ青シート

有難やライフラインも死語となり

鳴る電話妻に用事の人ばかり

海遊館イワシ絵になる勢ぞろい

大観展すざりて富士を拝すなり

札幌市 三浦強一

定年のキャンバスに描く虹の橋

上野駅 大志抱いた貌で降り

回転木馬みな先頭と思う馬

上げ潮に乗ると刺客がついてくる

遊びのないブレーキだった突然死

貝塚市 池田寿美子

ハミングでジョークの好きな鬼を呼ぶ

満足を回転寿司でさせた孫

対談は同じ目線で盛り上がる

はつきりと言いつつ切ったのも若さです

赤とんぼが流れるゴミの収集日

病む夫と言い争つて残る悔い

伊丹市 榎谷郁子

夫の病癒えて嬉しい雪の春

遠い日のロマンを胸に秘めて老い

島根県 三代朝子

ナース相手にぼけとつっこみよく喋る

ほどほどに生きて倅せとも思う
思いきり翔んでみたいと想う日も

草は枯れ風花の舞う我が更地

諭す母 背が伸びた子に見下ろされ
親しげに声かけあなた何方です

新居にも落ちつかなければと花を買う

クリスチャンらしい婦長の優しい目
手作りの服を着た子が良く笑う

大山市 早川盛夫

八尾市 神原まさと

流儀などない無造作な花が活き

口噤む子は友達を信じてる
自分だけセンスがいいと思てはる

よくもなく悪くもなしを羨まれ

猥談が笑い話になる傘寿

釣った場所 知れば食えない魚なり

春そこに芹も土筆もうちの子も
歳月や温い絵になつて来た絆

見たことをコピーのように話好き

霧困気に酔うてあなたに惚れている
人生の岐路ヤジロベエよく揺れる

無人駅誰も見てない用を足し

めまぐるし世相に眼鏡ばかり拭く

鳥取市 徳田ひろ子

大阪市 三浦千津子

肩パットはずし眠りが深くなる

決断を迫る発車のベルが鳴る

直つ直ぐなままでは行けぬ道がある

節目には急に信心深くなる

梅一輪 水子地藏を春にする

愛媛県 安野案山子

愛のかたちが歪んで見える色眼鏡

青空へ嵐の後の窓を拭く
倅せな顔で焼芋食べてます

人間のエゴで潰れた土地神話

手をひいただけでこんなに喜ばれ
無理してはなりませんよと無理をさせ

少年の背中を母の風が押す

おしゃべりな孫と混浴しています

人間のエゴで潰れた土地神話

島根県 菅田かつ子

人間のエゴで潰れた土地神話

人間のエゴで潰れた土地神話

人間のエゴで潰れた土地神話

人間のエゴで潰れた土地神話

人間のエゴで潰れた土地神話

人間のエゴで潰れた土地神話

人間のエゴで潰れた土地神話

人間のエゴで潰れた土地神話

島根県 福間 博利
居心地がよいのか風邪めが座りこみ
ワンピースで十三歳ほど若返り

袖の下 大蔵どのは桁ちがい
年寄りの愚痴が越えゆく歩道橋
もう一度焚かせる妻の仕舞風呂

綾部市 藤田 芳郎

句読点要所所で妻が打つ
号令は妻の合図で僕が出す

ひとつ詫びひとつ許して同居人

差し引いた残りを妻と分け合うて
お隣の手をお借りする大茶盛り

海南市 谷口 義男

踏まれてもどっこい雑草生き残る

多過ぎる絵馬に神様迷ってる

ホロ苦い思い反芻して老いる

才長けて見目麗しい嫁き遅れ

相槌を打った因果で賛成派

兵庫県 北川 とみ子

嘘も方便ゆっくりペンを走らせる

菩薩にも鬼にもなった契約書

さまざまな出会いに明日の力借る

くちびるが乾いて台詞言い残す

親の骨抱いて方針考える

高槻市 小林 一完
(二閑改め)
二上山にきらめく旭光 病窓へ
七階の昇り降りを日に二回

妻残しこれが順序と子に託す
短大三つ合格したと孫の声

八尾市 大内 朝子

ムクムクと春のサインはふきのとう
世渡りの下手なおとこを好きになる
親子って永遠のライバルかも知れぬ
保母さんが好きでときどき悪さする

静岡市 増田 扶美

どれもこれも思い出ばかり捨てきれず
旅先の犬養節が今も生き
炉を囲み話はずんで夜が更ける
口裏を合わせたばかりに苦汁飲む

大阪市 松永 会美

老いの坂ゆっくり行こう急がずに
鮎鮮に女の客は悲鳴上げ

泣いてる子どもんぐり飴をもてあまし
マニキュアを塗って明日は晴れ舞台

今治市 渡辺 南奉

二度の職 昔の倍は汗が出る
明日があるから髭をそる寝押しする

あきらめた数だけ丸くまるくなる
本当を言うとき空気が重くなる

大阪市 川内 叭笑

手抜きして後の始末に倍かかり

正論を吐いて無念の被告席

花籠に笑顔も添えて見舞う彼

今日もまた民謡で旅する西東

寝屋川市 後藤 黎之助

上官のいじめにたえて今日がある

突っ込まれボケているのも処世術

豆腐屋さん豆腐の角を大切に

たたかいのすんだ土俵に頭下げ

八尾市 村上 ミツ子

対岸の火事にも水をかけている

幸せの卵 家族であたためる

逃げた魚 小さかったの内緒です

話すことないよと言うてよくしゃべる

岡山市 清水 金太郎

争いは続くか地球がまうかぎり

話し相手欲しくて医者に行つて居り

ボケたよと自分で言ううち未だ確か

受験前はや予備校を決めて居り

熊本県 増田 一乗

育てあげ夫婦くらしも二十年

飼犬と散歩が日課のくらしむき

ホールインワンその後ゴルフに熱をあげ

満ち足りた仕合せ嬉しこの健康

岸和田市 亀井 皎月

七彩の風 故里が待っている

故里は猪狸猿の里

神様に聞かず勝手に掛ける絵馬

受験絵馬 三浪まではかも知れぬ

神戸市 向井 泰子

あつたかい亡母を着ているちゃんちゃんこ

みな辛抱しとるんですと里の家

柚子を煮る母とおんなじ事をする

たわいない夫婦喧嘩をしてみたい

羽曳野市 安芸田 泰子

ふんぎりがついたブランコよく揺れる

春を呼ぶ陽はとろとろと梅の道

ひと呼吸置けば素直になれたかも

それぞれの明かり点して老い二人

和歌山市 福重 美子

今年また輪が広がって友も増え

他人事が自分になった慌てよう

努力せず秘訣ばかりを聞いたがる

寝たきりで周りが祝う白寿歳

泉佐野市 稲葉 洋

冬眠が覚めたか老いの指図癖

日暮れより夜明けまつてる快復期

添削をされて個性のないドミノ

ひな祭 三女の時は形だけ

大阪市 川久保 睦子

巢の中の良い子すかん子皆我が子
ゴメンナサイ言えたら今頃家族鍋
バス旅行ガイドの旗だけ見て帰る
私かてこんな時代があつたんえ

静岡市 佐藤 次枝

予想する地震に置場変えて置く
年毎に手抜きが増える大掃除
度忘れをひよんな事から思い出す
出初め式 見事に虹の橋かかる

富田林市 欄 智久

本当にほけたら家中困るだろう
山茶花の白に心和まされ
古日記 玉音聞いた日の涙
茶柱の嘘パチンコで負けて来る

香川県 田中 ふみ

何気なく箸持つ感謝神ほとけ
当然がまかり通らぬ難しさ
肩書きがとれて素顔に陽が当たる
肩の荷がおりに精出す趣味の道

豊中市 岸田 知香子

廿年 店を守った古希の顔
雪便り耳に節分春の声
豪雪の中にチラホラ梅便り
達磨の眼入れて入試の晴れやかさ

河内長野市 印藤 智子

乳型が寒そうにゆれ慈尊院
入院の朝 念入りに薄化粧
あたたかい言葉うれしい齢になり
幾山河 越えても同じ暮し振り

岡山県 土居 ひでの

ふくよかなねずみフレッシュユ春を舞う
母ちゃんが一番美味い握りめし
どん底も労り合うて黄昏れる
まだ坂を登る気配の万歩計

島根県 岩田 三和

ミスハートに選ばれました稲田姫
にぎやかに落ち葉の中で庭の虫
記念樹の根元にそつと炭うめる
石段を登りきつたらニトロ呑む

和歌山県 中後 清史

知らんこと幾つになつてもたんとある
夢を追うけれど忍耐力が無い
風去つて徐々に落ち着く腹の虫
精いっぱいやった回顧に悔いはない

鳥取県 橋谷 静江

グルメ旅ストレス飛ばし軽くなる
ストレスへ好きな洋服買い漁る
福豆を拾う老母の笑い顔
春の風吹く日を待つて出る土筆

香川県 向山治延

旅の恥かき捨てならぬこともある
古里を遠い旅路で思い出す

飲み込んだ言葉の味のほろ苦さ

西尾先生 羅漢の句碑は生きて居る

静岡県 大村正雄

一秒が生死を分かつ世の恐怖

自国だけ都合よく説く平和論

ダイヤ等なくても光る人の味

鳥笛の妙味たのしい湖畔道

和歌山市 津村武春

癖の無い男で舵がとりにくい

爽やかな少年の夢天に向く

木守柿競う相手のない寒さ

機転利く女でいつも先回り

鳥取県 権代康女

子育てに叱る事よりほめ言葉

はつきりことわる勇氣出して居る

十分な事は出来ぬがポランティア

よく笑う方が長生き出来そうだ

富田林市 大橋鐘造

裸の木 虚空を掴み春を待つ

出世した友は孤独に慣れている

腹の虫なだめなだめて宮仕え

帰郷せぬ孫にも送るお年玉

日立市 加藤権悟

どの風によつても父の無位無冠
澄んだ目の少年が発つ無人駅

振りだしは真つ白だった父の靴

新春の決意 三日の風笑う

岡山市 藤原一平

よく焼けた夫婦茶碗でまだ割れぬ

望まれて嫁いで苦勞の五十年

縄のれんたっぷり充電して帰る

千羽鶴 千の望みを持って舞う

和歌山県 藤井春子

振り上げた拳叩けぬ日の迷い

ハミングがうまい母さんよく好かれ

丁寧な言葉に距離を遠くする

紅を塗る指にも春が舞いおる

兵庫県 西井つや子

トンドの灰 家のまわりへ撒く安堵

血圧をもてあましてる冬長し

立春の食卓 露味憎よく香り

雪空へつばみは立春忘れな

枚方市 二宮紫鳳

覗き見たとなりの芝生青く見え

ゼロの位置 落ちて自分がみえて来た

合格とわかるトーンの電話口

時間など忘れて話す友がいる

和歌山県 村中悦男

こだわりを捨てたく槌を強く打つ
肩書きを利用するならやめなさい
外は雪湯を溢れさせ風呂に入る
春が来た孫と歌ってよもぎつむ

神戸市 船津とみ子

寒の朝 苦もなく起きる妻達者
朝食は飯と味噌汁あれば秀

おにぎりは買うもの風邪で十日寝る
寒い日の散歩は中止いもを焼く

広島県 森川抜智

春近し花園にせんわが庭を
大晦日 男は飲んでるだけの用
新年でパツと明るい世にせんか
難民を思えば日本ありがたし

枚方市 森本節子

車間距離 親子であつてなおきびし
それぞれに歴史あるらし屋敷まち
俯けば菊の模様のマンホール
12チャンネル土橋さんの句に出合う(土橋登さんの句放送)

唐津市 山口ふさ子

人間の奢り心の底まで腐らせる
嫁達の声聞きたたくて宅配便
テレビメモ書き溜めて見る暇もなし
北風が元気を出せと背なを押し

大阪市 尾崎黄紅

無い袖は振れんと思うことばかり
お隣が郵便局という便利
老婆の里から如月の餅が着く
大正が座っています古本屋

羽曳野市 川田晋

ワープロをこなせずボールペンをとる
うるさいと思つた妻に頼りきる
初天神もう絵馬かける場所がない

三 四 日 寝込んで目立ち出した老い

大阪市 池田一男

手垢ついた辞書を伴侶に老いの趣味
君子にはなれぬ豹変しないから
ちよつとした嘘が火種の内輪揉め
まっすぐに歩いたはずが横に逸れ

鳥取市 藤ふうこ

開けゴマ女死ぬまで夢をみる
主役たて脇に徹した芸光る
屠蘇をのむいのちの水をくむように
万国旗わが日の丸をまずさがす

鳥取県 原みさを

白旗が父の戦史に書いてない
新しい風がほしくて旅に出る
ストレスが赤提灯に捨ててある
母さんのタクト笑顔の絶えぬ家

富田市 藤田 泰子

若い根が蔦めきだした水面下

父さんの大風呂敷に包まれる

弱いもの勝てるものとは争わぬ

大阪市 一本 勇太

老残を刻む振り子の音を聞く

鬼は外 悔いも迷いもない暮らし

先を読む男にうまい酒がない

和歌山市 古久保 和子

指定券となりを少し期待する

べっぴんの基準を妻に話せない

以上でも以下でもなしで恙無い

寝屋川市 太田 藍子

アトランタへ夢を繋いだ好記録

大雪でトンボ帰りのカニツアー

日が長くなった分だけよく喋り

弘前市 櫻庭 順三

セスナ機で冷や汗かいたクック山

離陸で拍手 着地で拍手クック山

南十字星 感動知らぬ顔してる

寝屋川市 宮崎 菜月

素心臘梅 多弁な人を黙らせる

住専へ許せぬ税の大振舞

ささくれの本気で生きた手を隠す

大阪市 川原 章久

文句出て朝の六時に撞けぬ鐘

俺あたしそれでわかった若かった

覚えたらもう消えていた流行語

東大阪市 松山 隆

地の底を若い仲間と掘るロマン

アルツハイマー神のいたずらかも知れず

アンテナの鴉天性の知恵で生き

兵庫県 家沢 美智子

御馳走さまみんなの膳が軽うあき

鍬と鎌 苦にせぬ汗の老夫婦

プログラムゆっくり進む日本晴

藤井寺市 楠 昭子

少し余力残して帰る共稼ぎ

罪のない恋をします夢の中

葉からさいそくされてする食事

堺市 桜井 莊次

愚痴こぼす話相手の欲しい夜

昼めしを今日もノルマにさらわれる

相槌を打たせる酒でほろ苦い

橿原市 西本 保夫

おしんに似た苦労話を聞くの好き

それからの噂をぼつりぼつり聞く

どうせすぐ忘れるうわの空で聞く

福岡県 本田 忠男

国訛り聞いて緊張とける旅

同じ高さの対話にいとむ妻の意地

子の分も漬ける大根の重し石

西宮市 古谷 ひろ子

俺のコピーになるかと膝の子をあやす

仮設にも被災の差あり寒椿

かくし味の酒でころりと仕留められ

兵庫県 森脇 和子

打ちとけた本音を聞いて長居する

うぬぼれて一人芝居になるみじめ

肩に触れ掌にふれ支え合う温さ

兵庫県 大谷 幸次郎

岩のりを摘む指先にあられ散る

面接のマナーばかりがうまくなる

道拓く気概 歪んだ靴に見る

大阪市 中田 あい子

生花展 花と競うは師の衣裳

被災地の更地に芽ぶく春の草

花作り上手な友の人嫌い

羽曳野市 芦田 絢子

句読点きっちり打って迷わない

紅さしてスパーに行く日曜日

誕生日夫がお酌をしてくれる

兵庫県 円増 純子

一匹になった金魚よ寒の水

朗々と花野を渡る祝い唄

迷い来て眼鏡の奥の慈悲に会う

尼崎市 向井 末貞一

孫はしゃぐ野山すっぱり雪景色

木枯らしに耐えぬく蕾まだ堅し

八十路でも来年の夢たんと盛る

高槻市 乙倉 武史

脛に傷持つ者同士攻めあぐむ

追憶は苦く戦跡辿る地図

鍋囲む戦友会も黄昏れる

横浜市 金森 徳三

外国の地図に日本は隅に在り

床の中話の続きは夢でする

平成がだんだん昭和を置いて行く

唐津市 市丸 晴子

美しいムルロア白く泣いている

過去未来 空は一つに青く溶け

金釘の手紙に代り長電話

唐津市 松本 圭

大根は青首だけが売られてる

公園までベットを車で送迎し

ポイ捨ての空缶に雪氷りつき

唐津市 宗 弘

マルクスは書棚の奥に隠居させ

肩書きがとれてライバル欲しい朝

鈍行に乗って昭和の顔と会う

唐津市 岩 崎 實

張り合いのひとつ借金減っていき

老い二人 三度の食事まめに食べ

なりわいのたしかな庭の梅匂う

倉吉市 山 本 玲 子

良薬は苦いと言うが糖衣錠

名案が湧かぬ貧乏ゆすりする

ぎゅうぎゅうに詰めてふる里便がきた

鳥取市 津 村 静 枝

何時からか心の鬼がはなれない

当分は雪国気分蜜柑むく

申告を終えてストレス軽くなり

大山市 森 正

鬼の面つけてまたもや孫泣かせ

大家族夕餉の箸の競うまま

ピリでよいシテイマラソン完走す

米子市 足 立 由美子

倅せは気ままに逢える友がいる

雑草の夢は気ままに天覗く

円満な形で今日を生きておく

鳥取市 福 永 ひかり

幸せな口は中傷などしない

右顧左眄そんな男に役がつく

百歳の笑う顔には神がいる

寝屋川市 森 茜

成田山不動尊から春の鐘

イスラエルの野づらは無事かスイーテイ(イスラエル産果物)

おばあちゃん好き風邪ひきもあげちゃった

和歌山市 木 村 親 路

好物が長寿か扱一せまられる

根性が曲らぬうちに嫁に出す

皮下脂肪に見る熟年の幸せ度

唐津市 山 門 幸 夫

村おこしメダカの小川にして返せ

憎いほど成績のよい隣の子

あかんたれ掛けた梯子を踏み外し

田辺市 大 峠 可 動

父の背を越えて羽搏く春の絵図

山茶花を風が運べば蝶になる

向い風追い風われら低所得

八尾市 鷺 見 章

朝の句 我が家の句パン焦げる

北風よお前に負けぬ車椅子

晩学の座右に離さぬ広辞苑

米子市 小 塩 智加恵

品薄のココア買いだめ一人飲む

保育所に送り迎えの役もらう

気前よい妻はへそくりきつと持つ

松江市 佐野木 みえ

汽水湖にえびも白魚も姿消し

野放図に生きてる人が羨まし

子の宝 海辺で拾った桜貝

島根県 松 本 聖 子

孫が待つ返事ポストへ小走りに

病窓へ吹いてくれるな虎落笛

信仰をすればするほどまた迷い

米子市 本 吉 宗 光

短足の僕をつぎ足すハイヒール

崩落のトンネル政治罪なきや

雪道に思いあがりの事故をする

和歌山県 吉 田 武 治

待ちわびた春の日射しを招き入れ

続かない底の浅さが怖くなり

自分のことになるとあれこれ迷い出し

堺市 志 田 千 代

ベテランといわれ一步が進まない

終電車 急がない人一人いる

古着屋に出そうと決めてまた着てる

砂川市 武 田 正 美

終点が見えて焦りが強くなる

追跡の一步いっぽにある自信

余生をば無駄にはしないラッパ吹く

香川県 堤 く に 子

たしなめる箸に絡んだ練わさび

爽やかな目覚め良い事ある予感

損な役 買って出るのも親ゆずり

兵庫県 西 山 八 重 子

秋の日の速さですすむ老人呆け

ひと言が言えないままに年を越し

湯豆腐がぐらりと揺れて今日終る

大阪市 田 中 せ つ こ

きらめく灯 街路樹に咲く星座なり

たわいないジョークが針をさすことも

にべもない返事に心凍らせる

藤井寺市 鴨 谷 溜 美 子

受話器からお急ぎですか断われ

口一杯どんぐりあめの口封じ

人を恋う百合の花粉も噴きこぼれ

岡山市 中 嶋 千 恵 子

本家という大樹にすがる次男坊

血縁のねじれへ置いてある踏絵

とつときの秘話が聞こえる酔い機嫌

大阪市 平井露芳

よう来たとやすし迎える春団治

オーエスケーの服着てドラマやっていた

元々は他人 別姓何故悪い

河内長野市 木太久 正一

列島に立春寒波活を入れ

病院でもろうた妻の風邪貰い

北の国うんざりしてる雪降ろし

伊丹市 延寿庵 野鶴

徳利の中から届く絶縁状

斬られても笑みがころがる太郎飴

断りの顔が飛び出すフアクシミリ

尼崎市 岩倉 キク子

渡ろうか渡るまいかと叩く橋

星空に見つけた思い出とあなた

孫に手を引かれて巡る異人館

出雲市 浜 圭三

小春日に非常袋を出してみる

祝い唄覚えたくなる夜でした

祝いではないが赤飯好きだから

出雲市 川島 和歌子

除夜の鐘 余韻の中で年を越す

御歳暮に届いた箱を振って見る

その内と言う約束もいつか消え

池田市 木村一笛

成人に屋台で交わす親子酒

すき鍋の味にうるさい父と母

自治会にふれあいがあるごみ拾い

松江市 浦辺静子

大吉のおみくじ抱いて受話器取る

ショッピング思わぬ人と小半日

腰痛に春はまだかと急かされる

尼崎市 河津正治

履歴書に男の顔を誇張する

乱筆を詫げる水茎鮮やかに

羽衣を忘れた天女が側に居る

舞鶴市 森本芳月

軽い罪だけを洗っている小雨

一回転すればその気になる男

女一人憩う夕陽を持って余し

寝屋川市 井上すみれ

パン焼器 隣の部屋で夜業する

眼鏡拭き今日のお顔で笑顔する

温泉で膝の痛みの比べ合い

寒空に耐えて生きてるいちようの樹

お日さまに亀も甲羅を干しに出る

日なたぼっこ鳩むつまじくふくらんで

東大阪市 北村賢子

高知県 桑名 孝雄
四月一日 亡母がホントに逢いに来る

億と兆 身近なような気にさせる
宅配便 痛風の素どつと来る

鳥取市 西村 半量

念のため少し余白を空けておく
削られたところに本音あったのに
どぶ川がネオン映して生きかえる

米子市 猪森 スミエ

まだ達者 第二の道も春日和
流行は何処吹く風と割烹着
ストレスは旅の湯宿に置いてきた

寝屋川市 坂上 高栄

親離れ子ばなれ心の準備する
再会の言葉にならぬ温み抱く
アルバムを開けば父母に巡り合い

泉佐野市 大工 静子

浄土宗五重相伝受け終る
町内の八人衆の内に生き
祖母似です芋と筍大好きで

島根県 森 茂美

柚子風呂に浸って雪の声を聞く
賞味期限切れたと妻も同意する
騙されたふりで言い訳妻が聴く

十和田市 阿部 喜久江

見返りのいらぬ愛情子に注ぐ
手間暇をたつぷりかけた母の味
狭い日本歩いて見れば広いこと

阪南市 正橋 正

一太刀を浴びたぐらいで死にはせぬ
何処となく抜けたところが好ましい
鏡見て自己確認と自己嫌悪

鳥取市 坂田 和歌子

老眼鏡外せば薔薇がとげとげしい
晴れ着きて娘にっこり亡妻の顔
海草がヤーレンソーラン春近し

和歌山市 山根 めぐみ

人の世の余熱がこもる風の音
今 今の主張を溜めている蕾
しんしんと甘さかげんが身にしみる

尼崎市 中澤 向西

お祝いに安来踊りの喜寿の足
宵恵比寿 福を貰いにゆく寒さ
悔いのない歩みに福がついてくる

愛媛県 中居 善信

百姓にまさかの時は米がある
引っ張って切れるスリルを持つ輪ゴム
石積んでいると心が洗われる

和歌山市 木村初子

どんぐりころころまだ夢を追う池の底

お手本にされても淋しひとりぼち

叩かれて打たれて蕎麦に腰がつき

大阪市 今西静子

女だけ住む玄関に男下駄

寝たい時寝られることも幸と知る

元気かと息子からの電話ありがたい

鳴門市 八木芳水

米を研ぐやはり女の手が似合う

結婚式当日だけのクリスチャン

貧しいと素直になれるやせ我慢

米子市 永井三津子

奇麗より可愛い歳を重ねたい

弱い者いじめの手本 国がする

誰も居ぬ信号の赤待つ長さ

鳥取市 岸本孝子

観戦の一等席に記者が居る

過疎進む村に子供の声がない

鍵っ子が母の靴音待つ日暮れ

沖繩県 杉谷一栄

四月馬鹿かかった頃が恋しなる

色あせて紙人形に愁いあり

時計スト危く駅で救われる

鳥取市 山宮愛恵

寝たきりへ豆にぎらせて福は内

ふる里を語れば知己となる暖簾

川柳の出会い余生に灯がともり

高槻市 江原秀夫

豪雪のテレビへ熱爛ちと控え

折角の運もて余し日向ぼこ

天の声多すぎ策は宙に浮く

和歌山市 吉村さち子

口閉じた蛤 確と自我意識

切り札の言葉は胸の奥で研ぐ

因習へ女が生きる厚い壁

唐津市 江川青琴

消息の絶えた一年姉想う

あと五分フトンが恋し霜の朝

懐かしい人と出逢った待ち時間

岡山市 山磨行子

合格の神酒へ孫は大志抱く

広告の雛に娘の顔孫の顔

下着みな直立不動でふらさがる

大阪市 和田和風

初仕事俺は辞めると言いにくる

雑魚は雑魚 群れて泳いで仲が良い

友は皆善人ばかり世話好きで

大阪市 鈴木トヨ子

笹酒に託す寒中ぼけ封じ
寒椿艶を残してポトリ落つ
もう米寿 妻も女も折返し

岡山県 富坂志重

風に舞う落ち葉は安堵の地にかえる
せまくとも太陽一パイあたる家
よろめきながらも回ってる八十路独楽

交野市 山川日出子

故郷を背負い土俵に上ってる
納屋の隅ランプ 石白 古筵
カラコロと下駄の鳴る町若女将

尼崎市 立谷勇次郎

腑に落ちぬ名刺が残る二日酔い
デュエットにお呼び掛からぬリズム感
名物の地酒ころがす舌の上

鳥取市 石上悦子

手を挙げた回送バスが乗せてくれ
しあわせが行ったり来たりラムネ玉
スリッパが右と左でもめている

鳥取県 山内芳江

どん底を語る余裕が少し出来
ほんとうの事を仏に皆話す
亭主より先にベットが食事する

高槻市 傍島克治

見舞客多きに訝る病床の母
孫台風襖破って去りゆきぬ
堀越しに隣の桜が春を告げ

吹田市 西岡豊

幔幕へ神さま呼んで起工式
さりげなく温い芝居をしてくれる
のっぽビルできて冷たくなった町

鳥取市 田賀八千代

暇になる時は柩の中だろう
うれしくてりんごをまるく丸く剥く
ふる里に火種はみんな埋めておく

八尾市 生嶋ますみ

保険証だけが私の証明書
被災してもこの街がすき離れない
職退いて茶碗も洗い米もとぐ

松江市 松浦登志子

お昼寝のすりきれタオル子の宝
東京は女すてきにみえる街
潮騒と磯のにおいと父母がいる

岸和田市 不破仁緑

ぼろぼろの暖簾に滲むかくし味
生きていて良かったねえと初孫を抱く
北風が信号待ちを長くする

香川県 山崎 はつ恵

陽当たりのいい場所いつもミケがいる

意味のない差別が生命捨てさせる

張りつめた糸につまりずく身の不覚

宝塚市 黒台 伊佐武

物識りは知った顔して嘘を言い

せっかちとのろまが住んで丁度良い

子や孫の帰った後の寝正月

松江市 鶴飼 陽子

雨あがり乗ってみたいな虹の橋

孫達と雪で遊べる元気です

長靴をリュックに入れて孫がくる

今治市 越智 青園

目で追っただけで驚 飛ぶかまえ

シクラメンと話している金魚鉢

風のかたちにしだれ柳がもつれ合う

豊中市 三木 秀雄

リストラの余地なく我慢も限界だ

バブル期に踊らず不況にもめげず

年金の開始 不況に間に合った

横浜市 清水 潮華

冷凍の里芋にするかぶれ症

テレカード拾い通話が長くなる

窓口の婦警きびしく道教え

兵庫県 倉垣 恵美

いい嫁をまだ演じてる六十坂

雪解けておばあちゃんから笑いだす

にこごりもぶるとふるえ春を待ち

大阪府 原 みえこ
(美恵子改め)

古いかも知れないけれど我が家流

ちゃんづけで呼ばれ細胞若返る

親切な人ばかりなり山之道

柏市 上鈴木 春枝

フレッシュな噂を探すワイドショー

さあ夫よ育児休暇を頼みます

母に書く手紙に思いきり甘え

豊中市 藤原 桂子

五十年 記憶うすれる母の里

紅梅の匂いも込める雪が降る

三流のくらしに馴染み抜けられず

岡山県 国米 きくゑ

待ちぼうけ鉄塔の冷え身にしみる

鬼瓦睨みをきかし寡婦守る

老いの身に故郷のニュース温く聞く

大阪市 福岡 雅子

人の波こうも知らない顔ばかり

急がねば完全燃焼しないまま

急いでる私に雨と向かい風

高槻市 芦田静江

直原玉青 弥陀の襖が春を呼ぶ

豆撒いて鬼の主張を聞いてやる

寝屋川市 籠島恵子

お花見の約束もする梅の下

春に点火 黄色の花が咲きはじめ

八尾市 平川幸枝

ほどほどに生きた証の衣裳箱

割烹着 母の涙を見ないふり

福岡市 井崎ミサ子

嬉しいと口数多くなっていた

やり返す気があるうちはまだ青い

尼崎市 長浜澄子

ワイドニュース拳の燃える事ばかり

白いギターよ共に青春だったよな

和歌山県 中村君枝

出る杭に前後左右の風当り

ライバルにだけは見せたくない弱み

和歌山県 杉山精子

仏壇の灯も嬉しそう春の宴

濡衣のままの私が流される

寝屋川市 太田とし子

寝返りを何度うってもらちあかぬ

宝くじ買えばよかったこの売場

横浜市 斉藤よし一

出遅れた男の夢はフライング

僕の海のたりのたりと私語しきり

鳥取市 富山雄幸

老いにつれ愚痴と遊んで生きてます

臍の緒を切った過疎村俺を呼ぶ

羽曳野市 西村りつえ

正論を押し出しすぎてこけた椅子

思案しすぎそこまで来てた運が逃げ

鳥取県 藤山弘子

初夢をみようみよう朝が来る

数の子がひときわめだつお弁当

大阪市 中橋恵美子

赴任地から料理の仕方聞いてくる

露店商もうけさせてる弘法忌

唐津市 林公一朗

国会の住専隠しに矢がつきた

散る桜 父の人生かさね見る

島根県 谷岡ふみ

外は雪 家族でみかんむきながら

春はまだ遠くつらの日が続く

八尾市 村上剛治

寡黙だがピシリ一言的を射る

それはそれ黙って今日の靴を履く

島根県 今川 三津江
来る人が来て一日の納まりぬ
刈り込んだ庭木花瓶の花がない

出雲市 園山 かおる

愚痴を言うあまり幸せ過ぎている
雑学の中にピカッと光る物

今治市 村上 久美子

躰いた石にも学ぶ処世術
肩書きが我が子ヘール敷きたがる

愛媛県 宮本 末子

もどり寒 暖冬慣れの身にこたえ
平穏な朝が欲しくて昆布茶呑む

大阪府 亀井 円女

嫁や子の厄も貰ったオペだつた
手術日の嫁の涙は忘れない

河内長野市 水谷 笙子

淋しくて往復葉書買つてくる
寒垢離の女の肌にはバラが咲く

兵庫県 高見 末野

春風と孫が持て来る桜餅
春来れば村の話題も春になる

鳥取市 山本 崇

人生の旗を巻くまで夢を追う
厳寒の妻の不在は身にしみる

和歌山市 楠見 章子
冗談のように言うてた子が生まれ
揺れそうでそこそこで出る仕舞風呂

島根県 槻谷 仲子

お年玉欲しいが玩具も欲しい孫
赤い月被災地立派に立直る

今治市 塩路 よしみ

初雪に里恋しいとこけしの瞳
夢ばかり追つて大樹になりきれず

和泉市 横山 捷也

ペテランの一さじ違う塩加減
成人式 病んでる妻が着付けする

池田市 藤井 計光

さりげない素朴な問いが胸を打つ
水槽で明日の身知らず鯛ひらめ

鳥取県 高尾 京

せめてもの見舞あしなが募金にて
飽食の裏に難民増す世界

愛媛県 中岡 鍊三

国際化ブルーベレーが国を出る
遠来の友へせめてもナポレオン

米子市 池尾 保子

気がおけぬ普段着のまま出かけます
久々に暇をみつけた一人旅

大阪府 澤田和重
絵日記のつぼみが春を組み立てる
セールのこつ聞き上手褒め上手

高槻市 執行稲子
シャツルからゲームのように若田さん
ブレーキを踏み合い夫婦しています

富田林市 中井アキ
夫からのサインに今日は謀叛する
おもねずに谷を歩いた亡父の靴

旭川市 朝倉大柏
肩書の重みが取れた背がまるい
不器用に生きて三振ばかりする

高知県 百田幸
押し上げて降りる梯子をはずされる
ピラカンサ野鳥が群れる庭の冬

唐津市 福島紀一
従いて来る女房の足遅くなり
艶福は羽織の裏に秘めてある

唐津市 浜本治幸
たまに会う嫁と姑で仲が良い
新年会 二次会までの保身術

寝屋川市 瀧本八十八
背伸びした高学歴で職が無い
地球にも天変地異にあう節目

兵庫県 中野とよ子
握手して結んだ裏にある闘志
昔見た面影を追うクラス会

東京都 瀬戸きん子
椿不作 庭の小鳥に蜜をやろ
クラスでも庭のクローは良いからす

羽曳野市 山本たけし
生きている証拠 悩みはまだ続く
逃げた運 追うなど書いていた御籤

鳥取市 岸本宏章
新調の背広へ職が定まらぬ
ピチピチのギャルに戻せと妻が言う

八尾市 奥田明
追伸になって本音の書いてあり
犬だつて歩きたくない時もある

和歌山県 上岡正直
街角に落ち葉が話す冬至の日
しがみつに残る一葉に風の波

島根県 安部恵美子
寒の夜 不思議フクロウ啼きたてる
宍道湖にはぐれた鴨が波に乗り

出雲市 加藤スズコ
いい顔でイブに届ける松葉がに
転ぶなと叱った子供に手を取られ

河内長野市 妹 背 尽 呂久

政治家に大臣病という持病

ドンと来い病氣の方が逃げてゆく

米子市 服 部 朗 子

洋らんを吾が兎のように見守って

鉢物も座敷に上げて寒凌ぐ

尼崎市 尾 宮 弘 治

口重い人の一言 満座斬る

セールスにきっぱり妻の底力

静岡市 小 木 久 子

思い出は霧がかかって美しい

窓際に追われ気楽な椅子にかけ

静岡市 三 浦 つ ね

心まで温められる鍋料理

老人が三人寄れば近く話

唐津市 山 門 タ ミ

歳の数 十分の一食べた豆

嫌いだと言えずに食べた戦時中

松江市 安 食 友 子

期待して見掛け倒しのボクシング

陰ひなた内助の功が生きている

尼崎市 野 瀬 昌 子

復興へ力を貰う温い風

トローチをなめ舐め夜の長いこと

千葉県 大 川 晚 翠

加害者がおおきな面でテレビ出る

一病息災 気をとりもどし船出持つ

富山県 増 田 紗 弓

矢をもたぬ弓に小さな役があり

はね返すバネを育む豪雪地

和歌山市 太 田 木 管

占いに凝った娘が嫁きそびれ

ハチ公は今も渋谷で主を待つ

静岡市 中 西 雅

核実験やめぬ裏には何かある

氷点下枯芝の下春芽見る

島根県 児 玉 幸 子

薬しばの中から笑う寒ばたん

生花の梅ほころびて春の床

松江市 松 本 知 恵 子

練習をしてから父の鬼は外

シャンプーの香の娘と楽しデパートで

鳥取市 杉 本 孝 男

相手より先にごめんと言うて勝つ

必勝へ敵も千羽の鶴を折る

和歌山市 和 田 美 寿 子

ポケベルを鳴らして用事たのむ孫

拍手してまだ歌詞あったニューソング

背を伸ばしハンバーガーの列につく
句読点ないから人生面白い
宝塚市 飯西ミサヲ

潮騒の音にも春がしのび寄る
レタスから異国情緒も聞いてみる
米子市 木村春枝

墨ふくみ和の字優雅に筆下ろす
成人式 和服あてやか春を盛る
尼崎市 的場十四郎

煮凍りを舌にとかして一人酒
血糖値下がり一品増える膳
羽曳野市 麻野幽玄

この雪は軽うて小さく恐ろしい
ろう梅が咲いてこの冬幸せだ
鳥取県 国森武子

もらい癖ついて心が冷えてくる
咲いて散る花には花の運命もつ
和歌山市 森口美羽

繰り言はよそうみんなが逃げて行く
親も子も耐える事には慣れてない
鳥取県 吉田孔美子

押し花にされて女を生きている
手のひらにピアス遊ばせ恋すてる
和歌山市 松本三九

鯛横目ちりめんじゃこを下さいな
手放せぬ少し遅れる古時計
大阪市 中井正秀

手鍋さげついて来いとはいえますか
チャンス待つよりもチャンスはつくるもの
大阪市 宮本信幸

目標を絞り独りの芝居する
食卓に乗った味には母がいる
鳥取県 橋本多哥由

味噌汁で今日も歯車回り出す
凍てついた空に三日月突きささり
倉吉市 高多博丈

桐下駄を履くと昔に戻れそう
補聴器がすかたん言うて電話する
兵庫県 玉田三重

妻の無理 病人だから聞いてやる
陰口へ咳一つしてドアをあけ
姫路市 服部一典

秘密などなかった娘も恋を知り
なるようになるさ私は一人者
東京都 清原悦子

血が騒ぐけれど身体が動かない
小粒でもピリリと辛い隣の子
倉吉市 大下智子

無位無冠 本音の顔が残る路地
湯豆腐で話題を拾う縄暖簾

高知市 細木子龍

逃げ言葉 広辞苑で探して
新しい暦に嵐こぬように

東大阪市 今岡貞人

古稀迎えなにはさておき妻と酌む
初雪に烏も男も無口なり

尼崎市 松下比呂志

ごぶさたを藁袋の束で知り
巢立ちまで確かい子であつたはず

鳥取市 中澤正恵

ほろ酔いの膝を取り合う孫と孫
逃げ道を少しあけて子を叱る

大洲市 横田放人

懐の広さが解る目の配り
膝枕ネコ三匹に貸してます

横浜市 後藤早智

合格へ一際香る沈丁花
関心事 住専よりもチョコレート

鳥取市 近藤秋星

伸びつづけ疲れたゴムの無抵抗
連絡がとれず歩けばつと出逢い

熊本県 岩切康子

風にゆれピラカンサスの大の字よ
黄楊の木の紅葉にほれ縁結び

香川県 高橋たみ
鳥取市 山口しげる

逃げ道を確かめてから加勢する
祝祭日 日の丸ないが休みます

兵庫県 安達厚

えんどうに燠炭きせて春を待つ
雪の朝こんな化粧があつたのか

松江市 小西素子

歩を止めて眺める日和歩道橋
人生の橋をいくつか越えてきた

和歌山県 久保ふみえ

還暦に入塾チラシ遅すぎる
腹割って本音で話す心地良さ

今治市 渡邊伊津志

その先は聞かぬ言わぬで和む海
スクリュウの響き汚れた海が哭く

羽曳野市 徳山みつこ

イナイヨバー二歳と笑いあう日なた
ばあちゃんがひいていたんだ庭の草

大阪文化団体連合会事務所移転 〒540 大阪市中央区
谷町1-5-11 キャッスルパービル7F701号

湖抄

小出智子選

跡取りへ千年杉を見せておく
あの時の啖阿大丈夫だろうか
開いて閉じて うつろの中の老いのてのひら

床の花枯らし敗北感しきり

共犯の危うき夕日守り合う

雪の重さに人の重さに傾いて

帯に短し 短いままで生きている

めし茶碗ほっこり持てるのを選ぶ

綻びを覗けば笑う亡母の顔

生き死にを記し続けたペンの芯

スカーフを洗うと冬が浮いてくる

無人駅の時計に父を見てしまう

紫を着て欲しい頃母は居ず

両膝のメロン二つにのぞかれる

ムニエルより目刺しの方が性に合う

まだ勘が戻らぬ階段踏みはずす

忠魂碑へいたいさんは満足か

大阪の名所に通り抜けがあり

蕾からもう明日のスケジュール

雪まつり冬に終止符打ちにゆく

松原市 小池しげお
米子市 白根 ふみ

宝塚市 永田 暁風

大阪市 西出 楓楽

尼崎市 田中 薫

富田林市 池 森子

島根県 松本 文子

和歌山市 古久保和子

福岡県 本田 忠男

米子市 林 荒介

鳥取県 田村きみ子

和歌山市 木本 朱夏

堺市 山本 半銭

青森市 工藤 甲吉

和歌山市 池永 正雄

西宮市 牧瀬富喜子

鳥取県 新家 完司

大阪市 町田 達子

和歌山市 田中 輝子

富田林市 藤田 泰子

上司みな白いからずを飼うている
私をわたしに戻す休戦か
膝掛けをずらして春へ書く便り
反対をしても嫁くと釘をさし

仏さまの扉はいつも開けてある

たたりめの小骨を抜いた春一番

牡丹雪 亡母恋う万の花びらか

わたくしの心に鬼やらいをする

翺びたくてマリオネットの糸を切る

病葉を一枚抱いて生きてゆく

逢いにゆく弾みを影にさとらせぬ

ピアノ弾いています窓 雪 雪

足癖がゆっくり階段を上る

息をふきかけたこぶしのおきどころ

機敏さに欠ける真冬のひざ頭

古都寸描石の羅漢のものおもい

白紙に戻す交差点から雨になる

からめ手はやめて正面から攻める

汚点ばかりの鏡をキュッキュッキュ

ひとときは白紙にもどす雪の朝

妻と居る日は禁煙と心得る

よく笑う鏡バッグにしるのぼせる

陽のしずむ頃美しくなる港

完璧の壁に一本釘を打つ

若者の後押しをしてにぎりめし

雪が降る三年分の雪が降る

寝屋川市 江口 度

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 榎原 公子

和歌山市 山口三千子

米子市 金山 夕子

寝屋川市 森 茜

弘前市 佐治千加子

鳥取県 土橋はるお

鳥取市 小谷美ツ千

八尾市 高橋 夕花

西宮市 門谷たず子

弘前市 斉藤 荔

砂川市 大橋 政良

堺市 桜沢あかり

和歌山市 堀畑 靖子

尼崎市 田辺 鹿太

米子市 政岡日枝子

豊中市 田中 正坊

和歌山市 福井 桂香

米子市 中井 ゆき

鳥取県 土橋 螢

西宮市 奥田みつ子

鳥取県 江原とみお

鳥取市 武田 帆雀

大阪市 鈴木 節子

米子市 小塩智加恵

つゝ走る私を石が呼びかける
 泥被る度に笑顔を取り戻す
 泥舟で慌てふためくのはおとこ
 神さまはすぐには返事下さらぬ
 木曜日そろそろカレーライスなり
 きつちりと受け継いでいた父の癖
 レストランばかり混んでる美術館
 丁寧なことは別れのサインかも
 とどききは狂う日もあり古時計
 護岸工事きまぐれ鷗もう来ない
 独り住まいへ福は内 鬼も内
 墓参り心にゆとり頂きぬ
 鍋焼く匂いに嘘のない暮らし
 上の娘が案じているというてくる
 永久歯ふかいところへ埋めておく
 肩書きのとれた名刺に慣れてくる
 うつとりと鼻毛抜く日の無為無策
 遠く住み親孝行のいくつでき
 かとゆうて金があればの話なり
 久しぶり帯を結んで蝶になる
 女性パウ―二十一世紀がこわい
 酸性雨といえど心地よいリズム
 哀しみも春の装いからうすれ
 雑魚は雑魚なりの序列で生きて行く
 雨が降る心 仏に灯をともし
 無いはずのお金を妻が持っている

米子市 澤田 千春
 和歌山市 桜井 千秀
 宇部市 平田 実男
 八尾市 村上 剛治
 唐津市 仁部 四郎
 和歌山市 宮口 克子
 和歌山市 松崎 幸子
 八尾市 大内 朝子
 豊中市 辻川 慶子
 西宮市 亀岡 哲子
 横浜市 菱田 満秋
 西宮市 西口いわゑ
 和歌山市 青枝 鉄治
 尼崎市 春城 年代
 大阪府 榎山 隆
 藤井寺市 田中 透太
 今治市 月原 宵明
 東京都 山口 新子
 大阪市 本間満津子
 大阪市 神夏磯典子
 大山市 早川 盛夫
 和泉市 中川 楓
 出雲市 久谷まこと
 米子市 石垣 花子
 今治市 越智 一水
 鳥取市 坂田和歌子

裏口には裏口用の顔がある
 ゆつくりとしいやと弔辞締め括る
 良い人ばかりが先に逝く 無常
 五百羅漢亡父の姿を探しあて
 ひまになつたら鬼がちよくちよく顔を出す
 濁音の中から拾う修飾語
 浜風に当たると勇氣湧いてくる
 電子時計もちゃんと知つてた閏年
 合格だます爺婆をねらいうち
 どっこいしょ 啜うあなたのだっこいしょ
 ふる里の水は五臓によく馴染む
 なわのれん笑い上戸がいるらしい
 言えば角立つが言わねば通れない
 美しく生きたし今を輝いて
 いろいろとあつて夫婦の溝埋まる
 遍路宿大阪弁が居て忙し
 この場所と決めて私は縄をなう
 パワー全開季節はまさに春ですね
 めつたりと孫も雀も寄りつかぬ
 アンテナを取り替えてみる案内書
 新しい人形他人めいている
 銃よりも時には怖いペンがある
 いたわりに自業自得を恥じる傷
 風邪引くなど一言添えている電話
 日だまりに冬越してきた老母の椅子
 体裁も見えも無くして着膨れる

香川県 川崎ひかり
 高槻市 乙倉 武史
 高槻市 守先 伸子
 岡山県 福原 悦子
 鳥取県 西川 和子
 出雲市 園山多賀子
 香川県 木村あきら
 大阪市 板東 倫子
 唐津市 山門 幸夫
 札幌市 三浦 強一
 倉吉市 米田 幸子
 大阪市 中村 淳子
 鳥取市 美田 旋風
 羽曳野市 吉川 寿美
 出雲市 吉岡きみえ
 西条市 片山 明水
 米子市 青戸 田鶴
 和歌山市 田中 みね
 鳥取県 石谷美恵子
 京屋川市 籠島 恵子
 鳥取県 西原 艶子
 岸和田市 三輪 通彦
 大阪市 日阪 秋子
 八尾市 宮崎シマ子
 加古川市 吐田 公一
 大阪市 津守 柳伸

マスクしたナースの温い目に頼る
 幸せに迷うていますランドセル
 灰皿を出せ出さないでもめている
 ナースの目だんだん亡母に似てきよる
 エンデパー行つて帰る間に一句だけ
 おずおずと出した言葉で自縛する
 外は風花 炬燵の中の艶話
 披露する芸などなくて一気飲み
 孫が継ぐ理髪へ客も三代目
 実り多き年を信じて糶を蒔く
 捨てられることを知らない箱の猫
 福招く豆 鬼追う豆も罪は無し
 腐つても鯛じゃ通らぬ三代目
 スケジュール通りに今日も漕いでいる
 羽根布団子等の思いを冬に着る
 竹を割る男の純な正義感
 合格へ不整脈まで癒えてくる
 投げ返す語ばかり並ぶ若い辞書
 けつまずく石に個性を唾われる
 戸一枚あけてる寒い土産店
 三日目も無為という日を安らいで
 書を習う妻がゆつくり差をつける
 ほどほどの歩幅でちさい虹を描く
 若しもまた生れ変れるなら女
 信じられるも人信じられぬも人
 一本のペンと守つて来た情け

鳥取県 上田 俊路
 八尾市 高杉 千歩
 八尾市 山下美津留
 枚方市 濱田 良知
 唐津市 山門 タミ
 広島市 森田 文
 寝屋川市 太田とし子
 兵庫県 大谷幸次郎
 熊本県 高野 宵草
 羽曳野市 麻野 幽玄
 八尾市 神原まさと
 寝屋川市 井上すみれ
 唐津市 田口 虹汀
 米子市 光井 玲子
 福岡県 横地 東川
 和歌山市 山田 高夫
 米子市 小西 雄々
 旭川市 朝倉 大柏
 和歌山県 中後 清史
 守口市 森川まさお
 綾部市 藤田 芳郎
 唐津市 久保 正剣
 貝塚市 池田寿美子
 唐津市 山口ふさ子
 河内長野市 植村 喜代
 岡山県 山本 玉恵

老眼鏡かけて探している四つ葉
 過疎の里話し声まで透き通る
 低気圧いすわる足の痛みもいすわつて
 満月へ嬉しい話みんなする
 柳談に花を咲かせる店がある
 もの言えは山茶花いまに散る気配
 おふくろの味が出したい落し蓋
 金婚へ夫婦で元氣競い合う
 脈のある順に土産が配られる
 冬眠の老母にゆつくり春が来る
 出る杭になる情熱を捨てません
 玄関でいつまで炎えるシクラメン
 輝きに縁ない老母のくすり指
 本心を握つて拳 耐えている
 人生を飾る最後がむつかしい
 幸せの歩幅が妻と合う夕餉
 神に運委ねたはずをまだ迷い

八尾市 村上ミツ子
 大阪市 一本 勇太
 守口市 結城 君子
 鳥取県 山内 芳江
 豊中市 江口 明光
 今治市 塩路よしみ
 米子市 木村富美子
 八尾市 生嶋ますみ
 岸和田市 井齋 一齋
 和歌山市 吉村さち子
 和歌山県 村中 悦男
 宝塚市 丸山よし津
 香川県 山地マツエ
 出雲市 板垣 夢酔
 鳥取市 岩原 喬水
 茨木市 藤井 正雄
 今治市 村上久美子

しげおさんの句。解説の必要もないのですが、偉大な物を見せ
 ておきたいと思う親の心です。大樹を見て感動しない者はいない。
 ふみさんの句。例えば息子さんとした場合、男の意地で言い切つ
 た言葉だが、傍目にはあれでほんとに良いのだらうかと不安が募
 る。「大丈夫だろうか」が率直で温かい。暁風さんの句。破調に
 なっていますが、省く言葉は一つもない。精一杯の思いの中で、
 むなしさを感じておられる作者の姿が想像されます。
 作品を見せて頂いて感ずるのですが、今月の場合、四月号です
 から、一月中旬から、二月上旬の作品になります。無理に四月に
 合わせた句でなく、今を詠むということでお考えいただいたらよ
 いかと思います。

秀句鑑賞

—3月号から

田 辺 灸 六

加点していくと立派な夫です

宮崎 菜月

山内一豊の妻を思い出しました。立派に見える主人は果報もので、きつと出世されたでしょう。長い夫婦生活の中では幾度か起伏があり、その都度、反省を忘れずに夫を見直す余裕さえ持つ、正に賢夫人の鑑。

空瓶が並んで終るお正月

安芸田 泰子

私の正月もこのとおりでした。誰もが見逃がす小さいことで、正月三ヶ日のだんらんをほうふつさせる作者の慧眼に敬服しました。

善人に矢張り重い鬼の面

吉村 さち子

善人はやっぱり嘘が言えません。他人から仕掛けられた交渉事にもついていけない本心が動きます。善人は善人らしく、真実に従って良心に恥じぬ生き方が似合っているのです。

こたつから出ないと何も始まらぬ

藤田 泰子

齢を重ねてくると、誰しも痛感する一句です。寒さに弱くなって、蒲鉾みたくにこたつから離れるのが億劫になります。しかし、これではいけないと勇気を出して、さあ今日も頑張るぞと意気込む姿が目には浮かんできます。まだ消えぬ炎で白髪染めてます

中井 アキ

女の性はかくあるべきもの、いくつになっても若さを保ち、異性に魅力を持ってもらうこれが人間の本能でしょう。明治・大正女も近頃は赤を着る世の中、いつまでも若い気持を忘れないのが長生きの秘訣です。

木守柿競う相手のない寒さ

津村 武春

雪空にぼつんと残る木守柿は、ほんとうに寒く淋しそうです。ライバルも仲よしもみんな去って一人ぼっち、でも泣きません、来年のために。

姿そのまま執行猶予の冷凍魚

尾崎 黄紅

絞首刑か切腹か、判決が出ない魚です。しかしこの魚は、人間に食べられる宿命で生れてきたことは百も承知。蛋白源、カルシウム源としてどんな処刑でも受けると覚悟をきめ

ています。人間様のお役に立ちたいと平然としている冷凍魚に感謝。「執行猶予」という語が適切。

結び目がゆるみ不満がぼろり出る

越智 青園

夫婦間の確執は、長い間には誰しも経験することです。不満を言ってみても、どうにもならないとあきらめているのに、ついつい出た不満。あとでしまったと思う後悔も好い夫婦の証拠です。「ぼろり出る」で成功。

薬代無料にされてから効かぬ

杉本 孝男

満七十歳になって薬代が要らなくなると、こんな気持になります。病は気から薬も気から、発展途上国では歯磨粉を飲ましても腹痛が治った話も聞いたことがあります。信じていることが大切です。福祉国家で年寄り扱いを受けるのも淋しいものです。人生の哀歎。その他、心の琴線に触れた句を三句紹介いたします。

負けたふりするのが母はうまかった

石川 勝

役に立つ人になることだけでよい

渡邊 伊津志

まだ飲めるうれしさに酔う喜寿の屠蘇

江原 秀夫

尚香のむ

八木千代選

水深はどうあれ陽射しいただきぬ

筆談の紙は言葉に飢えている

封印をしたから提げてゆく刀

文章が下手でハートで書いている

呼び止めてみる風船のいろとりどり

地の底でやっぱり昔続いている

麦の穂の青つんつんと人恋し

永劫の寝顔は誰も美しく

一つ残った林檎わたしに見えてくる

来年の今日を思うて歩く町

「愛別」という駅があり雪深々

一本の杭に離婚がひっかかる

引き返す道も迷路になっっている

風見鶏 風のない日は悩み抱く

明日まで待てぬわたくしの虹よ

水面にうつる景色がほんものか

やぶ椿 咲く気はないとかたくなに

極楽に近い場所へと移動する

終点にもやっぱり花は咲いている

和歌山市 小倉 アサ

米子市 石垣 花子

和歌山市 桜井 千秀

西宮市 西口いわゑ

岡山市 川端 柳子

米子市 足立由美子

和歌山市 木本 朱夏

倉吉市 淡路ゆり子

藤井寺市 高田美代子

神戸市 船津とみ子

富田林市 藤田 泰子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 田中 輝子

米子市 木村 春枝

鳥根県 松本 文子

枚方市 森本 節子

尼崎市 春城 年代

八尾市 村上ミツ子

米子市 青戸 田鶴

流水の海へ人間捨てにゆく

堀こえた毬がだんだん風になる

相克を時が見事に解いていた

父のない児から授かる濃い時間

終章になったら書ける正誤表

熱のある枕に溜まるダリの夢

太陽に負けぬ残り火燃やそうか

「刀自」という言葉を探す白い梅

打たれる杭はより美しい景色みる

しあわせな瞬間しか刻まぬ時計

キツチンと呼ばれて逃げ場にはならず

暖流の下を旅する魚家族

原点に私を還すいろは文字

雪国のはてから吹いてきたような

歎びの文箱へ届くざつざつ

しんがりをつとめて春のはなもらう

爆弾を詰めたびつくり箱だった

わが家の鍵に慣らされる雪明かり

風呂敷に畳んでいます鬼の面

漏れそうな蓋で秘密は入れてない

繕いを忘れた針は錆びてくる

北風に慣れて亡母を探しに行く

ありがとう心にわいている泉

いっしんに鏡を磨き自問自答

化けきれぬことを教えている鏡

弘前市 佐治千加子

米子市 光井 玲子

西宮市 牧淵富喜子

和歌山市 榎原 公子

宝塚市 丸山よし津

和歌山市 古久保和子

米子市 茂理 高代

熊本市 永田 俊子

米子市 金山 夕子

弘前市 肥後和香子

鳥取県 石谷美恵子

米子市 中井 ゆき

出雲市 石倉美佐子

吹田市 栗谷 春子

和歌山市 福井 桂香

鳥取県 さえきやえ

倉吉市 米田 幸子

米子市 林 瑞枝

鳥取県 田村きみ子

米子市 木村富美子

豊中市 辻川 慶子

八尾市 宮西 弥生

米子市 野坂 なみ

八尾市 高橋 夕花

鳥取県 岩崎みさ江

ブローチの位置が決まらぬ待ち合わせ
赤い糸切れて本音で生きている
私の屋根のむこうはいつも晴れ
想い遙かぼつりぼつりと木瓜の朱
百点の妻を演じるのは易い
単調なくらしの中の水の音
筆無精ハガキが海に見えてくる
ひと呼吸おくと私らしくなる
住専の今度ばかりはうなずけぬ
眞贋は問わず形見の翡翠玉
缶を蹴る少しひねくれ楽しんで
月光に照らされて書く文がある
羅針盤傾く 君に逢ってから
マリオネットの糸が纏れてからの冬
蠟梅を揺すれば母は笑うのみ
ちらし寿司わが家のカラー守りぬく
金平糖入れるといひナ床の壺
カロリーに触れぬ独りの米を研ぐ
干し大根の皺へ手紙を長くかく
迷い入り女は雪の精になる
春は曙 目覚めるあすに夢を抱く
見つけよう素敵な旅の始発駅
死ぬ話生きる話もありジナル
海ひとつ心において父を問う
坂の上に行つて見ようと化粧する

大阪市 神夏磯典子
大阪市 鍛原 千里
鳥取市 石上 悦子
和歌山市 岩本美智子
羽曳野市 芦田 絢子
堺市 桜沢あかり
和泉市 中川 楓
米子市 白根 ふみ
八尾市 高杉 千歩
茨木市 堀 良江
富田林市 片岡智恵子
大阪市 三浦千津子
西宮市 奥田みつ子
羽曳野市 吉川 寿美
米子市 澤田 千春
和歌山市 堀畑 靖子
出雲市 園山多賀子
大阪市 津守 柳伸
今治市 野村 京子
堺市 山本 半銭
貝塚市 池田寿美子
和歌山市 宮口 克子
和歌山市 山根めぐみ
和歌山市 野々 圭子
大阪市 川久保睦子

自画像へ着せたい彩がありすぎて
風花よいつかあなたもホームレス
浅い夢だから鳩尾離れない
うしろ姿きつとわたしもあのような
五分と五分 男ばかりを責めまいぞ
張り替えた障子へ孫がドレミファソ
折り鶴の中に女を封じこめ
人脈の襲にかすんでいる好意
わたくしに痛みのわかる距離がある
踏まれずに野菊花瓶で伸びをする
楽になる明日を信じて身を削る
まあまあのところまで何時も立ち止まる
考える姿で冬をやりすこす
針山をピンクに替えて桜待つ

寝屋川市 平松かすみ
寝屋川市 太田とし子
鳥取市 小谷美ツ千
唐津市 浜本 ちよ
富田林市 中井 アキ
和歌山市 田中 みね
鳥取市 坂田和歌子
岡山県 山本 玉恵
寝屋川市 森 茜
和歌山市 福重 美子
鳥取県 西原 艶子
芦屋市 黒田 能子
倉吉市 野口 節子
寝屋川市 井上すみれ

小倉アサさんの陽射しに救われます。この世の水の嵩は多かれ少なかれ、あらゆる階層のひとにも課せられていて到底逃げ切ることとは出来ませんが、たとえ肩まで首まで沈んだとしても今のこの一瞬の陽の明るさを信じたら、何か求めてゆけそうなの。「いただきます」の感謝には生気があふれています。石垣花子さんの紙は叫びです。音と隔てられた作者は多くの子たちを育てられ真剣に人生に身を投じて来られました。川柳を通じてたくさんの方達も持たれ、その頭脳と経験とで尊敬されている今の環境ですが、筆談の対話ではどうしても短絡的になりがち。愚痴は言わぬ花子さんの全身の悲痛な叫びでしょう。桜井千秀さんの刀は、ふたたび鯉口をゆるめることはいりません。自身の内なる魂に誓って封印をしたのですから。斬れ味の凄ことは提げているだけでも判るのです。

合 格

谷 口 次 男 選



胃カメラに合格したらまたのめる
合格のスナツプ泣いてる子も写り
合格の出来ぬ羅漢のままでいる
胃カメラに合格 酒はよいと言っ
みそ汁がうまいと老母にほめられた
合格へふんぎりついた父の酒
安産の神にも祈る受験生
帆雀
合格の階段つよくのぼり切る
合格とわかる電話の声色
希久子
五十年添うて夫婦の合格旗
満秋
合格はしたが卒業出来ぬ恋
孝男
合格に絵馬のことなどもう忘れ
まさと
ムコ殿として合格のたてがみだ
保州
連れ添うてまだ合格と言わぬまま
合格の通知かゆつくり鉄入れ
高明
合格に流す涙を忘れまい
佳
さち子
合格で膝が笑った日の若さ
公一朗
合格点貰えぬままに夫逝く
時弘
この汗に合格点をつけてやる
俊路
合格を父に見せたい花手桶
正雄
合格に別れが近いばたん雪
人
武春
合格の陰に茶断ちの祖母がいる
地
雄々
合格を陰で喜ぶ百度石
天
源一
合格を陰で喜ぶ百度石
軸
和歌子
漬物に祖母の点数辛いなア
芳水

入試パス トランベツトを高く吹く
合格したはずが通じぬ英会話
サクラ咲く達磨喜び両目開け
鏡にも合格の鼻高く見せ
娘の相手俺の合格印がいる
合格は伏せて家業を継ぐつもり
母さんのやる気大型免許取り
合格の番号前後賞はない
合格をした大学は滑り止め
合格へだるまもやつとやさしい目
合格の番号跳ねる掲示板
合格の日から笑いを取り戻す
英霊は甲種合格だった兄
合格の知らせに小豆煮えたぎる
母ちゃんの煮付けの腕は合格点
合格を伝える手話の指弾む
合格はしたが卒業できぬ孫
こめかみを揉み合格の通知読む
合格へ父は酒断ちたばこ断ち
合格のおくす玉父の美酒で割る
合格点もらつて飲める妻の燭

帆雀
合格の階段つよくのぼり切る
合格とわかる電話の声色
希久子
五十年添うて夫婦の合格旗
満秋
合格はしたが卒業出来ぬ恋
孝男
合格に絵馬のことなどもう忘れ
まさと
ムコ殿として合格のたてがみだ
保州
連れ添うてまだ合格と言わぬまま
合格の通知かゆつくり鉄入れ
高明
合格に流す涙を忘れまい
佳
さち子
合格で膝が笑った日の若さ
公一朗
合格点貰えぬままに夫逝く
時弘
この汗に合格点をつけてやる
俊路
合格を父に見せたい花手桶
正雄
合格に別れが近いばたん雪
人
武春
合格の陰に茶断ちの祖母がいる
地
雄々
合格を陰で喜ぶ百度石
天
源一
合格を陰で喜ぶ百度石
軸
和歌子
漬物に祖母の点数辛いなア
芳水

はるお
君子
荒介
晋
朝子
英王子
晋
とよ子
よし津
きみ子
落児
ちかし
日枝子
勝巴
捷也
大吾
子龍
あずき
東雲
京子
強一
たず子
川崎ひかり

あがらずに話す工夫を模索する
話すこと涙に交えな無事の顔
むかし話民話はずさんなりききとれる
故郷の山も小川も話好き
これ以上話せば誰か傷つける
茶柱で話す言葉も弾み出す
ばあちゃんが時どきボツに話してる
お二人で話し合えよと逃げられる
お見舞いに楽しい話持っていく
社交上手な話で芯のない話
春の声 土と対話の鉄弾む
手話交番うれしくなった春の道
目で話すことが上手になる同居
言いかけて小言やめと今年金日
一人居の窓へ雀が来て話す
ここだけの話に尾ヒレついている
身の上を話すとかたは軽くなる
昔話孫の質問攻めに会う
振り出しに戻る話が高くつき
噂でも見て来たように話す人
話すこと無い日も耳は立てている
上げ潮に乗った男がよく喋る

尚風
旋風
節子
芳郎
圭一郎
一風
睦子
たもつ
次男
君子
花匠
高栄
とし子
章久
シマ子
重人
朝子
あずき
白光子
倫子
達子
ただし



神夏磯典子選

話 す

路 集

話し下手鉛筆今日も尖らせて
昨日した話を今日は聞かされる
もつと話しておけばよかったなあ親父
目が会った落ちた椿と話す刻
年輪で包むと話丸くなる
家族っていいな言いたいことを言う
老僧の法話ゆっくり溶けてくる
ばあちゃんの童話なんかで眠らない
作り話 母は哀しくきいている
人形に本音喋らす腹話術
寝たきりの母が話を溜めて待つ
躰いた分だけ味のある話
談合の内訳も見た万華鏡
本当の心と話す独り酒
話し過ぎては墓穴を掘っている愚か

玉恵 満秋 美代子 富喜子 寿恵子 艶子 よしみ 英王子 たず子 鉄治 希久子 俊路 雄々 勇太 日枝子

こみ入った話にならぬ紙コップ
日向ぼこ同じ話をして夫婦
ライバルの話は聞くに価する
アルバムと話すひとりの長い冬
盃に一期一会の話する

佳雲 あずま 保州 可住 蜚 日枝子

やわらかく話して貰う嵯峨豆腐
地 しげお
手話二人なんと静かな愛だろ
天 和重
屋上に話し足らない陽が沈む
軸 林荒介

電 話

土橋 蜚選



夫婦別姓電話の名義どうしよう
はじまりの話に戻り電話切る
風呂場から娘の電話まだ続く
あの女に通じたことのない電話
長すぎる電話に欠伸してみせる
単身赴任の夫を起こす電話ベル
受話器からあした天気になるはなし
使い方知らぬテレホンカードを貰う
コードレス電話がもつっている微罪
喜びも吐息も電話からもらう
ボックスで雨宿りする長電話
淋しくて時々電話かけてくる
駅からの電話と分かる発車ベル
ひとことでもいいから電話待っている
母からの電話安らぐ事ばかり
脅迫の電話を粘る逆探知
参謀がうしろに居るらしい電話
線のない電話に縛りつけられる
漬け物を噛みかみ電話かけてるな
一周忌神戸の消えた日の電話
受話器持ち替えて悲報を聞きただす
逆探知された胸にある電話

波留吉 君子 美子 和歌子 伊津志 朝子 陸子 艶子 子龍 多哥由 愛論 剛治 きみ子 一齋 勝 滿秋 隆風 宵明 正剣

また電話します女の果し状
足拭いて上げれば電話切れている
駅まで来てる電話にうろたえる
電話では社長になって威張るくせ
遅れますのでよろしくと電話する
長電話敬遠されているらしい
この指があなたに電話かけたがる
電話ベル孫四歳の受け答え
風邪ひいているねと母が言う電話
電話器を磨く結婚する妹
突然の敬語受話器がうろたえる
電話から時々とばすゴムバンド
冬ざれの胸へ電話がつながらぬ
短気者だから電話をしてやろう
屋根の上から電話している大工さん

佳 住 人

しめ鯖は好きかと隣から電話
電話ではいつもやさしい声になる
雪の日は電話へ雪の友がいる
曇雲くにへ電話をしてみよう
子が里を忘れぬように電話する

地 人

長電話冬を温め合っている
電話から泪が届くこともある
短い父の電話は暖かい
鶯の声を電話で聞かそうか

帆雀 洞庵 美代子 次男 千枝子 英王子 富喜子 勝美 あずき とみ子 勝巳 荒介 京子 しげお はるお 四郎 日枝子 可住 佳雲 ちかし 寿恵子 荒介 永田俊子

初歩教室

題一酒

吉岡美房

今回の酒などは、平素、句をつくるときの対象として取り上げておられるのに、課題としてあらためて示されると、題にとらわれて仲々句想が湧いて来ないものです。構えてしまわずに柔軟な姿勢で広く酒を考えて行くと、色々な酒が出てくるものです。また、最近はいから川柳を始められるという方からの投句も増えて来ました。平易な表現であっても作者の心、作者の想いのこもった、作者の存在感のある句づくりを目標に、先輩のいい句を参考に勉強されることを願います。

添削句

古里の酒にほのぼのあたたまり 武治

(久し振り親父と飲んでいる無口)

下戸家族一合で半分余る屠蘇 因静子

(下戸ばかり我が家の酒が弾まない)

上機嫌父が音痴の黒田節 志華子

(上機嫌酒が歌わす黒田節)

末娘の三々九度にうるむ父 タミ

(嫁がせて酒量の増えた父の膳)

茶わん酒だしじやこ手に飲んだ父 タツエ

(職人で通した父のコップ酒)

酒の飲み方も父に似たかとお母 弘子

(飲み方も父そっくりの子に育ち)

娘の見立腹の底まで焼くお酒 忠男

(恋人が娘に出来て酒量増え)

父酒俺に似るなと盃交わす 雄幸

(俺にだけ似るなと願う親子酒)

酒よりも話の好きなお爺さん 出睦子

(飲むほどに同じ話を聞かされる)

聞きあきた愚痴を着に老夫と飲む 寛子

(飲むとすぐ愚痴になる酒夫も古い)

千鳥足骨折をしてさば酒 日出子

(千鳥足ベル押す息をととのえる)

リモコンも効かぬ夫のはしご酒 捷也

(リモコンの死角で夫はしご酒)

熱燗へ小言がふえる夫に酒 幸枝

(熱燗で夫の小言封じ込め)

酒飲めば天下泰平大の字に 一典

(酒飲んで可愛い顔で寝る夫)

いい加減にしてよと妻が先に酔い 幸夫

(妻が先酔ったら困る酒を注ぐ)

二日酔いもう酒やめたは聞きあきた 川睦子

(二日酔い妻も相手にしてくれず)

理解ある夫に注いでもらう酒 ますみ

(しあわせは夫に注いでもらう酒)

にっこりと一升瓶を寄せる夫 康子

(にっこりと一升瓶を引き寄せる)

百薬の酒が元で逝った義父 てる代

(百薬の長飲み過ぎて逝った父)

酒二合まではまではと酩酊し 佳江

(晩酌の努力目標二合まで)

左遷され地酒を友とくみ交わす 多哥由

(左遷でも住めば都の地酒飲む)

ビール酒調子にのって二日酔い 崇

(二日酔い昨日の僕が消えている)

チヨコ一杯で酒の仲間の輪に染まる トキ

(無礼講酒の仲間の輪にとける)

晩酌の功德で今日をしめくくる 幸次郎

(晩酌の功德で父にある持論)

休肝日夕餉の膳で腰が折れ 玲子

(淋しきは酒に会えない休肝日)

注ぎこぼす酒に女の愚痴も出る 八重子

(注ぎこぼす酒は女の愚痴だらう)

酒を呑む口実いつもすぐ見つけ 辰男

(雪月花酒飲むために四季がある)

酒は呑んでも呑まれない様折る日々 ふゆ子

(呑まれないつもりで飲んで止らない)

たて前ではなくて本音を吐かす酒 ふさ子

(好きだから本音聞きたい酒を注ぐ)

居酒屋でひとりしょんぼり背を見せ よし子
 (居酒屋で淋しい酒を飲む背中)
 たくあんと酒で国政こきおろし まさと
 (一杯の酒で国政こきおろし)
 うだつ上がらぬ酒を飲み燃えている 三重
 (愚痴同士うだつ上がらぬ酒を飲み)
 憂さ晴らす屋台の酒も苦かった ミツオ
 (憂さ晴らす酒で段々目がすわり)
 回り道して居酒屋に憂さを捨て 太郎
 (憂さ捨てに回り道までする飲屋)
 酒癖が十人十色の顔になる 隆
 (酒癖は十人十色捌くママ)
 爛をする側で待つてる焼スルメ ふみえ
 (裏方は爛とするめの焼け工合)
 めでたさもお神酒の量で計られる 孝男
 (めでたさをお酒の量で盛り上げる)
 酒の席差しつ差されつ日がかわる 知香子
 (友が来て差しつ差されつ日がかわる)
 祝い酒心も酔わせて門出さす トヨ子
 (本人は一番酔えぬ祝い酒)
 一気のみ梅酒で医者へ走り込み 美恵子
 (一気飲み酒と心中した話)
 無事済んで積る話も酒のあて 美子
 (そこそこに会議すませて酒にする)
 酔うほどに地酒自慢も国訛り 俊一
 (民宿の地酒自慢も国訛り)

同期会酒で大いに笑わされ
 (クラス会酒が入ってお前俺)
 禁酒しているのにやたら誘われる 克美
 (禁酒するつもりだけれども信じない)
 税率に酒の嗜好を左右され 方子
 (税金で酒を飲む人払う人)
 巡り来るあの日を偲び盃を手に 郁子
 (震災忌あの日を偲んで盃を置く)
 泥酔の果ての蜜行許す国 義男
 (酒飲みによたら寛大すぎる国)
 表現・着想ともに立派な句
 居酒屋ののれんの中に別の俺 弘雄
 どんな気になるのが酔ってみたい酒 雅子
 代行車あると秘蔵の酒を出す 宏章
 祝い酒無口な父を喋らせる 孝子
 うまい酒悲しい酒も知らぬ下戸 りつえ
 妻の酌菜のように飲んでる 三郎
 百薬の長が肝臓いじめてる 正
 就職へ金粉入りの祝い酒 一乗
 二次会で上司肩に飲み直す 淳子
 飲むほどに記憶が戻る泣き上戸 君江
 妻の旅地酒みやげと決めている 絢子
 熱燗にほろりと溶かすわだかまり 春枝
 同じ酒飲んで浮く人患病する人 治延
 白酒に酔うた娘も一児の母 てる代
 雪国で駒子も居ないひとり酒 明美

わたしには酒を飲まなきゃすぎた人 昭治
 自称酒豪いつもお酒に吞まれてる 剛治
 傷口を広げる酒は注がないで ミツ子
 お酒いろいろ粹に飲む人騒ぐ人 円女
 通夜の酒はじめて聞いた艶話 高栄
 晩酌の肴に孫を膝に抱き 行子
 かじかんだ手が甘酒を放さない 勝巳
 宿の酒飲んで仮面を脱ぎ捨てる 君枝
 深酒は俺を欺くためにある 芳水
 達人に似せてワインのかくし味 碧
 酒好きが一本さげて会いに来る 飯静子
 百薬の長がわたしの常備薬 (夙)孝雄
 根まわしの酒が効いてる多数決 キヨエ
 酒好きの鬼と今年も手が切れぬ 武春
 栄転も左遷も酒でけりをつけ 木管
 生きているうちに供えてほしい酒 志重
 酒好きの婿で味方の増えた父 蕉子
 素面ではとても言えないこの台詞 幸子
 私の句
 飲むほどに妻が綺麗に見えてくる
 ◇
 題「散る」 4月15日締切(6月号発表)

4月15日締切分から添削を受ける原稿の宛先は、担当者の自宅ではなく、川柳塔社事務所へお送り下さい。(編集部)



毎月25日締切・30句以内厳守 編集部

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

死ぬめでは余生を綴るボールペン
モミガラの下に新種の芽が育ち
新年からもチンで始まる独り者
あたらしき歳の始めのわらべ唄
新春の空学究の銅鑼が鳴る
新雪をふめば悲鳴のようになく
新雪に醒めて気づいた誕生日
新しい友の参加で風かわる
煩惱の渦の中なる十二月
松の内明けてつち音新たなり
新機種は見切つて音新たなり

川柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

それぞれの個性を活かす年賀状
胸の内覗いてみたい人が居る
万難に耐え九切に今一步
捻挫して後悔してるハイヒール
聞き捨てにならぬ言葉に血がのぼる
迷信が過ぎたか不運しのび寄る

糸通す針の穴見て齢を知り
孫帰りやつと我が家もお正月
方便な嘘がするりとノドを越す
鍋磨くようにはゆかぬこのお肌
今牛若八艘目には海に落ち
老僧の頭 本尊より光り
行者達登りてこの身丘落とす
登り来て動悸静める山の水
天国へ梯子を掛けてヨジ登る
こだわりを捨てれば心開けて来
寒い朝手編みの手袋母の温もり

川柳東大阪 森下 愛論報

むつかしい話に鍋は煮え詰まる
鍋ものを毎日続けたいこの寒さ
コゲ鍋を磨くも侘しワンルーム
遠い日の約束別れつらくなる
子想外別れ話は向こうから
突然に妻が別れを切り出した
別棟になって新婚丸く住み
経百巻筆も心も丸くなる
壁は無く丸いボールを跳ね返す
鳩の目の丸さは人を疑わす
本当の母さんでない嘘だらう
下山時刻過ぎてても友が戻らな
いささやかに丸め込まれた欲の皮
丸一つ見落としていた歳の市
絵馬奉納甘い考えだと思つ
甘い点つけて明日に期待する

治延 正雪 ひかり かおり 坊太郎 あきら 文仙 千カエ いさむ よしみ なみ子
恒明 文秋 真柳 正博 賢子 東雲 一志 雅文 治也 湖風 晋吾 頂留子 弘直 孤舟
わたしの心にまさかの鬼が住む
すぐ父母に頼る甘えが直らない
溝口町川柳会 小西 雄々報
数の子を買って迎える初春うれし
正月の膳をにぎわす鱈の子
ほどほどの旨さ数の子酒のつま
数の子も食べ新しい風にあう
数の子も庶民の口になじんでる
数の子へ縁起かついで屠蘇祝う
数の子の好きな父で酒かわす
数の子がひとときわめだつてお弁当
数の子がダイヤになったこともある
数の子の方からお節減つてゆき
川柳クラブわたの花 吉村 一風報
立冬にカボチャが売れてゆく人氣
下積みの長いトップの低い腰
干しふとんどれもその子の匂いもつ
早や孫もふとん大人の丈になり
ハードにもソフトにもなるいい女
気がつけば妻は遠くを歩いている
タイガース人氣に甘えたらあかん
いつからか下駄箱に下駄ないからし
寝袋をもって出かける子の下宿
嫁入りの着物布団に化けている
陽を吸ったベビーブトンによく眠る
日に干したふとんのぬくい母心
ふとん干すどこから来たか寒の蜂
シマ子 信治 久子 信敬 正光 鈴木 康枝 豊枝 静江 弘子 智恵子 雄々

知事さんもタコ焼人知ってはる
宝から重い荷物になる子供
大虎のはじめは猫のようでした
幸せになりますと云う荷のふとん
あと五分ふとんでカメが決意する
薬に寝る露堂の夢に月やさし
生前の母は知らない羽布団
てつちりの人気へ河豚は悲鳴あげ
段ボールケースに住んでいる布団

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

あの方に会える便りに服をよる
年金をはたいて孫にお年玉
八十いくつやる気の趣味で若返り
母親になる娘に妻がアドバイス
雪男あばれアーケードまでくずし
予測せぬ大雪が来てお正月
団体が観光兼ねた初詣
かける水災ともえる裸群
年寄りてすつからかんの知恵袋
よく怒る年のせいかと不安がり
雪かきのギツクリ腰に年齢を知る
何よりのやすらぎ家族の笑顔です
添え寝した母さん先に船を漕ぐ
お遍路の雑魚寝お経の音がする
一方通行夢中の恋も片想い
無我夢中暮らした過去を懐かしむ
妻のつぶ声は聞こえぬ対局中
バーゲンの品を夢中でかきわける

春江 まさと 幸成 朝子 友甫 美津留 鬼遊 志重 伊久栄 伊久栄 亜矢 ただし すみれ 久水 富士野 富土野 のぶ子 美恵子 種子 善代 秀香 吟平 禅心 旭泉 甫正 楽山

若い日の詩吟夢中でよく通い
書き初めに夢中の子供墨だらけ

川柳高知

川竹

松風報

千代女 知世

二次会へ妻に内緒の金がいり
二次会は幹事好みのママが居る
二次会でくだい話を聞いている
二次会のさそいにノーがなぜ言えぬ
二次会へ妻の角など気にしない
二次会へ寝に来た奴も払わされ
自分史の見事絵になる幕を揚げ
座頭が幕引きもする旅回り
納豆の糸のねばさに似て夫婦
独身の友には言わぬ夫の愚痴
雑学を役立てているお世話役
枇杷の花まともに冬を受けて咲く
胃カメラが捜し当ててる酒の量
一生を宝さがして終りそう
二三日たつて出て来た捜し物
肉親を探す孤児にも深いしわ

川柳後楽吟社

從野

健一報

孝雄 佳風 圭功 快風 竹萌 三郎 有佳 春枝 幸泉 さち 子龍 千鳥 松風 菊野

人望のない舌先で紙にくる
劇中劇妻の尻尾の火傷あと
真直ぐに歩いた父の骨拾う
二者択一鬼があつげらんかんと
鏡の裏にうすら笑いの僕がいる
頭からかぶりつけます達者な歯
少年の汗ほど確かなものはない

吉則 義親 秋月 正秀 道博 金吾 拓治

佳句地十選 (3月号から)

肥後 和香子

二次会であなたの裏を見てしま
良い年を日本列島待つ初日
生き方をかえて歩幅が活気づき
下駄箱に亡母の雪駄が生きていた
山裾を米一合の煙たつ
山茶花の真つ赤に炎えて風に佇ち
手鏡の見知らぬ人に会う恐怖
寄せ鍋の味覚の底の爛さまし
また会おう会えないかもの戦友会
決断はあと一本を飲んでから
出不精で貰うばかりの夜みやげ
お年玉犬にもあげよう肉を貰う
千の罪流して女愛される
寒椿冬日に元氣彩を増し
もう火事かと思えば消防出初式

浄美 佐加恵 桃風 まさお 美智子 玉水 幸子 邦季 柳五郎 青銅 柳五郎 哲郎 博友 吟平

深い入江で人魚が月の子を孕む
本棚に飾る聖書にある微熱
電話機を静かに置いて恋終わる
罪消してみても修正液の白
母からの便りに白紙がそえてある
喜びも悲しみも知る足の裏
鍋みがき磨き女は脱皮する
夫も子年わたし時とき猫になる
パレットに無い色を着て秋の山
べちゃ靴でゆつくり歩きたい余生

草風 多賀子 青道 野草 昭二 アサ ひろ子 龍人 楓楽

床柱ぐらつき支える妻がいる
森を伐るきつと重たいツケがくる

佐川川柳会

赤川

菊野報

進 草風

お捜しのはりまや橋はここですよ

川柳の道なき道に迷い込み

喝采を浴び頂上風あり

喝采を浴び頂上風あり

喝采はないが直線行く誇り

年齢がじやまして深く再手術

小吉のみくじが迷いて迷くする

人情がからんで前へ進めない

高柳川柳サークル卯の花

川島諷云児報

母恋いの想い出抱いて雪の馬車

皆の優しさに抱かれて生きている

松手入れ空の青さを抱きながら

謝りのかたちで妻を抱いている

何も言わずに肩だけ抱いてくれた父

抱いて下さい過去を忘れたいために

たまたまの運摺む手に血が滲む

幸運なことだ美人が茶を誘う

運不運お互いさまと言う夫婦

運不運もう諦めた夫婦独楽

母性本能くすぐる運のない男

汗をした掌に幸運が転げ込む

運命線信じて汗を惜しまない

チャンスさえあればと思うのは若さ

手を繋ぐチャンスが出来た水たまり

東雲

手の届くとこまでチャンス引寄せる
神さまにもらうチャンスがつかめない
チャンスだが女は背中向けたまま
夫婦別姓離婚のチャンスお手軽に
いいチャンス招待券が二枚ある
チャンスだと思ふ散髪しておこう
飾り過ぎ元の自分を見失う
あれから一年風は怯えている時計
千羽鶴とび立つ窓は開けてある
マラソンが雲と一緒に折り返す
思い出は思い出でよし冬の雲
夫婦別姓男の髭が薄くなる
午前五時四十六分私は生きている
わが骨のきしむごとくに氷張る
悔いること多く重ねてきた馬齢

川柳ささやま

酒井

靖子報

諷云児

薫

重人

正坊

白漢子

英一

澄子

克治

しげお

紫香

よ志子

波留吉

艶子

庸佑

とみ子

磨かれた数だけ丸くなって古い
神のみが知る身の上にさからわず
心外な身の上聞いた通夜の席
天を突く夢は捨てないこぼれ種
未来図の焦点に置く児の笑顔
にんげんが消えてる神の未来図に
動く世の未来を背負うランドセル

竹原川柳会

時広

一路報

喜悲哀素直に書ける日記帳

日記帳私の歴史を刻みこむ

豆まきは鬼のいぬ間に済ませとく

初夢を見たのは未来の私です

日記帳ぼくは反省だらけかな

青い地球の未来へホクの樹を植える

日記帳友が浮かぶよ声もする

日記から思い出拾う楽しさよ

結婚の宝物です子育て記

日記帳三日坊主の年もある

孫に夢託した夫の日記帳

ごめんねと日記の中で詫びておく

呆けてない証は愚痴のない日記

一日一善日記に恥を書いている

現役の日記毎日明日に賭け

年賀状供えて亡夫と話す

一匹のカエルとなつて春を待つ

未来を信じまともな暮し考える

未来どうあれ兎に角あすの米をとぐ

新雪踏み未来に続く尾根に行く

蝸牛

静佳

夏喜

節夫

房子

菁居

喜美子

一枝

栄恵

年子

淑子

明子

千年枝

蘭幸

中千枝

高史子

高3晴美

高3晶美

富美

可住

靖子

つや子

ヒサ子

和子

芳郎

富美

可住

靖子

つや子

つぶらな目未来見据えた夢を持ち
山々を潰し未来の街と言っ
プラス思考未来は丸いと言っ
乳母車の中で未来が眠ってる
未来人たれ成人式へ送り出す
子らはみな妻の味方となる未来
未来凶を走る列車の中で書く

岸和田川柳会

田中

文時報

お土産のシャネルの五番着ています
里帰り破れ障子の置土産
出稼ぎの土産にこもる父の愛
嘘言っも土産が語る隠し事
祖父母には優しい言葉よき土産
リスト手に義理の土産の品定め
エンデバー大きな土産のせてくる
ピリオドを打てば無用の風が吹く
無用だと言われぬように金を貯め
学歴は無用実力で勝負する
共稼ぎ包丁無用新世帯
気遣いは無用で温い仲間の輪
教科書は要らない母のかくし味
肩書きが消えて無用になる名刺
目もとから笑いが覗く勝ち名乗り
この人の目もと信じて五十年
呵責の念つきぬ涙の震災忌
叱つても目が笑つてるお爺ちゃん
巢立つ子へ母の目もとが濡れている
おん目もおんやわらかき仏たち

笹舟 喜久恵 比呂子 笑子 静風 一路
弘象 苑子 敏光 朝一 鹿太郎 呂万 一弥 信博 一齋 甚一 東雲 通彦 萬的 狸村 基 路子 辰郎 盛之 さいよ子 ひで

基地返せ知事の目もとが爽やかだ
被災地で輝く目もとボランティア
おやさしい目もと剣道二段とか
正月の出店気になる初詣
食いしげり何を詣てた神戸っ子
正月明け伊勢海老を買っ土産
二浪して別な神社に替えてみる
お百度の素足が参る朝詣
僕の賽銭判ってますか戎さん

三幸川柳教室

三宅

保州報

コーヒー一杯二時間も待っている
粘り抜き初志貫徹で見せた意地
足枷を外し粘りを休ませる
粘るのは勝手こちらも意地になる
粘り抜くため仮面をつけ替える
粘るより引く潮時をみる器量
紅椿粘りつづけていいんだよ
ムルロアへ粘り勝ちなど言わせない
真心をこめた損なら惜しめない
裏も知り損でなかった回り道
下請のまた下請で値切られる
直角にももの言っ父はいつも損
損をした話はしないギャンプラー
気前よく負けても損のない仕組み
万馬券に化け損なつた紙吹雪
喜怒哀楽耐えた数だけある火種
君という風で火種が弾け出す
埋み火の火種大事に女舞う

ダン吉 洞庵 白光子 昭二 洋 けい子 文時 富志子 柳宏子 朱夏 義男 秀男 三千子 武春 町み めぐみ 孝子 さち子 正雄 親路 貞子 公子 高夫 百合子 かず子 満洲子 美寿子

一触即発いつもどこかにある火種
根拠のない火種は嫉妬かも知れぬ
懐の火種の使途は愛その他
ご用心遊ばせ火種抱くわたし
ブラックユーモア青い火種が飛んでくる
ここだけの話がやがて野火となる
その時はかならず僕が受けて立つ
体当りで行きます受けてほしい愛
ラストダンスは私が受けて上げましょう
受胎告知マリアの耳が赤くなる
勲章を受けぬ勇気が評価され
受け皿は弥陀のお膝とすがりつく

城北川柳会

吐田

公一報

婚約が決まりあなたと呼んでみる
母さんのおはぎ小豆が喋り出す
あやふやな電話取次ぎ叱られる
あやふやな記憶いらだつ刑事部屋
転ぶまい思いつ走る駅階段
何気ない気配りつ走る靴擦れ
ぜんざいを食べにおいしで友の声
呆れても言えぬ庶民のもどかしさ
早起きでないが万歩計に起こされる
呆れるとつまい言葉が見つからず
振り出しに戻るサイコロ弄ぶ
舵取りも筋金入りで腕たしか
元旦の恵方へ子年まつしぐら
一筋の川がうるおす田や畑
亀も歩む私も歩む一歩ずつ

初子 靖子 みね 千秀 章子 保州 よし子 当代 桂香 和子 鉄治 美子 久留美 典子 静子 史風 政子 登美子 あき子 美代子 柳影 照子 とし子 八重 扇帆 一枝 トヨ子

未練氣にまだ調べてる宝くじ
あやふやな地図に戸惑う岐れ道
ジッパ―を上げて娘は大人へと
この平和世界に届けと初日の出
初日の出同じ陽なのに神々し
年毎に宅配便が疎遠する

大荒れの年行く除夜をしみじみと
席ゆずろう僕にも故郷にこんな母
百円の音を聞いている慈善鍋
破った手紙書いてじっくり読み直し
木枯しへ笛を吹けないキリギリス
不揃いの野菜も同じ陽を浴びる
少し離れて妻の温さがよくわかり

川柳塔鹿野みか月

土橋

信じてただから袂をわかつのだ
見てくれと言わぬ野菊の花に負け
政治不信こんな日本に誰がした
寝たきりが定期預金を抱いている
墓石にははかない命と言わせない
ジャンボくじはかない夢となりました
燃えつきてはかない灰が地に還る
はかなさを光と競う牡丹雪
雪マーク明日の足を休めよう
福祉とや婆を取りまらぬ雪に聞く
大雪に死んではならぬ嫌われる
除雪車にただ手を合わす銀世界
雪しきり昔の冬が浮きあがる
雪しんしん電話で元氣確かめる

倫子 白峰 睦子 あい子 千尋 秀夫 達子 春蘭 高栄 満津子 ただし 寿美子 公一 螢報 武子 明美 野草 隆風 実満 はるお 孔美子 正惠 富久江 房重子 八重子 汲香 和子

雪解けるまでの裏通りが冷える
五十年忌つたや踊りで大変だ
大変を母子しつかりおぼえている
さあ大変もんじゆの知恵が狂っている
美しい嘘を言うのも大変だ
大変なことを承知で頭下げ
角のいい家にやさしく豆投げる
人の好い家に追儼の鬼が寄る
歳女豆をふやして鬼やらい
あつ痛い鬼も逃げだす年女
鬼払い心に花を植えておく
節分が過ぎたら君に逢いにゆく
福は内鬼は追儼の縄のれん
幸せに追儼の豆を食べている
つるつるに廊下磨いて福はうち

南大阪川柳会

金井

文秋報

工作は苦手だったと大工さん
冬大根亡母の味にまだ遠い
工作の道具誰にも触れさせず
のんびりと空中散歩熱気球
のんびりと待つ気にさせる花時計
相当にふくれているお今日の妻
美味しいと賞めてお代り強いられる
私にもいつかは運が向くだろう
土性骨ないから吠えてばかりいる
裏工作ばれているらしく妻笑う
土性骨粹をはみ出す子がひとり
美味しいと言えぬが妻の味になれ

諷人 菊乃 保子 喜与志 きみ子 かつ乃 弘子 みさ子 節子 睦子 久枝 三千代 くに子 智恵子 螢 直子 凡子 庸佑 東雲 楓楽 志華子 柳宏子 千里 良 萬的 寿美 正博

ノータイで一生通す土性骨
相当高いブランドの名で釣られ
採算は無理なのれんを守る味
それ相当に紋付を着て出かけ
親の手がありあり見える工作展
嫁ぐ娘へ母が教える隠し味
相当に遊び慣れたる身のこなし
美味しい話乗せて満員グルメバス
下積みがアツと言わせた土性骨
土性骨ここで見せたい徳儀

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

葉包紙暇に委せた千羽鶴
いたわりのことは一番いい薬
煎じ薬コトコト炊いている孤独
荒波が勇氣の薬行く漁場
春風に背筋も伸びる万歩計
春つららピアスを風が吹きぬける
春のリズムに溶け込んでいく若さ
住専が総理の春を遠ざける
木枯らしをくぐると春の匂いする
春の陽を浴びてルンルン回り道
おぼろ夜に花かんざしで薄化粧
春に背を向ける心乾かせて
思い出が尽きぬ私乾の硯箱
跳び箱の不得手同士が日なたほこ
夢やぶれ箱庭づくりマイホーム
玉手箱心に抱いて夫婦道
愛妻をガラスケースにしまつとく

度 文秋 恒明 智子 真砂 勝美 悟郎 章久 頂留子 重人 柳宏子 朝子 ますみ 信博 洋 一風 恒明 とみを 美幸 賢直 弘直 泰 和子 禎三 東川 東雲

男らしくなくても今は逃げておく
 とも小さな箱でいいのですダイヤ
 掌を逃げていく幸せのすすり涙
 逃げるほど月夜に走る影法師
 逃げ道にきまり文句を敷きつめる
 炎のような恋をソフトに受けとめる
 義理で来たらしい二人はもう居ない
 初対面のソフトな態度買ひ被る
 東山雪をかむった京言葉
 春の陽にソフトに光る蓬の芽
 弥勒菩薩の柔和な笑みに救われる

川柳塔きやらばく 政岡日枝子報

数珠の数念仏あげる老母である
 八合目前も後ろもよく見える
 背に腹と十一承知で借りてくる
 出合いがしら借りた着物で下を向く
 運動会私までも借り出され
 借り一つ負って男の背が伸びぬ
 借りた証文私の鞭にとつてある
 借りの世で紅葉も我も散ってゆく
 一日の借りを重ねて夕暮れる
 他人さまに知恵を借りつつ今日がある
 とつておきのユーモア借りて闇を抜け
 謎ときに困り文珠の知恵借りる
 とても寒くて太陽さまを借りにゆく
 冬の絵に希望の色を借りて来る
 深く借りを返そうこぼれ萩
 借命を大切にするかたつむり

春子 森之 隆 宏 度 頂留子 三男 勝美 シマ子 恭昌 朗子 夕子 天雀 美世 八重子 すみえ 保子 恵子 春枝 玲子 瑞枝 亜弥 富美子 晶子

情を借りたまともし火が老いていく
 どういう訳か借りた物は返さない
 友達に借りた演技で越す峠
 チエ借りに来て相談をされている
 借り物の寿命に満期近くなり
 無位無官借りのないのが勲章だ
 たん瘤を今の子等にはみないなあ

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

立っているのは自分の力だけでない
 春の音ゆっくりつぼみ笑い出す
 フロッピーディスクに入らない秘訣
 弁が立ち足をとられたのも弁だ
 弱くとも自分の足で立っている
 さり気なく立って話の腰を折る
 岐路に立つ男を救うのはおんな
 辻地蔵優しい顔で立っている
 立ち話の母を何度も子が見上げ
 吹けば飛ぶ軽さで淵に立たされる
 際立った顔で誤解を受けている
 絵日記のつぼみが春を組み立てる
 誕生日蕾のバラを下さいな
 その他大勢の中で光っているつぼみ
 咲くときの色蓄えているつぼみ
 つぼみのような口で骨までしゃぶられる
 春の陽へつぼみはすこしずつ喋る
 膨らんだつぼみへ雪が嫉妬する
 梅林のつぼみも耐える氷点下
 耳もとへ秘訣の話あのねのね

ふみ 日枝子 荒介 寿々子 花子 ゆき のり子 保州 さち子 愿 ダン吉 射月芳 淳太郎 三男 紫香 萬的 好笑 美羽 和重 由美子 輝子 栄美子 紀久子 三枝子 英子 誠子 豊太

金貯まる秘訣あったら教えてな
 とときめの秘訣しつてる露のとう
 指切りの秘訣魔法の愛がある
 おいそれと秘訣は見せぬ父の背な
 健康の秘訣野良着が知っている
 円満に生きる秘訣の負け上手
 浅漬の秘訣業あり母の愛
 秘訣など何にもないと母の味
 一枚のはがきで鯛を釣る秘訣
 斜めから秘訣を盗む弟子の腰

川柳塔まつえ吟社 恒松 町紅報

片えくぼ私を誘う落とし穴
 初対面えくぼに男どもりがち
 お見合いの写真にえくぼありと添え
 辛酸を知りつくして片えくぼ
 美しい地球のえくぼ海なんだ
 独身で通すえくぼの深い訳
 毒ぐもの話題もとだえそして雪
 雪の夜は雪の話をして眠る
 明日までは延ばせぬ銭を雪の中
 外は雪温かい鍋二人酒
 露天風呂呂浸かって雪の声をきく
 愛憎の炎に雪が降りやまぬ
 計画を運ぶやさしい風に会う
 計画は一姫二太郎だったはず
 きれいごとだけ盛ってある計画表
 時々妻のプランに乗っておく
 誇り持つ計画龍頭蛇尾となり

早苗 清子 陽子 きみえ 日出子 与根一 博子 可女 午朗 登美子 茂美 螢 房子 登志子 邦代 利徳 初子

休暇明けもう追いかけて来るノルマ
 ボケットの小銭慰め合っている
 小銭かぞえて小さい商いが終る
 社会鍋の小銭に人の情け知る
 小銭ないから入口で拝んどく
 魚屋の小銭はザルにぶち込まれ
 人前でう捨えない一円貨
 マイペース貫きひとり住む老母で
 地震からまだでこぼこの石畳
 寄り道の好きな足です北野坂
 用はないけど御無沙汰詫びる長電話
 筆の穂を噛みゆうゆうと賀状書く
 酒に合う料理がいつも夕の膳
 珈琲館の花を生花か触れてみる
 土鍋のゆげを手でかこむひとり

川柳岩出

小倉 アサ報

庸 佐
 百合子
 磔
 波留吉
 白浜子
 杜的
 英一
 てる
 笑女
 達子
 美穂
 春蘭
 武庫坊
 年代
 水客

日の丸の想い出哀し知覧基地
 嬉しさも辛さも伏して蟻親爺
 喜寿過ぎてちよつと嬉しい夢を見る
 赤のれん通い続けて良き友に
 嬉しさと不安半々嫁ぐ朝
 旅の宿嬉しい声で若返り
 日の丸を宇宙へ賭けた若田さん
 難問が解けて嬉しい今朝の紅
 顔なじみ定位置に立つ朝の駅

ほたる川柳同好会

井上 直次報

正義
 良一
 重徳
 哲雄
 千鶴子
 英子
 春子
 昌子
 正直

ルーズな子どちらに似たかもめてます
 お金にはルーズな男だが人気
 ノーネクタイルーズではないぞカジュアルデー
 政治家は他人にからく身にルーズ
 誰がためにたが緩めたか知りたがり
 一寸だけルーズも魅力愛してる
 ルーズさをあの愛嬌でかわされる
 押入れはルーズでいつもなだれくる
 老いたとて愛に差別のあるものか

西宮北口川柳会

亀岡 哲子報

吉太郎
 直次
 馬洗
 善守
 祥風
 つよし
 昭子
 瀧小
 純次
 とみ子
 佐江子
 鹿太
 嘉代子
 房子
 夜船
 求芽
 能子
 佳秋
 春蘭
 しげお
 源一
 重人
 香子
 いわゑ
 涼子
 澄子
 絹子

気まぐれに入つた店で旧友に会う
神の気まぐれ今日もわたしは生かされる

よし津
みつ子

サークル檸檬

小林

一夫報

続柄は僕の長女と書いておく
来年も君は奇麗でいて欲しい
塩加減一つで決める母の味
塩っぱい汗が男の勲章だ
続柄にはみ出し者がひとりいる
減塩の味に真心添えている
来年もいいことがある生きてやる
夕焼けからもう豊かなメッセージ
花火の夜買った指輪も箱の中
二百号続いた柳誌自慢する

勝見
季芳
博丈
幸子
節子
孝恵
蟹
とみお
よしえ
弘朗

信じ合うから気まぐれも許しあえ
水桶で足りる余生がふと淋し
朝ご飯おいしく食べて今日も良し
余白にはほんのり赤い花を描く
整形外科転んだことは伏せておく
ネクタイの好みが帽子に似合わない
早ばやと思いの丈をチョコレート
嫌なこと後回しにするあかたれ
弁解はよそ雪が舞っている
解けもせず一筆箋でまだ怒る

杜的
江美
はつ絵

人間だから歳だから愚を許し合う
まあまあと云っているのは褒めことは
挨拶が下手でも一度お辞儀する
可哀想人間みんな使い捨て
冬籠りの二月ときめて人恋し
一月十七日ひたすらに忘れたい
暗がりて漫才したる携帯電話
手の届く鬼一びきへ豆を撒く
この国のあなたこなたに基地の咳
身に覚え空白の日記は枯れる
冬の日記胸底に雪降りつもる
日記帳ある日わたしは鬼女になる
作業難航すと神戸復旧工事の日報を書く
この世のことはこの世で終る日記帳
日記帳楽しいことは続かない

千代
正坊
喜美子
房子
あずき
みつ子
雅子
たか子
薫

口下手か縁がないのかあかたれ
あかたれ勉強すると口ばかり
あかたれ我が精神の脆さかな
あかたれたれだから話せず片思い
賭事で泣きごとと言う奴あかたれ
五十年生きていまだにあかたれ
我が家系なぜか女は寅二匹
はみ出しがない家系で不幸
人嫌いな心のカゴを無くしたい
お人好しこれが家系で困り者
縄籠に母の思い出もろてます
鳥籠を放しやさしい姉嫁ぐ
家系にはピンかキリまでいる強み
男から花籠届く夢をみた
この人がいるだけでいい和んでる
はしゃぐ子の顔の明るさ相まされ
あかたれ言うまい隔世遺伝かも

美代子
須賀夫
太元
河南子
推高
叭笑
信醉
青道
多香
かよこ
良花
雅果
美子
美花
柳昌
しげお

ローズ川柳会

山崎

君子報

川柳塔打吹

奥谷

弘朗報

坊農

柳弘報

思案顔犬が心配げに覗く
膝を病み連鎖反応そこかしこ
地震が変えた人生の織模様
白梅の思案深げに咲き始め
生かされた命いだかく雑煮焼
お雑煮の輪に甦る亡父の顔
更地にもようやく咲いた寒椿
再建の稲首町の応援歌
年替り猫も思案の鼠とり
思案してビールの泡をあふれさせ
こばれてた一言へ出す始末書き
右ひだり生き方きめる思案橋
老母なりに思案している小さい背な
思案しても年金枠の浮き世なり
思案してまたもチャンスに見放され

哲子
トミエ
貴代子
まさお
はつ絵
民平
君子
義子
笑女

喪の塩をまいて私はまだ死なぬ
生活に欠かせぬ塩をたくわえる
回り続ける水車に感謝して眠る
塩辛をほめて晩酌追加させ
息が合うまでは続けてゆく絆
不況風よそに行楽客続く
作戦か妻の黙秘はまだ続く
大物の牙城へ続く芋の蔓
海鳴りよまだ来年も騒ぐのか
トンネルが続くとみんな黙りこむ

希久子
いわゑ
一夫
楓楽
智子

智恵子
須賀夫
太元
河南子
推高
叭笑
信醉
青道
多香
かよこ
良花
雅果
美子
美花
柳昌
しげお

傷つて昼から酔ったあかんたれ
雑踏を避けて通ったあかんたれ
天下りかかえ住専助けられ
長生きの家系ですよと励まされ
ああヒミコ家系は謎のままでよし
籠の目の土器縄文を語り出す

こだわった家系婚期が延びるはめ
くず籠に歴史の秘話があったとは
借金のとてもし上手なあかんたれ
和む目のそのまんなかにいる天使
賭事は一切タブーという家系
大原女のお花どうどす籠の春
和やかな気分になれる友と呑む

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

髭面のマスター売っているケーキ
子供のようにケーキをさげて父帰る
苺のせ私のケーキほほえんで
ケーキの中で媚びているケーキ
手作りのケーキの味は母の味
何くわぬ顔して孫がケーキ食べ
履歴書にケーキが好きと書いてない
君と僕一つのケーキつくく仲
出口はどこにもないケーキを崩してゆく
病妻の舌借って厨房俄主夫
すい甘いなめた舌から温い声
自分史の裏に舌出す鬼が棲む
饒舌の女にほんとの恋はない
病人の気ままナースの泣きどころ

希久志 里帰る気ままにさせている炬燵
洛 醉 パラ一輪の絆に気まましはられる
本蔭棒 悪友の気まま一升提げしてくる
敏 勝ち負けにこだわり過ぎてまた不仲
まつお 老いたのでラブイズベスト読み返す
美津留 ひと言が足りずに誤解されている
鉄心 分相応に生きる環状線のレール
ダン吉 震後一年ばくは小さな祈りだけ
笑風 憂きことも流して細る冬の河
重人 きさらぎの月の凄まじいポストまで
川童 芒かるかや母の土産に花摘んで
一步 風吹くな母が寒夜を昇ってる
柳 弘 お土産をキオスクで買う旅疲れ
娘二人誕生祝い持ってくる
追伸にうれしいことが書いてある
人並みの幸せといえるコッペパン

はびきの市民川柳会 櫻本 吐来報

さり気なく孫が手を貸す雪の道
行き先は風にまかせて落ち葉舞う
初詣 御神酒所を確かめる
お年玉今年も二人増えました
芳香が流れ杜氏が汲む新酒
屠蘇機嫌孫に弾んだお年玉
いろいろの夢を見て来た女坂
味噌汁の香る朝餉に持つ余裕
住専の借り主の顔見え隠れ
奥さんは只今孫に無我夢中
堅物を夢中にさせた片えくぼ

嘉矩 心機一転仕事に賭ける年男
萬的 母ちゃんの仕事ぶらんこ知ってる
歌子 アンケートの仕事は主婦と書いてます
一笛 晴耕雨読きようは大きく鎌を振る
比ろ志 ベテランは仕事へ無駄のない動き
すみ 愛の深き仕事着だけは手で洗う
義芳 もめている家は避けてる福の神
鹿太 もめ事をおさめる会議もめている
年代 もめる元使い果たして逝くつもり
芳子 星条旗ともめる勇気はないらしい
武庫坊 もめるだけでもめて夫婦はもとの鞘
伊三郎 子を送る朝はホステス母の顔
正小 終電で我が身に還る夜の蝶
瀧子 ホステスは誇りをもつてルージュ引く
澄子 ホステスの姉が育てた医学生
洵子 極楽に慣れ極楽に気が付かず
泰子 ひよっとして今が極楽かも知れん
昭平 極楽の首が浮いている露天風呂
えみこ 極楽は苦勞のあとに得たゆとり
たけし 雪景色 絵にも画けない風物詩
美喜 一言を信じて愛を守り抜く
辰子 温もりの母の一言 身にしみる
忠宏 追伸へまた一言を書き添える
敏 一言が万を伝える父の背な
六 食欲はまだ衰えぬフルムーン
志洋 子守唄聴けなくなつたおんぶ紐
妻と言つ紐にしばられ翔べません

尼崎尾浜川柳会 前田いわお報

雪景色 絵にも画けない風物詩
一言を信じて愛を守り抜く
温もりの母の一言 身にしみる
追伸へまた一言を書き添える
一言が万を伝える父の背な
食欲はまだ衰えぬフルムーン
子守唄聴けなくなつたおんぶ紐
妻と言つ紐にしばられ翔べません

四三郎 心機一転仕事に賭ける年男
吐来 母ちゃんの仕事ぶらんこ知ってる
みつこ アンケートの仕事は主婦と書いてます
一屯 晴耕雨読きようは大きく鎌を振る
美津留 ベテランは仕事へ無駄のない動き
扶美代 愛の深き仕事着だけは手で洗う
りつえ もめている家は避けてる福の神
一壺 もめ事をおさめる会議もめている
かつみ もめる元使い果たして逝くつもり
ダン吉 星条旗ともめる勇気はないらしい
金太 もめるだけでもめて夫婦はもとの鞘
まつお 子を送る朝はホステス母の顔
晋 終電で我が身に還る夜の蝶
希代司 ホステスは誇りをもつてルージュ引く
伴子 ホステスの姉が育てた医学生
和風 ひよっとして今が極楽かも知れん
重人 極楽の首が浮いている露天風呂
さとみ 極楽は苦勞のあとに得たゆとり

頑なな紐で同居が軋みだす
投網打つ紐へ魚信を確かめる
靴紐がブツリ切れた日の不安
紐をほどくと母の心が溢れ出す
寒のしじま救急車の音淋し

柳柳ねやがわ

江口

度報

誕生日ふしめ節目を越え白寿
太郎でも花子でもよし祝い膳
産声を冬の廊下待ち明かす
誕生日妻は好き好きしてくれ
母さんのおでんで重ねます誕生日
無器用に生きて重ねる誕生日
内閣誕生一応期待してみよか
激震に勝った産声高らかに
隣より少しリッチであればよい
初出勤の社内リッチな雰囲気
天下りリッチな暮し予約され
老いふたり夕日の散歩するリッチ
とてもリッチに娘の服を着て街へ
給料日少しリッチな昼にする
リッチな雲に乗りたいうちの孫悟空
リッチとは言えないけれど自由です
お土産を山ほど配るリッチマン
えらいこつちや妻が頭を下げてくる
切れ過ぎる頭で席が定まらず
先生が頭を叩く振りをすらすら
地割れした地図が頭の中に住む
拜んで拜んで頭を下げて嫁もらつ

正治 六浦 昌子 紫香 いわお
一途 透太 光つ たもつ かすみ たず子 頂留子 三千子 度 吉之助 文秋 朝子 シマ子 庸佑 洋 欣史子 日出子 波留吉 一鬼 冬葉 黎之助 博泉

定年へ妻は頭を下げてくれ
頭ひとつ抜ける的になりやすい
頭数揃えただけの展示場
頭ではわかつています厚化粧
頭からとうにあなたは消えている
器ではないと悟っている頭
いつからか頭に蜘蛛の巣がかかり
写されてこれが僕かと頭蓋骨

とつとり川柳会

武田

帆雀報

一風 時弘 藍子 恵子 磯 雅文 房路 小路

門松を外し働き蜂となる
心機一転考えながら飲んでる
心機一転極楽行きの金溜める
吉か凶か心機一転捻子を巻く
心機一転指輪を抜いて旅に出る
心機一転晩学なれと書を習う
心機一転まわしの色を替えてみる
還暦万歳跳ぶぞ翔ぶぞ飛ぶぞ
心機一転もつ女には振り向かぬ
心機一転先ず逆立をしてみよう
心機一転もつアデランス捨てました

岬川柳会

八十田洞庵報

一 枝 山人 輪多朗 一瑤 明美 行男 石花菜 美恵子 美恵子 とみお 帆雀

祝い年夢にお神酒がふりそそぐ
お神酒より千歳飴だよ七五三
絵馬よりもお神酒の方が神は好き
神棚へ供えたお神酒消えていた
カラオケもお神酒次第で盛り上がる
このお神酒飲めばあなたの妻になる
御神酒と言えば禁酒のひとも飲む
洋酒党お神酒もやはりウイスキー
貧乏神のお神酒はただの水である
神様をタシにお神酒だお祭だ
門松が客を呼び込む年の暮れ
門松が家の風格決めている
門松へ百点パパになりきろう
欲しいのは金だ門松はりこんだ
門松の梅の蕾が震えている
門松になれず私は竹箒
門松を伐りに尺余の雪を踏む
パチンコに負けて門松蹴つて出る
とんとんと門松叩く雪女

雄人 正和 一夫 孝男 静生 圭一郎 一京 大漁 完司 崇 侑里 舍人 多哥由 粗粒 悦子 喜与志 喬水 和歌子

のら猫に切干しの上昼寝され
耕運機朝日出る前動き出す
住専の尻拭いする力ない
お年寄り目覚めが早い朝日待つ
朝日の出裸で拝む露天風呂
初日の出 雲海でみる夢をみる
寝坊して朝日眩しい物干し場
陽が昇り今日のドラマの幕があく
悪夢から覚めて朝日に掌を合わす
出発に着付けぐずぐず父はやく
ゼロから出発共にねばりぬき
転勤で夫婦同伴見送られ
敢えて発つ死んでからでは遅すぎる
自立する女末練を捨てて来る
川の流れにたしなめられる僕の過去
走馬灯車窓の川も懐かしく

とみ 義正 いと 末吉 庄六 鉄男 孝子 俣子 太茂津 悦子 みやこ 龍弘 洞庵 よし子 正美

發展に川が流れゆくやみ
 溪流でバーベキューする解禁日
 雪解けの川を聞いてる露の臺
 ふる里の川で古傷洗います
 独り暮らし川の流れにさからわず
 開筈に山川海も怒り増す

良平
 みつ子
 萬的
 晶子
 年子
 勇

秀峰
 寿満湖
 雄々
 満江
 茂美
 昌枝
 蘭水
 水煙
 佳江
 三津江
 きみえ
 房子
 八重子
 多賀子
 まこと
 陽子
 良一
 清逸
 寿美
 しま子
 芙佐子
 草丘
 章子
 昭二
 愛子
 治代
 幸一

倉吉川柳会 谷口 次男報

御前
 節子
 よしえ
 ゆり子
 次男
 瑞枝
 かつみ
 苦句
 一揆
 秋女
 和枝
 荒介
 日枝子
 とみお
 黙光
 天雀
 螢

翠洋会 米田 恭昌報

草の根を分けても探す子の行方
 根っからの悪ではないぞ目がきれい
 磨かれて根瘤が床の間に座る
 根からのお人好しですまだひとり
 根も葉もない噂を立てるアンテナだ
 花盗人に根まで取られてまぼろしに
 袖の下根回しきつと出来ている
 根掘り葉掘り刑事みたいに何故聞くの
 根回しが済んで茶菓子を食べている
 下に根を下ろした松のド根性
 下手な医者歯根の膿を見逃した
 根っこに辿り着く在来線の夕陽
 馬鹿正直でいつも根元にひっかかる
 首根っこに鈴つけられてから動く
 根を降ろす場所と相手を探してる
 根が好き男だったとお葬式
 掘っても掘っても伝統の根の深さ
 役員を根こそぎ替えてみるがええ
 あどけない寝顔のどこに悪ひそむ
 この寝顔悪態教えたのは誰だ
 タヌキ寝入りの顔にしては上出来だ

俺の夢見たのか寝顔笑つとる
 寝顔とは安らかにしていいもんだ
 座長の椅子狙ったこともあるピエロ
 いずも川柳会 團山多賀子報

亡き妻を恋うて厨の男唄
 賢妻はそしらぬ顔で毛糸編む
 恐妻の死角に憩う場所がある
 知っている私を生かす妻の呼吸
 妻と言う名のもと苦渋の中に生き
 脱線もあつた妻との縄電車
 手抜きして妻いそいと趣味に生き
 土踏ます春の息吹きに触れてみる
 寝たきりの髪すく春の陽の和み
 春よ来いと一緒になう妻がいる
 根雪溶けこけしも春に向き直る
 もどり寒 春の足音立ち止まる
 ぼんやりと遠く見ている失語症
 琴線にかすかに触れた遠い人
 遠い日の夢に終った愛の文
 遠い日を遊んで老母の花いちもんめ
 遠い春信じて寡婦は人を見ず
 望郷の思い遙かに遠い駅
 来たバスに素直に乗った日の悲劇
 チョコレート素直にあげてから微熱
 素直にはなれぬ男の背が寒い
 素直さを浮世の風が弄ぶ
 素直さの他に取柄のない私
 新婚の当座は素直だったのに

快調の間に鬼と妥協する
 気の弱い若者髭がフオローする
 居ねむりの横の頭が肩に乗り
 鬼よりも貧乏神へ豆を投げ
 人間の弱さ自然にさからえず
 ペテランの鼻新人へ上を向く

富柳会

池

森子報

上得意あてにしてます胸算用
 トップの座やっぱり平がなつかしい
 植木屋が上からはめる松の枝
 上見れば上りがないから並でいい
 始発駅苦労を覚悟乗る二人
 亡夫と妻孤独をつなぐ紅い糸
 筋通すより妥協する事知っている
 始めから悪巧みして走る鬼
 上よりも下よりも好き中ぐらい
 歳重ね愛の形が丸くなる
 先斗町古い仕来たり事始め
 顔上げてごらんいいことキツトある
 子の認知上を下への大騒ぎ
 誕生が始発駅だと振返る
 戦後五十年節目に神の試練あり
 三途の川体験渡りしてみた
 三合で父がラッパを吹き出した
 新風へ米寿の夢の苗木市
 風花の向こうに花芯だけ残る

川柳塔おとり

上田

俊路報

正坊 恭昌 兼治郎 宏子 鬼遊
 冬虹 紅月 紅紫朗 悦子 鐘造 文子 方子 宗一 昭水 アキ 智久 登子 文次 トシエ

花梢 維久子 森子

北キツネ待つ三脚に雪が降り
 懐が寒いと口も重くなる
 おはようが凍てつきそそうない息
 寒い日の省エネ早く床を敷く
 寒の水呑んで元気な児に育つ
 疑えば心に寒い風荒れる
 愛一つ消えて人間寒くなる
 日の丸を上げて五輪の鬼となる
 日の丸を誰がたてたか無人駅
 庭旗たてた先祖の碑が傾く
 優勝旗校長室でいばつてる
 日の丸へ背筋のぼして仰ぐ祖父
 白旗が父の戦史に書いてない
 中立の旗には風がはらまない
 そっくりと弁当食べてなお足らぬ
 人気者そっくりまねて顔を売り
 ボーナスはそっくり前を通過する
 親譲りそっくりの筆伸びがない
 参観日子にそっくりな親がくる

川柳藤井寺

高田美代子報

みなさんが求めるような人になれ
 愛される女になってからの愛
 未知の国へロマン求めて旅つづく
 あと十年求めるものがある強み
 求め合うふたへそと春の風
 正解を求め歩く修羅の道
 みかえりなど求めはしない恋だった
 俗人でムダを求めてはかりいる

舎人 孝子 宏章 由多香 野草 黙光 艶子 銀嶺 千秋 道子 余志身 雄々 みさを 俊路 崇 伝住 真一 登美 幸次郎 昭水 悦子 みよ子 一郎 一屯 絹子 扶美代 美代子

求め合う二人を包むささめ雪
 代償を求める石が置いてある
 早々に軽い財布を任される
 長男に任すと決めていた誤算
 任したと言つてあれこれ口を出す
 着る服を妻に任せて赤増える
 任すのはあの世へ行つてからにする
 諦めなしゃーない任す言うたから
 任すなら言わぬが花の出来不出来
 留守番を任されれば鍋みかく
 余生なら好きなお方と風任せ
 任される度に大きくなってゆく
 任されてやつと男の顔になる
 今日からはあなたに任す広い胸
 任されて暮しの彩を塗り替える
 任されて父は自信の舟を漕ぐ
 我が家の側活断層がある噂
 礼儀作法今は今行事の隅で生き
 恙なし程よく焦げた小餅の香
 弁護士に任せ強気の離婚沙汰

大阪川柳の会

とき 4月3日午後5時開場・同6時締切
 ところ サンケイビル本館3階322号室
 宿題 ファイト都倉謙三▽叶う▽前川千
 津▽火種▽宮崎シマ子▽▽磯野いさむ
 会費 500円(各題2句)
 賞 各題秀句に産経新聞社賞

美房 かげお かつみ キミ子 志洋 正一 敦子 六點 かな女 愛子 アキ 鐘造 修六 昭子 花梢 和樹 恒雄 みのる 春蘭 史郎

大空のこころ

(63)

橘 高 薫 風

方を習ったに違いない。そのためにお寺にはあんなに沢山木が植えてあるんだよ。
死ぬことが恐らなくなる蟬の声
⑬蚊—縞のバッチの梯子酒。のみてえなあ、熱爛で、恋をさせる奴のか。あれは駄目だ、毒になる。

帰省して壁に去年の蚊の血を見

⑭油虫—近頃の家庭には長火鉢というあの結構な奴が少ない。一種の住宅難なんだね。
油虫—この世帯を知った色

⑮浮塵子(うんか)—それつ切り込め/わあ

。だから、あんまり大きな口をあけて唄なんか歌うなといったんだ。
阪神に乗って浮塵子の梅田入り

⑯黄金虫—E・A・ポーなんて大嘘つきだ。
このお人好しに、あんな気の利いた役が勤まろうとは思えない。そうではないか、カタマリ氏よ。

子がつゆずつて呉れる黄金虫

⑰蠅—冬、硝子の一隅。ビビと鳴った翅音もいまはあわれなひとあがき。罪業深き身の、あきらめきつた現世ではある。なむあみだぶつ。

蠅じつと冬の陽ざしへ拝むなり

以下略。須崎豆秋は小動物を見詰めて佳吟をほしいます。作句へのヒントになる。

せるのが芸当だったのかも知れない。

はかなさは蜜の腹の死のあかり

⑥蝗—君も同感だろうが、神様の方があきれてなさる。兎に角、つけ焼とは考えたもんだ。

蝗取り畦に草履が二足あり

⑦蜻蛉—一体どうして眠る気なんだろう。

子がねらう蜻蛉の上に天主閣

⑧蜂—戦国時代、高踏派、耽美主義、ごろつき。蜜蜂か、あれはこそこそ貯めて町人だ。蜂一つ座敷を空にしてかえり

⑨兜虫—はりこんだのはいいが、ちと重すぎて困る。だがどうだこの前立。われこそは鶯の巢文珠山の陣に：か。

仰向けになり兜虫親しまれ

⑩かまきり—このバネ仕掛め。

かまきりのこちらへいのおそろしき

⑪虹—牛曰く、うるさいね。何処まで従いて来る気なんだい。脚より先に、俺は尻尾が疲れちゃった。

二里来たと知らず虻舞う牛の背

⑫蟬—坊主はきつとこいつからお経のうなり

活発なエッセイや句評にまじり岡田某人が

川柳昆虫標本箱を書いている。啓蟄から四月

へ、うごめき出した虫を観察して一息入れることにする。氏は芥川賞候補にもノミネートされた『川柳雑誌』での異色作家だった。

①天道虫—街のピエロ、洋服特価大売出しの

ピラ配り、その癖一寸瞑思想家なんだ。

哲学者斜に天道虫歩き

②水すまし—一度は歌舞伎座のリンクへ行きましよ。

家出した影とは知らず水すまし

③かねたたき—細々と、しかも耳に沁み入るあの音は遠いのか近いのか、きつとこいつは青銅製、スイス出来かも知れない。

かねた、きはなしとぎれてふたりいる

④蝶—むしろ秋の、ヒラヒラとあるかなきかがよろしい。勿論白いのね。模様入りは、な

んだか捺染工場を連想していけない。

前身は知らず女の薄化粧

⑤蜜—死んだら灯を消すもんだよ。いやらしい。いや、もしかしたらこいつ時々消してみ

本社 三月句会

三月二日(土)午後五時半

メンズフアツションセンター

季節は確実に移ろい、草木悉く芽吹く春となる。三月句会には会場の都合により早められ二日となったが、八十一名の参加により定期開催された。

雛の宵でもあり、華々しく女性選者ばかりの登場となる。

阪神大震災から一年二ヶ月、お話は風化させてならぬ被災体験を西宮市の三人が代表して生々しく語る。

最初は西口いわゑさん。夢なら醒めよと今日までいく度思ったことか。揺れている時間をとても長く感じたのに、あとでたった二十秒間と知る。隣に寝ていた夫が起き上がらないので声をかけると、足が倒れた小箆箭の下になっていられるらしい。ようやく助け出し、大した怪我でないことを確かめ、階下に降りてびつたり、家具も冷蔵庫もみな倒れ、二階に寝ていてよかったと思う。壊れた壁から暗い空が見え、歪んだ戸をこじ開けて戸外へ出て

またびつくり、街の信じられない惨状を眼のあたりにする。

次いで奥田みつ子さん。突き上げられ、がくんと落とされ、わけのわからない瞬間をマシオン二階の自宅で迎える。幸い建物はどうにか無事であった。しばらくして寒いと感じたのは、無施錠の窓が全部開いてしまったせいである。家具が倒れて戸外へ出るのも容易でなく、夜が白々と明ける頃ようやく外へ出る。建物と地面の間にすき間ができていて地盤が二十センチも沈下していた。戸外の様子は一変し、あるべき建物がない。そして四十日余り水道もガスもない暮しとなる。

最後は門谷たす子さん。御主人の震災記録を読んで思い出しながら語る。激しく突き上げられた上下動から横揺れに変わり、自分達の場合は家具の少ない階下に寝ていたことが幸いし、十センチほどの差でたすさんの下敷きにならずにすむ。壁、タイルは悉く落ち、食器は高価なものほど割れ、ガラス破片が山となる。道筋により被害が異なり、運不運は紙一重と知る。以上であるが三人共に、この体験により、川柳仲間の絆の太さを再確認し、たくさんの有形無形の好意に励まされ、なぐさめられ、川柳によって精神的苦痛から立ち直ることができたことと結ぶ。

月間賞は平松かすみさん(寝屋川市)に輝く。

(司会) 岳人 (記名) 森子・シマ子

(受付) 隆・寿美子・かすみ

席題「毒」

神夏磯典子選

毒舌をユーモアと聞く古稀の知恵 吐 来
 裸体写真ばくにはやはり目の毒だ たもつ
 インシュリン打ってまんじゅう食べている 冬 葉
 目に毒なフアツション街にあふれる 義 子
 毒になる酒が旨くて止められぬ 金 太
 毒になる流し目にあう北新地 信 治
 定年ですつかり毒の抜けた父 鹿 太
 抵抗もなくカモになり毒の花 一 三
 美しい花ほど毒を伏せている 元 紀
 通ぶったふぐのしびれを自慢する 隆
 毒舌にうんと吞ませて寝かせよう 諷 云 児
 あれも毒これもあかんと医者通い 満 津 子
 目に毒と言うからよけい見たくなる 文 秋
 毒のある言葉あとから効いてくる み つ 子
 バーゲンのカタログ妻の目に毒だ 鬼 遊
 窓際で毒にも薬にもならぬ 石 舟
 毒舌へチューインガムを噛んでおく 一 歩
 子の遊びサリン撒くぞが飛んでくる 森 子
 本当のうまさ知ってるフグのきも 度
 少量の毒をクスリとして生きる 美 代 子
 美しい毒から今日も来た手紙 み つ 子
 冗談に毒をぎょうさん混ぜておく 月 子
 毒がまわり僕は生氣をとり返し タ ン 吉
 言いたいこと言うがちよっとも毒がない 満 津 子
 毒も吞む覚悟で守る自尊心 澄 子
 筋書きがきれいすぎて毒盛れず 弥 生

今の世にボクの毒舌知れたもの
愛という極彩色の毒を編む

百薬の長を毒だと止められる

毒舌へすしとまどう傷がある

佳

くすりに毒にもなろう妻だから
落着いて毒の効き目を確かめる

かけないでやさしい言葉 毒だから
裏切ると毒もられそうやめとこう

毒のある言葉の裏に愛がある

いたわりの言葉こころの毒を消す

人

毒を盛る話はしない日向ぼこ

地

母さんのお毒味役でみんな無事

天

低血糖 毒なきとくに救われる

軸

兼題「コップ」 木本朱夏選

コップ一杯の水有難し震災忌

安物のコップが無事だった地震

仮設での節句コップの桃が咲く

参道の甘酒コップ欠けていた

紙コップお砂あそびに飽いている

紙コップでおとなの意志は崩さない

ほんわかとペーパーハブラシのあるコップ

蛇口全開コップを満たすわたしを充たす

シャボンソンを洗める私だけのコップ

桂香

桂香

一步

桂香

鬼遊

寿子

森子

白湊子

朝子

泣き騒るコップ宥めている夜霧

コップから川の澁みが見えてくる

カンパイの好きなコップが並んでる

コップの中の嵐を連れて午前様

夫婦喧嘩コップが飛んだ若かった

コップひとつ喜劇の音で割れました

コップ酒妻がなにやらふくれてる

わたくしのコップで水を飲まないで

用意した矢玉が尽きてきたコップ

指で弾いてコップ転がす物思い

硝子コップに挿してもバラはバラの顔

蟻さんが心中してる紙コップ

紙コップ何を入れても素直です

コップ直立花嫁の父となる

たてがみを父取り戻すコップ酒

コップ酒あおれば海が吼えたてる

沈黙の深さをシェイクするグラス

マニアル通りの笑顔で運ぶ紙コップ

クスリ飲む水だと知っているコップ

検尿のコップ ナースは事も無げ

油断していると灰皿になるコップ

コップ酒私に似合う風景だ

佳

捨てました軽い思想の紙コップ

濃いミルク飲ます牧場の紙コップ

コップ伏せ一言居士がもの申す

ティファニーのコップと美しく坂く

コップの中の虹に興味をもつ詩人

人

桂香

英子

天笑

吐来

章久

希久子

月子

房子

しげお

太茂津

義子

かすみ

典子

雅文

勇太

弘直

森子

和子

なにはともあれコップを二つ出している

地

王様の或る日 ひとりのコップ酒

天

ポランティアもう浴け合った紙コップ

軸

紅の痕拭いてさよならするコップ

兼題「害」

松原寿子選

一年が過ぎ災害の傷癒えず

肺ガンになろうとたばこ止めません

真っ白い皿の命を喰うヒト料

節穴の一つが害の位置にある

多情多感愛の加害者かも知れぬ

シナリオを妨害されたヤジロベエ

害虫の役も時どきやっています

絵本の中に大人は害を捨てている

いつの世の害も男の傘にある

お雛さまのほくろは虫がつけてくれ

障害を越すたび脱皮繰り返す

無添加に深くこだわる母の愛

消しゴムが流産させる私の句

群の中美しすぎるのも害だ

害のない程度に借金しています

人畜無害のことは選んで日が暮れる

あきらめぬ母に自閉の扉が開く

被害の訴え 裾から冷えて来る

雛飾る被害妄想など忘れ

ゴミの日でないのに夫すてられる

智子

弥生

一風

朱夏

せつせと家業にはげんではいるマツクイムシ
イントロで始まる酒の害じわり

害虫と僕はよばれているらしい
災害に人智及ばずおののいて

公害と認めるまでの長い道
冷房完備祖母と猫とが害をいう

人間の都合で害にされた虫
害のないおひとやなもて気の悪い

害虫はわたしお金も優しさも食べて
薬害を出したしお金も優しさも食べて

薬害を喰う真つ赤な葉包紙
害虫を勉強部屋で飼うている

どんな害受けても仮面外ささない
不眠症夜の振り子が害になる

啓蟄やジェラシーという害虫も
損害の椅子に野心が朽ちている

椿の首は被害者意識など持たぬ
居心地の良い童宮は害だらう

害になるかも知れぬ情けをさし上げる
天

血液の害へ涙腺切れている
軸

災害地厳しい風に起ち向う
壽子

兼題「島」
西口 いわゑ 選

雲流れ島捨てる日の波の音
冬葉

壽美子

章久

ダン吉

悟郎

石舟

信治

いわゑ

朝子

森子

英子

しげお

太茂津

美代子

みつ子

雅文

美代子

朱夏

たず子

冬葉

壽子

冬葉

冬葉

冬葉

亡父亡母と還らぬ島の影ダブる
離れ島連絡船が命綱

見えている近くで遠い島しのぶ
島を出て味わう島のあたたかさ

方言で島国根性発揮する
玉碎の島を夕陽が語り出す

赤道直下の島で拾ってきた命
橋架かり島は一日さわがしい

定年後二人で暮す島がある
島へ来て小さな自分恥じている

争いもめ事もない過疎の島
青い鳥求め都会へ島育ち

島で着る黒がはなやぐ日暮立ち
あたたかく失意つつんでくれる島

大根をお札に島の診療所
この島に男の胸に沁みる唄

海へ向いた墓に尋ねる島の悲話
巢立つ子のつばさやすめる島でいい

ふるさとの島がだんだん病んでいく
島一つへなせ銃口をむけている

南海の孤島還らぬしやれこうべ
人工の島昔話が拾えない

小さな悔い島の波止場へおいてくる
島の灯が少年の目を呼び戻す

鳥だけの島だ人の手は入れぬ
残留兵が生きている島かも知れぬ

いさかきを島が聞き耳たてている
島の唄うたい少女は島を出す

橋が出来ても老母は島から出たがらぬ
吐来

風島の女あたまに荷を載せて
ぼんぼん船が島のくらしを守ってる

一輪の椿を添えて島使り
罪いまだ過去を赦さぬ島がある

島に来て海は広いなと思つ
美しい列島欲で汚すまい

島づたい春の海ゆく流し雛
遍路笠島には島の修羅がある

黒々と父の遺影になった島
小さな島で小さな虹になる二人

水仙と島の話をしています
軸

兼題「光」
宮西弥生 選

古くとも磨けば光る骨董品
光らせる必要のない骨董屋

吐来

悟郎

庸佑

澄子

二南

一風

太茂津

金太

希久子

典子

愛論

章久

雅文

頂留子

正雄

英千子

信治

朝子

義子

桂香

勇太

希久子

壽美子

風島の女あたまに荷を載せて
ぼんぼん船が島のくらしを守ってる

一輪の椿を添えて島使り
罪いまだ過去を赦さぬ島がある

島に来て海は広いなと思つ
美しい列島欲で汚すまい

島づたい春の海ゆく流し雛
遍路笠島には島の修羅がある

黒々と父の遺影になった島
小さな島で小さな虹になる二人

水仙と島の話をしています
軸

兼題「光」
宮西弥生 選

古くとも磨けば光る骨董品
光らせる必要のない骨董屋

光らした靴にわたしの馬印
夫には内緒の指輪よく出る

退社ベル私の目玉光り出す
自分らしさが光る六十歳の鏡

光から逃げるあなたは影法師
海亀の涙に愛の光射す

淋しくて蛍光灯をとりかえる
人間も光を当てた方へ伸び

明日への光求めて繰るページ
朱夏

風島の女あたまに荷を載せて
ぼんぼん船が島のくらしを守ってる

一輪の椿を添えて島使り
罪いまだ過去を赦さぬ島がある

島に来て海は広いなと思つ
美しい列島欲で汚すまい

島づたい春の海ゆく流し雛
遍路笠島には島の修羅がある

黒々と父の遺影になった島
小さな島で小さな虹になる二人

水仙と島の話をしています
軸

兼題「光」
宮西弥生 選

古くとも磨けば光る骨董品
光らせる必要のない骨董屋

光らした靴にわたしの馬印
夫には内緒の指輪よく出る

退社ベル私の目玉光り出す
自分らしさが光る六十歳の鏡

朱夏

狸村

久峰

壽子

正坊

一步

弘直

鹿太

和子

読むたびにきらつと光る風塵抄
ふきのとつ春の光に生かされる
目の中に野心が光る風の駅
やれば出来る根性に光ふりそそぐ
お隣の車庫のベンツが光る朝
海亀の涙が光る産卵期

三月のひかりは山も野も起こす
さり気ないところで光る立志伝
蠟燭の光が仏目覚めさす
光らねば消され光れば叩かれる
光彩は一瞬 冬の火花にも
古井戸の古い光は捨て難し
一筋の光をもらう絵馬をかけ
逆光で撮ればわたしも美しい
一杯のビールで光る妻の頬
ときどきの祖母の助言が光ってる
食卓が光る旬には旬のもの
月曜日男は光らねばならぬ
ひまわりが何時も光を見て笑う
春ですれ過疎の村にも風光る
流れ星何を祈っている幼児

モーツァルトに光をもらう春の鬱
朝の光生きよ生きよと声がする
一条の光眼帯とれました
あの人が笑うときれい歯が光る
七回忌は明るい光からゆれる

貝がらの光にふるさとを思つ

狸村 絹子 勇太 悟郎 雅文 東雲 美代子 吐来 路児 洋 茜 元紀 絹子 朱夏 天笑 冬葉 信治 智子 利武 萬的 冬葉

地 小さく光る足跡母の道しるべ
天 月光に許しを乞うてから眠る
兼題「足」 働いた分だけ靴が光ってる
橋高薫風選 春の景ひと足早く駅につく
故郷の大地素足に心地よい
世界が飛び込んでくる朝の足音
あなたさま足痛おすと女難さま
二十二よ子のおさがりを履くわたし
小さいが熱い足跡子に残す
ライントランスのびのび足が揃う春
赤ちゃん足蹴りあげる春の空
職のないくらしへ日足伸びてくる
被災地へひと足早くフリージア
地に足のつかぬ意見は聞き流す
偉大なる足跡サンタマリア号
寒い朝友の義足の音がする
ミニの孫 足太からず細からず
末っ子に足の長さは負けている
新世紀へ向けてすらりと伸びた足
私をささえて妻の足太し
ひざ枕すこし太めの足がいい
風雪の滲む大きな父の足
足まめにハローワークに出かけていく
競馬に負けた足並んでる串カツ屋

希久子 みつ子 弥生 三男 一女 一步 義子 信子 いわゑ 英壬子 朱夏 一二三 満州 稚代 隆 路児 正坊 桂香 みつ子 金太 諷云児 久峰 萬的

間違いなくわが家向いている千鳥足
真夜中も木馬の足は駆けつづけ
足向けて寝ていませんと切りぬける
足向けて寝られないのと如才ない
足あらう男寡黙になつてゐる
異次元でモデルの脚は風を切り
吉祥天ならベデイキユアも拝みたし
マドンナの足は歳月寄つけず
不撓不屈義肢励ましている軍歌
誇り持ち汚してならぬ恩賜義肢
左足で右足を掻きひとりきり
大草履足の形にある祈り
日記帳の中へ足跡が消えた
野良犬がふんと笑った二本足
必要な太さと思つ象の足
足の裏見せてどうやら気をゆるす
足つけてあげる私の雪だるま
人 かるーく生きてフリーサイズの靴下よ
地 寒行の僧侶の足に炎見る
天 足袋を履く母の人形になるために
軸 いじらしや揃う百足の足見れば
たもつ 正雄 一風 庸佑 ダン吉 天笑 桂香 弥生 悟郎 悟郎 信治 典子 朱夏 和子 度 月子 ころろ 森子 弥生 かすみ 薫風

(清記—希久子)

柳界展望

準賞は河原千寿・清水悠
貴女・灰原泰子・大家都

〔弓削川柳社賞〕

振出しへもどつて脱いだ
鬼の面 永広 鴨平

準賞は大塚貢範・江原道

子・谷川渥子・藤原一平・
西田貞女・窪田和子

★竹原川柳会は、平成7年

度の年度賞を決定した。

〔最優秀作〕

魂が神経痛を病んでいる

土橋はるお

〔優秀作一席〕

磨かれて彫られて石は目

を覚ます 藤解 静風

〔同 二席〕

同じ血の温さと思つ手を

つなぎ 池田 勲

★『川柳大学』創刊記念句

会が2月11日、神戸市の楠

公会館ホールで開かれ、同

人の藤村宏子さんが秀句賞

に輝いた。題「手」。

万灯会 手に手にともす
命かな

★第17回熊本県民文芸賞の
川柳部門1席に寺中良好、

2席に宮川蓉子、3席に佐

野タキの各氏が選ばれた。

自分史は句読点さへ迷つ

もの 寺中 良好

★番傘川柳本社4月句会

婦人部企画は4月9日午

後6時からアビオ大阪で開

く。おはなしは放送タレン

トの田口美幸さん、宿題と

選者は、地図長江時子▽

乾く大村美千子▽便り

西出楓楽▽耳森中恵美子

▽薬儀野いさむ。席題1

題。各題2句・午後7時締

切。会費500円。

★尼崎桜保存会・尼崎川柳

協会の共催により第1回桜

まつり川柳大会を4月14日

正午から尼崎市立立花地区

公会館で開く。宿題の「桜」

は黒川紫香・佐藤純一・田

中薫・田淵定人・萩原金之

助の5名共選で、累計得点

上位から表彰、宿題の「雑

詠」は森田栄一選、いずれ

も各題2句、午後一時半締

切。会費500円。表彰は

知事賞・県会議長賞・県民

局長賞・尼崎市長賞・同市

議会議長賞ほか。

★番傘わかき川柳会創立

50周年記念川柳大会は5月

4日午前10時からフェイセ

ス月華殿で開く。宿題と選

者は、印鑑今川乱魚▽演

技奈倉楽甫▽若い細川

聖夜▽わたし奥山晴生▽

えにし片岡つとむ▽髪

森中恵美子▽冒険梶川雄

次郎▽太い橋高薫風▽坂

定本広文▽走る外山あ

きら、各題1句・午前11時

半締切。事前投句「匠」

榎本信治謝選は、4月4日

までに下33奈良市百楽園2

4・17・藤原一志方大会

事務局へ。会費3000円。

★時の川柳社は5月12日午

前10時半から神戸市立福祉

第7回時の川柳交歓川柳大

会を開く。講演は寺尾俊平

氏、兼題と選者は、あいま

い当日発表▽泣く貞岡

信太郎▽昨日佐藤純一▽

穴中林酔虎▽扉小出智

子▽大胆中田たつお▽足

(脚)小松原爽介▽仲間

特別課題石井冬魚(各

題2句・正午締切)、会費

1500円(記念品、昼食

発表誌呈)。

▼計報▲

山口米一氏(同人口口新

子さんの父、東京都)は、

2月23日死去、72歳。

▽芳志△

■片上久子さん(片上英一

氏夫人)から亡夫供養とし

て金一封、拝受しました。

▽訂正△

■3月号P1(巻頭言)

2段4行目「武田泰雲師」

↓「柳田泰雲師」▽P50上

段16行目(秀句鑑賞)「崇

柳柳塔わかやま吟社は、

平成7年度の各賞を次のと

おり決定した。

〔葵水賞〕

人生の岐路を背負うた重

い絵馬 垂井千寿子

〔あおい賞〕

矢面に立つ羽目になる読

み違い 中後 清史

〔たちばな賞〕

美しい嘘を女の彩で聴く

山根めぐみ

〔課題吟賞〕

春つかむ箸あたふたと波

を打つ 坂口 公子

★弓削川柳社は、平成7年

度の二賞を決定した。

〔紋土賞〕

半身不随の父休耕を許さ

ない 恒弘 衛山

命かな

万灯会 手に手にともす

命かな

4 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 役 句 先
堺川柳会	4日(木)午後1時から なだめる・楽(らく)・しっかり・中止	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西口西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	5日(金)午後1時から 胃・咲く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時から 光・救う・突然・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
ほたる 川柳 同好会	9日(火)午後1時から 張る・新しい・土	豊中市立螢池公民館 阪急宝塚線螢池駅西へ150米 〒560 豊中市螢池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川柳会	11日(木)午後6時から 味・宿る・テープ・意図	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 まつえ	13日(土)午後1時から 煽てる・主役・愛	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔 わかやま	14日(日)午後1時から 光・バランス・仲間	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時から 天気・遊ぶ・うとうと・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木) 正午から 悩む・枕・うかれる・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島風云児
南大阪 川柳会	19日(金)午後6時から 背後・粉らわし・やがて・ライト	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸和田 川柳会	20日(土)午後1時半から 身勝手・報い・迷路・目標	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地理村
川柳 ねやがわ	21日(日) 正午から 得心・口止め・顔色・自由吟	寝屋川市民会館 京阪寝屋川市駅東口からバス市民会館前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
富柳会	25日(木)午後1時から 鍵・歯切れ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
京都 塔の会	25日(木)午後1時から 園・眠い・芝生	ラポール京都 阪急西院駅東へ400米 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町 都倉求芽
東大阪 川柳 同好会	27日(土)午後6時から 分ける・ライバル・やがて・魂	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市川 柳会	28日(日)午後1時から たっぷり・居眠り・アンケート・呑気	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

記憶している。

★これは後で知ったことだが、今までの国語読本は単語の羅列であったのが、この読本は開巻第一ページから文章で始まっているのも異色である。当時の読本はもちろん国定教科書で、これらの文章を書いたのは、文部省図書監修官の井上超

以前は、「ハタ／タコ：」であつたというが、私は実物を知らない。
★次いで昭和8年から登場したのが、「サイタ／サイタ／サクラ／ガ／サイタ」で始まる、いわゆる「サクラ読本」である。当時、私は近所に住む一年生に見せられて、内心うらやましかった。読本と言えは墨一色と決まっていたのが、これは何と色刷りの絵本ではないか。淡彩の桜の花の絵が美しかったことを今も

持ちながら、文部省の一言吏として生涯を送り、欧米における小学校教育の実情をつぶさに視察している。
★この読本は、昭和15年まで使われ、「アサヒ読本」に後を譲るが、今日、国語教育史上最高の教科書として評価されており、複製版によって全巻を通読した澤地久枝は、「その程度の高さに圧倒された」と「心だより」で述べている。(正)

どちらも川柳

昨年三月、朝日新聞の朝刊に、

「大震災 川柳で詠めば……」の見出しで、各結社を代表する四十一

人の句が大きく掲載された。

「復興を六甲山も見ています」

「瞬にはたるの墓となる神戸」

「倒れた家の写真を見せてくれる

友」——他にもむごい言葉の句があ

った。同じ月の「天声人語」に、

「悲苦を超えて」として、

「祈る

祈るただただ今は今を祈る」「あの顔この顔生きてくれ夜になる」

「頑張張ってなんて言いたくない言葉がない」が載った。

前の三句はぬくぬくとしたこた

つの中でテレビを見ながらの句、

後の三句は被災した人の、がれき

の中の句。ここで言えることは

読者はどちらの句も、これが川柳

として解釈することである。

(藤井二三)

ひとこと

「悲苦を超えて」として、

「祈る

は、みんないとこまでは、そこからもう一歩突き抜けていけない。絶えず自分が生きて、何か新しい句づくりをしなければ……と

は、一年進級する時である。三年生よりは四年生の方が

漢字も増えるし、文章もむ

ずかしく、理解力も増して

ゆくはずだ。

☆四月は年度初め、学校では一年進級する時である。

三年生よりは四年生の方が

漢字も増えるし、文章もむ

ずかしく、理解力も増して

ゆくはずだ。

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（6月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

「川柳塔」への投句について

- ① 川柳塔蘭への投句は同人、水煙抄欄への投句は誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。
- ② 両欄とも、この投句用紙を使って8句をお書きください。
- ③ 渺湖抄欄・茴香の花欄および課題吟（一路集）への投句は、同人または誌友に限ります。ただし、茴香の花欄は女性だけです。
- ④ 各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

作品募集

川柳塔 (8句) 橘 高 薫 風 選
 水煙抄 (8句) 西 田 柳 宏 子 選
 渺湖抄 (3句) 小 出 智 子 選
 茴香の花 (3句) 八 木 千 代 選
 吟庭 「 寺 沢 み どり 選
 課題吟 (3句) 「 履 く 浅 田 隆 樹 選
 「 マンガ 」 内 海 幸 生 選

6月号発表 (4月15日締切)

7月号
 課題吟 「 砂 」 「 泳 ぐ 」
 「 入 門 」
 初歩教室 「 煙 」

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番
 電話 (06) 941-1914
 発行所 川柳塔社

〒545 大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六
 ウェムラ第2ビル202号室
 編集兼 橘 高 薫
 発行人 藤 原 童 心 社
 印刷所 藤 原 童 心 社
 平成八年四月一日発行
 定価 六百元 (送料76円)
 半年分 四千元 (送料共)
 一年分 七千九百元 (同)

本社4月句会

と き 4月8日 (月) 午後5時半
 と ころ メンズファッションセンター3F
 中央区内本町1-1 電06・941・1918
 (地下鉄谷町4丁目下車) 交差点南西角
 兼 題 「 子 供 」 高 須 賀 金 太 選
 「 繪 葉 書 」 西 出 楓 楽 選
 「 散 る 」 小 池 し げ お 選
 「 居 間 」 安 藤 寿 美 子 選
 「 土 産 」 橘 高 薫 風 選
 席 題 ◎3月句会兼題「光」は宮西弥生選でした。
 1題 当日発表 各題2句以内
 会 費 5000円

本社5月句会 7日 (火) 予定

兼題 「 笑 い 」 「 進 む 」 「 直 線 」
 「 渾 名 」 「 す べ て 」

夜市川柳募集

第11回「空 気」中 尾 藻 介 選
 ハガキに3句 4月末締切
 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺 川 柳 会

NHK川柳作品募集

課 題 「 電 話 」 森 中 恵 美 子 選
 ハガキに3句 4月10日締切
 投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
 「 文 芸 部 」 川柳係
 発 表 4月27日 (土) 午前11時5分
 からラジオ第1放送 (予定)

西日本文字放送作品募集

課 題 「 屋 根 」 森 中 恵 美 子 選
 ハガキに3句 4月15日締切
 投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
 大手前ウサミビル3階
 西日本文字放送 川柳係



本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 教育情報出版

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
☎06-658-8741(代) FAX. 06-652-2928

第20回 全日本川柳熊本大会

とき 6月9日(日) 午前10時開場

ところ 熊本市民会館(熊本市桜町1-3)

宿題 第一部(事前投句・5月10日締切)

「要領」 浜野奇童選

「たんぼ」 西来みわ選

「論」 矢須岡 信選

◎各題2句・無記名、封筒に住所・氏名を明記し、投句料1000円(定額小為替・現金書留)を同封して左記へ

投句先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11

ステツブイン南森町702号

全日本川柳協会大会係

宿題 第二部(当日出句・午前11時半締切)

「枝」 外山 あきら選

「今昔」 西谷 東山選

「霧」 川路 泰山選

「方角」 橋本 比呂選

会費 3000円(昼食・記念品代とも)

観光 6月8日(土) 3000円

前夜祭 同 午後6時半 7000円

宿泊 ニュースカイホテル・ホテルリントス

申込先 〒860 熊本市八王寺町3-16 吉岡方

全日本川柳熊本大会事務局